ガンダムになった俺の異世界放浪記。

七誌

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ガンダムになった俺の異世界放浪記。

【Ｎコード】
Ｎ５９２０Ｖ

【作者名】
七誌

【あらすじ】
現在とは違う時代、どこかにあると言うスダ・ドアカ・ワールド。
人間、妖精、ＭＳ族、そしてモンスターが共存する世界・・・そんな世界のガンダム族に転生することになった俺。
しかし、転生した場所は予定の時代よりも遥か過去！？

俺の明日はどっちだ！？

転生することになった主人公が送る異世界放浪記、始まります。

プロローグ1（前書き）

プロットが出来たので掲載。

プロローグ1

プロローグ1

皆さんは輪廻転生というものをご存知だろうか。

最近では二次創作によく使われるネタだが、知らない人に説明しよう。

輪廻転生。仏教で使われる用語で、生物が死んで別なものに生まれ変わる過程を永久に繰り返すことをいう（ちなみに記憶・才能と言ったものは一旦リセットされてしまい、更に言えば上記にあるように別な生き物に生まれ変わるのであって、転生する時に人間であったものは人間に転生するとは限らない）。

さて、これをここまで長ったらしく話したのにはちゃんと訳がある。

つい先ほど俺は死んだ。何故か家に突っ込んできたトラックに潰されて！

内蔵は飛び出てるし、脳漿ぶちまけるし！（脳みそってピンクじゃないんだなぁと一生知りたくも無いことを知ったのは内緒）。

死んだ後、気づいたら白い空間にいた俺は、何かに見られていることに気づき、そちらを見た。

そして俺はそれを見た・・・。

その姿を見た俺は、あまりのショックに動揺を隠せず、結果として硬直している。

何故かって？それは日本に住む人間なら殆んど知っている筈の物だったのだから！！

俺を見ていた何か、それは

・・・・・ガンダムである！

大切な事なのでもう一回言おう、ガンダムである。

『――目覚め「なんでじゃぁぁ！？

普通ここは威厳たっぷりの爺様か綺麗な女神様か涙目の幼女だろ！？

なんでガンダムなんだよ！？しかもなんかこっち見てるし！！

俺は死んだよな？まさか死んだ夢を見ていて夢の中でも夢を見てるのか！？俺はの◯太君のような昼寝の才能は持ってないはずだぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！？」・・・』

ガンダム？が何か言おうとしていたが、死んだのと目の前のガンダムに混乱している俺は、それの言葉を遮り、力の限り叫んだ。

体力の続く限り叫び続けて約３０分、ようやく落ち着いた俺に目の前のガンダム？が話しかけてきた。

『――落ち着いたか？』

「まぁ・・・なんとか・・・」

目の前のガンダｍ・・・もとい、『神』。

落ち着いて見ると、何というか威厳と神気？のようなオーラが凄い勢いで放出されている。

そして目の前の神はそれを押さえる気は欠片もないらしく、混乱から落ち着いた俺の身体はさっきからガクガク震えっぱなしである。

だがこのまま震えていても埒があかない。

目の前の神から感じる恐怖を全力で押さえつけ、質問してみることにした。

「えっと、貴方は何者でしょうか？」

とりあえず何者なのかを訪ねてみた。

最近のＯＯやＵＣは知らないがそれ以前のガンダムは一応知っているが目の前のガンダムは全く判らない。

『――我は「流」を司る神［ストリームカイザー］。

［スダ・ドアカ・ワールド］の１１の神々の力を宿し、神々の均衡を守り、世界の流れを見守りし者なり』

［ストリームカイザー？］
やっぱり知らｎ・・・ってちょっと待て、今［スダ・ドアカ・ワールド］って言わなかったか！？

スダ・ドアカ・ワールド

騎士ガンダム物語というカードやゲームになった作品の舞台となる世界。

現在とは違う時代、どこかにあると言う人間、妖精、ＭＳ族、そして魔物（モンスター）が共存する世界。

ＭＳやそのパイロット・関係者たちをモデルにした人物や怪物が存在する中世風ファンタジーの世界。

ただし、後年あまりに多くの変更や追加されたキャラがあったせいでネットの各スレで論争が頻繁に行われている作品でもある。

そして追加されたキャラの中には目の前のストリームカイザーもしっかり存在していたりする。

「フィ、フィクションの存在のはずじゃ…」

思わず口から零れた言葉に、目の前のそれはあっさり答えた。

『――否。我はお前の知る創作物に描かれたものと近似した存在であるが我という存在は確かに此処にある』

ストリームカイザーの言葉に俺は随分前に読んだ漫画のある一節を思い出す。

「人が空想できる全ての出来事は起こりうる現実である」という言葉だ。

現実は目の前にある。

痩せ我慢で震える身体から流れ落ちる汗の感触が、目の前の存在が放つ桁違いの重圧（プレッシャー）がそれを物語る。

「神である貴方が、俺のような死んだばかりの人間に何の用ですか？」

目の前の存在と比べると、あまりに小さな存在の学生（しかも死んでる）である俺に一体何の用があるというのだ？

『――輪廻を流れる魂の中、かの世界に関して多少なりとも知識を持っていた者がいた。それがお主であった。

この数奇に感謝すると共にやってもらいたいことがある故、ここに呼び招いたのだ』

やってもらいたいこと、それにはスダ・ドアカワールドに関して知識を持っていることが必要だからここに呼ばれたってことだろうか？

確かに幼い頃から騎士ガンダムシリーズをはじめ機動戦士ガンダム作品や他のＳＤシリーズに関してならそれなりに知ってはいる。

だが近年の作品、ＯＯやＵＣ等の作品は全く判らない。

俺の住む地域は田舎の為か放送はおろか、プラモすら入荷しないのだ。

・・・それに、気になることがある。

「・・・やってもらいたいことというのが何なのか気になりますが、その前に質問はいいですか？」

『――何だね？』

俺の一番の疑問、それは・・・

「俺が死んだのは何故ですか？」

そう、俺の死である。

普通に考えて家の中にトラックが突っ込んでくるなんて普通あり得ないのだ。

妥当に考えれば目の前の神が何かをやったとしか・・・

『――残念だがそれは我のせいではない。

運転手の飲酒運転が原因だ』

「・・・それが真実であるという証拠は？」

目の前のストリームカイザーを睨み付けるように言う。

『――ない。何よりも我は人の生死に干渉できぬ身。

我が司るは「流」。

世界の流れを見守り、その流れを正すことが我が使命也』

・・・嘘は無さそうである。

「判りました、貴方を信じます。

どの道俺はもう死んでるんですから。

・・・それで？俺にして貰いたいこととは？」

『――それは・・・』

プロローグ2

プロローグ2

『――我らの世界、スダ・ドアカ・ワールドに転生し、侵入した異物の排除をやってもらいたい』

転生・・・ああ、最近流行ってるあれか。
でも異物の排除？ってか異物ってなんだ？

「異物とは？」
『――判らない。あの存在は突然現れたのだ』
「生き物ですか？」
『――MS族に酷似しているが・・・詳しくは解らない』
「・・・たくさんいるんですか？」
『――今のところ確認できているのは1体だけだ』

・・・分からないことだらけじゃねーか！！

『――正直、あの存在が何をしようとしているかは分からない。
だが奴の存在によって本来あるべき［流れ］が狂おうとしているのだ』

「・・・あるべき［流れ］？」
なんじゃそりゃ？

『――あの世界を守護する黄金神、かの神が長き時の果てに力を取り戻し新たなる神を誕生させる。

それこそがあの世界で流れるべき正しき［流れ］なのだ。
しかし、あの世界に侵入した存在によってその［流れ］は狂い消えようとしている』

遥か古の時代、黄金神ことスペリオルカイザーは自分の反存在である暗黒卿（ダークロード）マスターガンダムや古代神バロックガンとの戦いで自らの力の化身であるカイザーワイバーンとの融合を維持できなくなり、その力を大きく殺がれてしまった。
その後、地上のガンダム族の肉体を用いて復活を試みる。
その対象となったのは異世界より転移してきた頑駄無真悪参という名の若武者、しかし何故か活性化していたバロックガンの横槍？によって彼は記憶を失うと共に、その魂が善の騎士ガンダム・悪のブラックドラゴンへと分離してしまう。
善と悪に二分された二つの存在は戦いの果てに再融合を遂げ、再び一つの存在であるスペリオルドラゴンへと生まれ変わる。
それから永い時を隔てて、スペリオルドラゴンは幾度のパワーアップを経てカイザーワイバーンとの融合を果たし、完全なる黄金神スペリオルカイザーとして復活を果たす。

というのが俺の知る限りの流れだったはず。

「・・・質問なんですが、現在その異物のせいでどんな影響がでているんですか？」

正直、騎士ガンダムの代役をやれとか言われても困る。
俺はあの騎士様のように純粋じゃないぞ？
かといって魔王様やれって言われても無理！！第一現代の日本人はそこまで鬼畜にはなれない！！

『――あの存在の影響か封印されていた古代の魔物や邪悪な力に魅入られた者達が目覚め、力を付けつつある。
このままでは黄金神の半身が現われるより先に世界が滅びかねない。』

・・・はい？

「いやいや！？おかしいでしょ！！あの世界には他のガンダム族やＭＳ族もいるし機兵っていうとんでも兵器だって埋まってる！最悪原作の敵対していた連中だって自分の身可愛さに闘うだろ！？」

そう、あの世界はガンダム族を筆頭としたＭＳ族、巨大な人型兵器である機兵、生身でそれを粉砕できる騎士や魔法使い、世界征服を目論む黒幕が数多く存在するという物騒な世界だ。
古代の魔物が復活したとしても早々遅れを取るはずが・・・

『――通常ならそうだろう。しかし、現時点でその多くは封印されている、もしくはお前の知識にあるほどの力を持っていない。
なにより、現在のＭＳ族は古代の戦士程の力は持ってはいない』

あー、確かに（汗）
アルガス騎士団は［導きのハープ］以外の神器を持ってない上にいがみ合ってるし、プリティスの円卓の騎士団は壊滅状態、運命の三騎士や聖騎兵は覚醒もしてないし、月の皇子や聖龍騎士は現在消息不明、選ばれし者達は生まれてすらいない。
古代の魔物がどれだけ強いかは知らないけど初期のＭＳ族じゃ勝ち目はないだろう。

おまけに物語の敵たちも、

・ジークジオン
今は本拠地に引篭もってるから最悪入り口塞げば安全。

・ザビロニア帝国
プリティス王国残党という火種を抱えてる。

・ネオジオン族
機兵の掘り出しや開発で戦力不足。

・デラーズ王国
本腰ではないとはいえ、聖機兵の存在しないダバード王国に撃退されかかった様子からして軍の錬度はそれほど高くはない、むしろ低い。

・幻魔皇帝アサルトバスター
国や軍はまだ持っていない。

・暗黒卿&古代神
機兵の谷で仲良く封印中。

・・・うん、このままじゃ騎士ガンダムやサタンガンダムが現われるより先に世界が滅ぶわ。

「つまり俺の役目は、

1. 異分子の目的の調査、及び目的の阻止
2. 古代の魔物の封印、もしくは排除

この二つで合っていますか？」

『――相違ない。黄金神の半身たちは互いに惹かれあっている。
時が来れば自ずと一つとなるだろう。』

失敗すれば世界が滅ぶ。何もしなくても世界が滅ぶ。
転生した先で死にたくなければ頑張るしかないのだが・・・・ってあれ？

「すみません、俺の行動も異物同様に悪影響を及ぼすのでは？」

そう、俺も異物と同じ、あの世界に存在しない存在なのだ。
仮に異物を排除できても今度は俺が消される、という最悪のパターンになりかねない。

『――確かにお前の影響によって流れが変わる可能性もある。
だがそれによって［流れ］が変わるのはある意味必然、お前が意図的に黄金神の復活を妨げるような行動を取らなければ何も問題は無い。』

つまり・・・

・騎士ガンダムやサタンガンダムにあまり干渉しない。
・スペリオルドラゴンの復活の邪魔をしてくるであろう黒幕たちの邪魔をする。

この二つを徹底すれば何も問題は無さそうだな。
って大事なこと忘れてた！！

「あー、失礼ですが俺、戦ったことは勿論、喧嘩もしたこと無いん

ですが？」

前世で格闘技なんてやったこともないし、サバイバル知識なんて欠片も持ち合わせてない俺が中世のような世界に放り出されても戦う所か生活出来るわけがない！！

早々と魔物の餌になるのがオチである。

『――無論、そのことはこちらも承知の上。

過度な支援はできない。が、あちらに送る前ならば力を与えることもできる。』

俺の擬問に対し、それまで微動だにしなかったストリームカイザーはその大きな白銀の腕を天にかざす。

『――我は１１の神々の武具をこの身に束ね、力の均衡を保つもの。

想像せよ。創造せよ。お前の力を。お前の新たな姿を。

我はその力を、その姿を生み出しお前に与えよう。』

え、真剣（マジ）で！？

「な、なんでも良いんですか？」

どんなものでも良いならドラ〇ンボールのキャラや東〇のキャラの能力で俺ＴＵＥＥＥＥＥＥＥを・・・！！

『――我の力を超えるもの、世界を狂わせるものは不可能だ。

ついでに姿は我を模したもの、ガンダム族に限定される』

・・・ですよねー（泣）流石にドラ〇ンボールや東〇は駄目か・・・
・前者は神より強いのがゴロゴロいるし、後者は型に嵌れば神様も殺せそうだ。

気を取り直して、あの世界でも使えそうで不利にはならない物はっと・・・。

「じゃあこんな感じで・・・」

俺が望んだ能力はこんな感じ←

・ＤＯＤの全武器
・テイルズ各種の全武器・防具・レシピ・道具（食材含む）一式
・アルベイン流剣術を始めとしたテイルズ各種の武術・特技・魔法
・鋼の錬金術師の錬金術
・不老長寿（不死なんて御免である）

『――最初の武器以外は可能だ。』
「え？なんでですか？」

なんでＤＯＤの武器は駄目なんだ？

『――お前の知識が正しいなら危険すぎる。お前の精神が武器に呑まれ、狂気に堕ちる危険性がある。
それでもいいならば与えるが？』

・・・無かったことにして下さい。

『――ではお前を過去、黄金神の半身が現われる十数年前のスダ・ドアカ・ワールドへ転生させる。・・・最後に何か質問はあるか？』

質問？聞きたいことは全て聞いた。もう聞きたいことなんて・・・あ、一つだけ、どうしても聞かねばならないことがあった。

「最後に聞きたいことが」

これだけは聞いておかねばあるまい。

どこまでも自分は臆病だなと思うと、不思議と頬が緩む。

「目的を果たしたその後、俺は自由に生きてもいいんですか？」

永久に使命に縛られて生きるのは流石に御免である。

ストリームカイザーは俺質問には答えず、俺のほうへと掌を向ける。すると、俺の周囲に光の膜が形成される。

途端、自分の身体が分解され、身体が作り変えられていくのが実感できる。

剣なんて振ったことの無い細い腕が、剣を振ることのできる力ある腕に。

とても鎧なんて着られそうにない弱い身体が、それを身に着け、走り回ることが出来る強い身体に。

ああ、意識が徐々に遠くなっていく。

俺の問いの返答は未だに聞こえない。

薄れゆく意識の中、俺が見たものは・・・

それまでかんじょうのいろをうつしていなかったのに、たしかなやさしさをかんじさせるめと

『――無論。その使命を果たしたその時こそ・・・否、今より始まる、新たな生を生きるが良い。』

おれがききたかった、こたえ・・・だった・・・。

『――健闘を祈る。新たなる我が眷族、騎士アストレイよ・・・。』

プロローグ2（後書き）

ちょっと変更。

1．転生しました！でも死にそうです。（前書き）

後半かなり変更。

1．転生しました！でも死にそうです。

向こうの世界のお母様、お父様、お元気ですか？
△△○○こと騎士アストレイです。

突然家が壊された上に息子（俺）が死んだりと色々とあってさぞ困惑していると思います。
私も突然死んだ上、異世界の神様に会ったり、条件付で転生させて貰ったり、某正義の味方の真似事を頼まれたりと困惑しています。その上現在進行形で二度目の死を迎えそうだったりと、もう嫌になりますね？ほんと。

え？転生早々何死にかけているんだって？

いえ俺が何かをしたわけではありません。決してありません。

むしろ、原因は俺を転生させたストリームカイザーにあります。

何時か殺してやる。そんなこと考える程に奴（ストリームカイザー）が嫌いになりました。

……何故かって？そんなの決まってます。

現在、俺の頭上では……

『――これで……最後だ！！バロックガンぅぅぅぅぅぅぅぅ！！！！』

どこぞの英〇王も真っ青になるくらいに金ぴかな黄金神（かみさま）と、

『――消えるのは貴様だ！！スペリオルカイザァぁぁぁぁぁぁ！！！』

どこか禍々しい姿をした銀色の覇界神（かみさま）の最終決戦が行われているからです！！

「……あんの馬鹿神ぃいいいいいいい！！何考えてやがｒって流れ弾こっちきたぁぁぁぁぁぁ！？」

誰か助けてぇぇぇぇぇっぇ！？

1．転生しました！でも死にそうです。

さて皆さん、生まれ変わって最初に見る光景って一体何だと思いますか？

新しい両親の腕の中？雲ひとつ無い青空？見覚えの無い天井？

まぁ、テンプレですが俺の場合はちょっと、いや凄まじく違いま

す。

俺が転生して始めてみた光景、それは……ビームです。

もう一回言います、ビームです。大切な事なので二回言いました。

転生して始めて見た物がこっちに向って飛んでくるビームとは……うん、転生して早々に運が悪いな！

いや笑えるね本当に！HAHAHAHAHAHAHAHA……って笑ってる場合じゃねぇえええええええええ！？

「Noooooooooooooooooooooooooo！？」

前世も含めて今まで出したことの無いような速さで、俺は全力で横へと跳ぶ。

俺が横へと跳んだその瞬間、飛んできたビームの着弾と同時に地面が爆発、起きた爆風によって空中にいた俺は更に宙を舞って地面に叩きつけられた。

「っぺ！っぺ！あーくそ！転生して早々酷い目にあった！！つーかここどkってまた来た！？」

起き上がり口に入った土を吐き出し、悪態をつこうとするがそんな暇も無く、再びビーム来襲。

頭上から降り注ぐビームを全力で回避し続ける俺。

人間だった頃の俺だったら最初の一発もかわせなかったろうが、今は神様特製（ストリームカイザー）のガンダムボディ、凄まじい性能である。

というか、この殺人光線は何時まで降り続けるんだよ！？正直何時直撃しても不思議じゃないんですけど！？

一体何が原因なのかを見極めようと、殺人光線が降り注ぐ空中を見上げた瞬間俺は硬直した。

何故かって？見上げた先では第一章には居ない筈の奴等が激闘を繰り広げていたからだ。

「……確か第一章（ジークジオン編）が始まる十数年前に送るとかいってたよな？」

空中で激闘を繰り広げている者達、それは二体の巨人である。

一人は全身金ぴかの黄金神、騎士ガンダムや魔王サタンガンダムの本来の姿であるスペリオルカイザー。別名目立ちたがり屋のチート神。

一人はとんでもない邪気を出しまくってる禍々しい姿をした覇界神、ＳＤガンダム外伝の事実上のラスボスのバロックガン。

空中で激闘を繰り広げる二体の巨人、それはこの世界（スダ・ドアカ・ワールド）に存在する十二柱の神々の二柱である。

どうやら先程から降り注いでいる殺人光線はあの二柱の戦いの余

波の模様。

……なんて迷惑な！！

さて、ここで問題です。

俺が送られる筈の第一章の十数年前では、あの二柱（スペリオルカイザーとバロックガン）は弱体化、もしくは封印されているので存在してはいません。

では、空中で元気に死闘を繰り広げるあの二柱が存在するここは一体何処でしょう？

1．第一章が始まる十数年前
2．第七章（鎧闘神戦記）の最終決戦
3．ＳＤガンダム外伝の遥か過去、黄金神と覇界神の戦いがあった創世記

……間違いなく3の創世記です。嬉しすぎて涙が出てきます。

全然嬉しくねー！　あの野郎！よりにもよって最悪な時代の最悪の場面に出しやがった！！

「……あんの馬鹿神ぃいいいいいいい！！何考えてやがｒって流れ弾こっちきたぁあああああ！？」

あの馬鹿神に文句を言うのも大切だが、満足に文句すら言えないこの状況をどうにか切り抜けなければ！！

飛んでくる流れ弾を回避しつつ俺は全力で距離をとる。

空飛ぶ巨人相手にあまり意味は無いかもしれないが、やらないよりは遥かにマシである。

頭上で行われている二柱の死闘の余波から逃げ続けること数十分後、二柱の世界を賭けた戦いが終わりを告げた。

激しい死闘を制したのは黄金神。

黄金のその身体は傷だらけで、翼に至っては片方千切れている。

傷だらけの黄金神の掲げた腕に光が灯り、地に倒れ伏した覇界神を囲むように光が六亡星の魔方陣と複雑な文字を描いていく。

ああ、バロックガンってこうやって封印されたのか。

『――これで最後だ！！永遠の眠りに就くがいい！！』

『――おのれぇえええ！』

自分を縛る光から逃れようと足掻くが、傷ついたその身では何も出来ず徒労に終わる。

――――ってあれ？なんか忘れてるような気が……

『――我だけが……眠りに就く訳ではない！』

『――な、何っ！？』

光に縛られたバロックガンから黒い光…いや闇が漏れ出し、スペリオルカイザーに絡みつく。

スペリオルカイザーは絡みついた闇を振りほどこうとするが、傷ついたその身では振りほどくことが出来ず、徐々に闇に覆われていく。

『――スペリオルカイザー！！貴様の操手も共に連れて行く！！』

『――グ、アァアアアアアアアアアアアアアアアア！？』

スペリオルカイザーの悲鳴が響いた、その瞬間。

圧倒的な白い光が世界を塗り潰した。

…………………

……………………

………………………

「…あー、そういえばこうなるんだっけ？」

強大な力を持った二柱の死闘によって荒れ果てた大地を歩きながら、俺は一人呟く。

「覇界神（バロックガン）の最後の力で操手……生体コアの勇者ガンダムを異世界に跳ばされた黄金神（スペリオルカイザー）は力を維持できなくなり、結果として肉体、鎧、意思の三つに分離してしまう」

視界の端では、小さなドラゴン…否スペリオルドラゴンの肉体が産声を上げている。

「意思は新たな操手を求めて次元を超え、肉体は時が来るまで野生のドラゴンとして生きる訳だが…」

俺は、足元に転がるソレを拾い上げる。

黄金に輝くソレは、先程まで上空で死闘を繰り広げていた黄金神の一部にして遠い未来で一人の天使に託されるもの。

「…バロックガンが封印されたってことは、ここは機兵の谷か？」

――――――――機兵の谷。

スダ・ドアカワールド（スダ・ドアカ・ワールド）では「伝説の地」として崇められているラクロア王国内に存在し、数えきれないほどの機兵の残骸が埋まっているとされる古代遺跡にして、第六章の黒幕である暗黒卿（ダークロード）とその配下が封印され、先程覇界神（バロックガン）が封印されたこの世界でもトップクラスの危険地帯である。

「……余裕が無いにしても危険な連中を同じ場所に封印するのはどうかと思うんだけどなぁー（汗）」

拾った［黄金の鎧］を片手に、近づいてきた幼ドラゴンの頭を撫でながら、呆れたように俺は呟いた。

……これからどうすればいいんだろう？

転生する筈の時代よりも遥か古代の時代に来てしまった俺は、大量の危険物が眠る機兵の谷を眺めながら途方に暮れるのだった。

１．転生しました！でも死にそうです。（後書き）

色々考えた結果、ややこしいなら古代に逝って貰おう！という訳でスダ・ドアカ・ワールドの創世記に転生して貰いました。

バロックガンの近衛騎士団であるゾディロックやオズワルド騎士団に関しては、アストレイ転生よりも前に封印されたということで。

１．「ぎゃぁあああ！！死ぬ！？死んでまうぅぅぅぅ！？」
騎士アストレイ
異世界から転生した騎士。
ＨＰ３００

２．「ピギャー！！」
魔物ベビードラゴン
黄金神の肉体が野生化した姿。
ＨＰ１２００

３．「黄金の鎧を手に入れた！」
黄金の鎧
黄金神の力が宿る鎧。
ＨＰ＋？？？

2．現状確認と絶叫と（前書き）

サブタイトル以外は殆んど改定前と一緒です。

2．現状確認と絶叫と

皆さんお久しぶりです、騎士アストレイです。
第一章（ジークジオン編）よりもずっと過去の創世記に転生して、早くも三日が過ぎました。

え、なんで三日も時間が経ってるんだって？

作者の都合です！

……という冗談は置いといて、本当は危険物が大量に眠る機兵の谷から一刻も早く離れる為に移動したのと懐かれたので一緒に連れてきたベビードラゴンの世話をしていたので特に書くことが無かったりするからです。

食料はザック……ＴＯＶ（ティルズオブヴェスペリア）のキャラであるカロルのバッグと同じ何でも入る鞄で、歴代テイルズの道具や武具が納まっている文字通りの俺の生命線から取り出しているので問題は無かったです。

危険な動物や魔物はいましたがザックから取り出したエナジーブレットを使いまくって退場願いました。
この世界の魔物は大抵地に足を着いてるので、地面に電撃を放つエナジーブレットは大変有効でした。

え？何で技や魔法を使わないのかって？

――――実は……ザックに入っていた呪文書や奥義書に問題が有り過ぎて殆んど使えないんだよ！！

2．現状確認と絶叫と

神々の死闘の場となった機兵の谷から離れて三日、奇跡的に無事だった付近の森の中で俺は剣（ロングソード）を取り出し周囲を警戒する。

正面、左右、背後、上空、地面、念には念を入れて己の影を手に持った剣で滅多刺しにする。

……何も起こる様子が無いことを確信して、ようやく俺は全身から力を抜いた。

転生して一秒も経たない内に新しい人生に終止符を打ちかけたのだから、もっと警戒していた方が良いような気もするが……正直もう限界である。

……まさか転生した場所が最終決戦の真下とは…！！

拭い去れない恐怖感とガクガク震える自分の身体から目をそらす為、俺は先ほどの恐怖体験の原因であるクソ野郎（ストリームカイザー）に怒りを燃やす。

……仮にも転生（条件付きとはいえ）させてくれた恩人に対して言っていい言葉ではない気がするが、それはそれ、これはこれというやつである。

いつかこの借りを返すことを胸の内で誓い、俺はこの先どうするかを考えながら現時点で分かっていることを並べてみる。

・今俺のいる時代は当初の転生先だった第一章（ジークジオン編）の十数年前でどころか遥か古代の創世記である。

・バロックガンとスペリオルカイザーは共倒れとなり、現在は活動できない。

・未来で神風騎士（しんぷうきし）ウインドことミリアルに託される黄金の鎧が俺の手元にあること（そういえば何で騎士シャアが持ってたんだろ？）

・未来の魔物（モンスター）とは比較にならない位厄介な魔物（モンスター）がそこらに跋扈していること。

・未来でＳＤ（スペリオルドラゴン）の悪であるサタンガンダムとなる筈のベビードラゴンがそこで昼寝していること。

・原作が始まるまで短くても千年はあるだろうこと。

――――今分かっていて重要なことはこれぐらいだろうか？

昼寝しているベビードラゴンの頭を撫でながら考えること約十分、そういえば自分が本当にテイルズシリーズの技が使えるか確かめていなかったことに気づく。

折角異世界に転生したのだから魔法を試そうと思い、ザックに手を入れてＴＯＰでお馴染みの呪文書を探す。

しばらくガサゴソとザックを漁り、目的の物と思われる本を取り出し、その本の表紙を見て凍りつく。

何故かって？手に取った本の表紙には、デカデカとイラスト付きでこう書いてあったからだ。

『大魔導士アーチェ・クライン著』と……。

……アイツ、俺の想像したものを力として与えるって言ってたけど……俺、こんなのを想像していたのか？

なぜか、本を片手に硬直する俺の周りを冷たい風が吹いた……ような気がした。

「……凄い、正直馬鹿にしてた」

気を取り直して呪文書を読み直すこと数分、手に取ったとき感じた馬鹿馬鹿しさが見当はずれの物だと実感している俺がいた。

この本、表紙こそ馬鹿馬鹿しいがその中身は凄まじいの一言に尽きる。

当初、ＴＯＰに登場する魔法のみが載っていると思っていたのだが……俺のプレイしたことのあるテイルズシリーズ（ＴＯＰ，ＴＯＤ，ＴＯＤ２、ＴＯＥ、ＴＯＳ、ＴＯＩ、ＴＯＶ）の魔術、法術、召喚術、晶術、晶霊術、天使術、神の力である天術や極光術、他にも様々な技術や知識まで書かれていたりする。

「…確かに、俺の使いたかった魔法とかも書いてあるけど……何でこんな物まで書いてあるんだよ！？」

そう、何故かこの本には魔法だけではなく危険極まりない技術まで記載されているのだ！！

まぁ例を挙げると……

・指輪の契約無しで精霊を屈服させて使役する方法。

・ＴＯＤに登場した兵器（ベルクラントや飛行竜、飛空挺イクシフォスラー、『ソーディアン』）の製造方法。
・ＴＯＥに登場した万能艦バンエルティア号の設計図、リバヴィウス鉱の加工技術、完全な『極光術』の制御法。
・ＴＯＳとＴＯＶの『エクスフィア』『魔導器（ブラスティア）』の製造及び制御技術。

……ハッキリ言おう、どう考えても俺の手に余る！！

「何処が「我の力を超えるもの、世界を狂わせるものは不可能だ」だ！？この本が俺以外の誰かの手に渡ったら世界が狂うどころか確実に世界が滅ぶわ！！！」

そもそも俺はテイルズシリーズの魔法が使いたかったのであって、こんな危険極まりない物は欲しがってないぞ！？
最終決戦の真下に放り出したことといい、あの野郎は何考えてんだ！！

「こんな危ない本、教科書気分で使えるかぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！？」

……俺が呪文書という名の危険物を全力で地面に叩き付けたことは、決して間違いではないと思う。

必要な時以外は取り出すまいと心に誓いながら危険物（呪文書）を仕舞い、代わりに違う本と適当な剣を取り出す。

魔法を使えるかは次の機会に試すとして、今度は技の確認だ。

此処まで来ると、この本（奥義書）からも嫌な予感がするが……背に腹はかえられない。

流石に先程の危険物より危険ということは無いと祈りながら、手に持った本を開いて、書かれた記述にに目をやる。

……警戒していたのが馬鹿らしくなるくらいに普通の教本でした。

先程の危険物（本）とは違い、この本には剣技、格闘技、弓技、槍技を初めとした戦闘術に、基本的なサバイバル技術が書かれているようだ。

正直サバイバル技術が書いてあるのが一番嬉しかったがそれは後回しである、今は簡単に試せそうな特技を……？

技の記述が書かれたページを眺めていて、おかしなことに気づき他のページにも目をやる。

剣技は勿論、格闘技、弓技、槍技、果てには銃技や何故か書かれている楽譜（スコア）のページまで目を通す。

オイオイオイオイオイ！？魔神剣を初めとした最初に覚える技以外のページが全部真っ白なんですけど！？

慌てて本を見直すと、最初のページに『なお特技や奥儀は、この本の持ち主の力量に応じて情報が開示されます。真の武術家を目指し精進しましょう。』と、書かれていた。

……つまり、最初に覚える技以外を使いたければ地道に腕を上げる以外に方法が無いという事？

・・・・・・

・・・・・・・・・・

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

「ふっざけんなぁっぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！！！！！！！！」

俺は込められるだけの怒りを空気と一緒に腹に込め、本日二度目の心からの叫びが周囲に響いた。

2．現状確認と絶叫と（後書き）

指摘されたので一部修正。

次回、アストレイが色々振り切れます。

……その内アストレイに色々作らせようと思っているのですが、これだけは止めておけという物はあるでしょうか？

4．「危険すぎる呪文書を手に入れた！」
危険すぎる呪文書
簡単な魔法から世界を滅ぼす技術まで記されている。
ＭＰ＋∞

5．「不思議な奥義書を手に入れた！」
不思議な奥義書
持ち主の技量に応じて読める内容が増えるという。
ＨＰ＋？？？

3．錬金術と旅立ちと

二冊の本の内容に切れて叫び続けること約３０分、ようやく落ち着いた俺は最後に残った錬金術を試すことにした。

俺が願った鋼の錬金術師（以下鋼錬）に登場する錬金術は物質の構成や形を変えて別の物に作り変える技術とそれに伴う理論体系を扱う学問であるとされているが……作者自身が「こんな錬金術があるかい」と言っている通り殆んど魔法である。

説明すると長くなるので省略するが、通常鋼錬の錬金術を使うには高度な知識と対価となる物質、そして錬成陣を必要とする。

知識の方は神が気（ストリームカイザー）を利かせてくれたのか、頭の中に入っているので問題ない。

早速試そうと思って錬成陣を書こうとして、ふと思った。

……手合わせ練成出来ないかな？

3．錬金術と旅立ちと

で、やってみた結果どうなったかというと……

「やりすぎちゃった（汗）」

「ピー！」

俺の目の前には若干、いやかなり見晴らしの良くなった森が広がっていた。

足元のベビードラゴンも驚きの声を上げている。

どうしてこうなったかというと、やってみたら普通に発動したので調子に乗って焔（マスタング大佐）、爆発（ゾルフ・J・キンブリー）、地面にトゲ（アームストロング少佐）等のド派手な錬金術を乱射した結果、目の前の惨状が出来上がったわけである。

……こりゃ下手な魔法や武器より危険だな。

そう考えながらも、ようやく魔法らしいものが使えたことに興奮を隠せず、他に何が出来るかを試してみようと思った。

その時だった。

ぐぎゅるるるる～！

「……腹減ったのか？」

「…ピー」

足元にいるベビードラゴンに声をかける。

その声に反応したのか、その澄んだ瞳で俺を見つめ続けた。

腹の音を鳴らしながら……

（現在焚き火を準備中、しばらくお待ちください）

（食材準備中、しばらくお待ち下さい）

（調理ｔｙ「ピ～～♪」…躾中、しばらくお待ち下さい）

（一人と一匹食事中、しばらくお待ち下さい）

「ご馳走様でした」

「ピ～♪」

「ザク！！」

森（ここ）に着くまで安心して食事もできなかったから、俺もベビードラゴンも良く食べた。本当に食べた……ん？

……食事に夢中で気づかなかったが、なんか増えてないか？

ゆっくりと首を右のほうに回すと……なんかいた。

「……オイ、お前誰よ？」
「ザ、ザク！？」

俺たちと一緒に食事をしていた者、その正体は……。

「ザ、ザクザク！！」
「…ゴブリンザクか？」
「ピー！！」

その正体は角の生えた一つ目の魔物、ゴブリンザクだった。

ゴブリンザク、それはこの世界（スタ・ドアカ・ワールド）に広く生息する下級の魔物である。
その実力は低いが知能は人並みで人語を喋り、武器を持って戦うこともあれば集団で人を襲うこともあり、独自の文化を持つ。
様々な亜種が存在し、一族の中でも強い力を持った物は鎧を纏って戦士を名乗ることもあるという。

「……一体何時からいたんだ？」
「ザ、ザクザクザク！ザクッザク！！」

どうやらこのゴブリンザクは言葉を喋れないようなのでジェスチャーで何かを伝えようとしているが、正直良く判らん。

取り合えずザックからバナナを取り出し、食いながら解読する事としよう。

「ピー！！」
「わかったわかった、お前にもやるから。」

食おうとしていたバナナをベビードラゴンに食べさせてやる。
美味そうに食っているその姿は子犬のようで中々に愛らしい。

「ザ、ザクザク！！」

ベビードラゴンと俺が羨ましくなったのか、よこせと言わんばかりに自己主張を始めるゴブリンザク。

「お前は後でな」
「……ザク」

ふむふむ。

「ここ暫く、噛み？いや神々の戦いのせいで食うものが泣く？ああ、無くて腹が減っていた。

森の何処かに食えるものが無いか探して彷徨っていたら、良い匂いが４？手？ああ、して来てみたら俺達が居て、こっそり自分の分もよそって食べてたらおかわりもよそってくれたからそのまま居たと？」
「ザクザク！！」

バナナを食べながら、首を上下に振るゴブリンザク。

……おかわりよそってやる前に気づけよ俺！！

その後、食事の後片付け（意外な事にゴブリンザクが手伝った）

をして錬金術を一通り試してみてた結果、色々とわかったことがある。

・錬金術を使用すると疲れる、恐らくは体力を消耗すること。

・手合わせ練成は発動が早いが精度が悪い上に安定せず、練成陣での練成は精度が高く安定していること。

・金の練成は可能だが他の物（武器・兵器・服など）を練成するよりも遥かに消耗すること。

・原作でメイ・チャンがやったような遠隔練成は何故か出来ないこと。

等と、俺自身に錬金術の知識が無いせいなんじゃないか？と疑問に思わなくも無い欠点を発見したのはまぁ、ちょっとショックだったりする。

「…兵器が練成出来るってことは……機兵もいけるか？」

「ピー？」

「ザク？」

邪魔にならないように隅にいた一人と一匹が首を傾げるが、気にせず練成陣を書いてみる。

「ん～～～っとこの場所がこうなって、ここをこう「ピー！」…ゴブリン君、ちょっと預かっててくんない？」

「ザク！！」

練成陣を書くのに邪魔なのでゴブリン君（仮名）にベビードラゴ

ンを預ける。
……しかし、嫌に素直に言うこときくなコイツ。

書いたり消したりしながら一時間後。

出来上がった練成陣の中央に材料の鎧や剣を大量に配置し、いざ練成！！

「できるかな？　できるかな♪」
「ザークザクザク♪ザックザックザック♪」
「ピピー♪」

バチッと小さく電気が弾け、光が生まれる。
ズドゴゴゴゴゴゴゴ！　と盛大な地響きが鼓膜を振わせ、まるで地震が起きたかのように周囲一帯が大きく揺れた。
目の前で光と共に膨れ上がっていく巨人を前に、俺と二匹は楽しげに見上げ続けるのだった。

　………………

……………………

………………………

「……失敗、だと！？」
「ザク？」
「ピー！」

両腕の鋭い爪、大地を踏みしめる両足、強固な装甲を持った巨人、ズゴックのコックピット内部で俺は一人驚愕の声を上げる。

練成に成功し、いざ起動！と乗り込んだまでは良かった。
だが操縦桿をにぎり、ペダルを踏んでもいっこうに動く気配が無いズゴックに俺は困惑した。

練成には成功した筈なのに、何故か起動しない機兵を色々と弄りながら、失敗の原因を考えるが、全く分からない。

何故だ！！

「ザクザク」
「ん、どうした？」

後ろにいたゴブリン君に肩をたたかれ、そちらを振り向くとゴブリン君は内部の壁を軽く叩いた。
すると、コーンと空洞のような反響音がした。

――――――――――――あ！！

「……そういえば俺、機兵の構造なんて全く知らねーや」
「ザクザクザク（苦笑）」

外見出来てても中身が入って無いんじゃ動くわけもねーか（涙）

中身の詰まってないズゴックのコックピットの中、ゴブリン君の苦笑が嫌に耳に残った。

見た目良くて中身が空っぽって……俺はどこぞの正義の味方か！！

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

「さて、これで目的地は決まったな」

「ピー！！」

「ザクザク！！」

俺達が目指す目的地、それは三日前に俺が死に掛けた「機兵の谷」である。

なぜ目指すかって？

あの後、機兵を練成出来ないか色々試してみた結果、やはり中身のないでかい置物しか練成出来ないことを確信した俺はその原因が機兵に関して何も知らないことにあると確信した。

ストリームカイザーは錬金術を発動させる為に必要な知識と技術

こそ与えてくれたがそれ以外、機兵の構造に関する知識は与えてはいなかった、だから俺の練成した機兵には中身がないのだ。

……まぁ、『俺の望んだ力』を与えたわけで、原因は俺にあるのだがそれは置いておこう。

MS（モビルスーツ）に乗ってみたい。

この想いは男なら一度は願ったことがあるはず。

俺もその夢を胸に抱き、近所のゲーセンに行って『戦場の絆』をプレイし続けたのだ。

……結構お金かかったけどね。

今の世界には本物のMS（実際は機兵だが）が存在し、今の俺にはそれを作れる能力があるのだ！！

ならば作らねばなるまい！　多くの同志たちが抱いた夢を俺が実現する！！

といわけで、［機兵の谷］に戻ることにした訳だが……

「なぁ、本当についてくる気か？」

「ザク」

「ピー！」

俺の旅にベビードラゴンとゴブリン君もついて来るようなのだ。

ベビードラゴンがついて来るのはまぁ、分からないでもない。
エサあげたりしてるせいか、妙に懐かれてるし。
だがゴブリン君がついて来る理由が今一わからない。

「俺の旅は危険なんだぞ。危ない所にも行くし、それでもついて来るのか」
「ザクザク！」

身体を動かして何かを伝えようと…ってまたジェスチャーかよ！？

「あー、食べ物くれた音？恩もあるし俺たちが心配だから一緒にいく？」
「ザクザク」
「…お前、意外と義理堅いんだな。」

頷くゴブリン君。
コイツ滅茶苦茶良い奴だと、軽く涙目になりながら俺は思った。

翌日、俺とゴブリン君、そしてベビードラゴンは森の入り口に立っていた。

ここから一歩足を踏み出せばあら不思議、安全とは無縁の危険地帯。
［機兵の谷］まで歩いて三日はかかる上に道中は魔物（モンスター）まで出没す

るが、元々危険を承知で転生することを望んだのだ。
前進して目的を果たすか、動かずに腐り続けるかの二つに一つ、だったら前進してやろうじゃないか！

目的を胸に抱き、気合を入れて旅の道連れに声をかける。

「じゃあ早速［機兵の谷］に向かうとするか！」
「ザク！」
「ピー！！」

朝日によって照らされた森の入り口で、危険物が大量に眠る［機兵の谷］を目指して、俺たちは森の外へと一歩踏み出した。

3．錬金術と旅立ちと（後書き）

やっと最初の村を出たってかんじです。

練成した機兵の中身がスカスカなのはアストレイが機兵の構造を知らなかったからです。

その前に練成した兵器（大砲・拳銃、バズーカ等）は原作で練成されたのを知っていたので知識として頭に組み込まれていたのとお手本（ザックの中の武器）があったということで。

6．「ゴブリンザクがあらわれた。」

ゴブリンザク

主に森や平地に生息している。

ＨＰ５０

4．アニキと呼ばれてたが気にせずに今後の事を。（前書き）

気づけばアニキと呼ばれてましたが気にしないでください。

4．アニキと呼ばれてたが気にせずに今後の事を。

どうも、騎士アストレイです。

先日、安全な森を後にした俺達一行は目的地である［機兵の谷］を目指してゆっくり進んでいます。

「しかし、大丈夫なんすか？」

「何が？」

隣を歩くゴブリンザクのゴブリン君が声をかけてくる。ちなみに、今のゴブリン君は普通に言葉を喋っている。

毎回ジェスチャーだと疲れるので何か無いかと考えた結果、知性上昇効果のある武具を持たせたらどうか？と思い装備させてみたら普通に喋りだした。

現在のゴブリン君の装備←

・ルーンメイル
・ルーンヘルム
・ルーンシールド
・ルーンガントレット
・ムーンストーン

こんな感じで知力上昇効果のある装備品でガチガチに固めてある。

「急がなくてもいいのか？ってことですよ。

アニキが強いことは知ってますが万が一ってこともありえますし、［機兵の谷］までかなり距離があるから少しでも急いだほうが…」

「……俺達が馬とかを使ってるんだったらそれもよかったんだけどさ、今は徒歩だろ？
走り疲れてヘロヘロになったころを襲われたら一巻の終わりだ。
それに魔物（モンスター）に襲われたって逃げる方法はあるからゆっくり進んだほうが良いと思う」

「まぁ、アニキが良いならいいけどよ」

そう、逃げるだけなら何も問題はない。

テイルズシリーズでお馴染みの時間停止アイテムのアワーグラス、ルーンボトルのアイテム変化によって精製されるクロノグラスを使えば襲われても逃げることは十分に可能だ。

だが、逃げるだけでは駄目なのだ。

この世界には先日封印された覇界神バロックガンを筆頭に強大な力を持った輩が数多く存在する上、神でもないのに死者を蘇らせて使役するという規格外までいるのだ。（例　悪道士α・アジール）
しかも、そんな連中に限って世界征服を目論むか敵に加担しているのだから余計に性質が悪い。

なにより馬鹿神（ストリームカイザー）から与えられた使命である［異物の目的の調査及び排除］、これを放棄するわけにはいかない。

目的の時代よりも遥か過去、しかもあんな危険地帯に放り出され

たとはいえあちらが転生させるという約束を守った以上はこちらも使命を果たす必要があるというのもあるが、使命を放棄した場合に何が起きるか分かったものじゃない。

……まあ、奴の役割（他の神の力を束ねてその均衡を維持する）を考えれば干渉できない可能性もあるが、相手は腐っても神である。放棄すればどんな罰を与えられてもおかしくはないのだ。

それにこの世界（スダ・ドアカ・ワールド）に侵入した異物の目的が不明な上、それが碌なものでない可能性がある以上はこの世界の為、何よりも自分の安全の為にも使命は遂行せねばならない。

その為には力が必要だ。

それも神に対抗できるような強大な力が！！

目指す［機兵の谷］にはその当てがある。

かつて勇者ガンダムと神の座を賭けて戦い破れ、その末に黄金神（スパリオルカイザー）に戦いを挑んだ暗黒卿（ダークロード）マスターガンダム。

彼は魔馬キサイウンと配下のデスペリオル三魔卿を引きつれ黄金神に戦いを挑み、敗北して［機兵の谷］の地下へと封印された。

俺はその戦いで失われた暗黒卿の機兵に用がある。

かつて暗黒卿が駆った愛機、暗黒機兵クーロン。

紋章を継承する前といえ、黄金神の眷族とも言える新生シャッフ

ル騎士団を一蹴する暗黒卿のかつての愛機。
その性能は不明だが黄金神に戦いを挑んだということはかなりの力を持つ、または対抗手段を持つ筈である。

本当なら、確実に対抗できそうな［聖機兵］や［機甲神］が欲しいが……黄金神や覇界神と同列の創造神イシュタによって製作された聖機兵ガンレックスや全く別の技術で製作された機甲神は乗り手を選ぶ上、物語の中心とも言えるので手は出せない。

その為、なんとしてでも暗黒機兵を発掘したいのだが……手に負えない場合は破壊しなければならない。

手に負えないので埋めなおした→マスターガンダム復活→暗黒機兵発見→復元して初遭遇時に搭乗→新生シャッフル騎士団壊滅なんてことになったら最悪である。

そんな訳で期待が半分、不安が半分という具合で［機兵の谷］を目指して歩いているのだが……

「ベビードラゴン何処行った～！？」

谷を目指して二日目、ベビードラゴンがいなくなったのだ。

声を上げて探すが戻ってくる気配が無い、ゴブリン君も探してくれているが見つからない。

「アニキ、落ち込んでも仕方ないって。
小さいとはいえドラゴンなんだからきっと大丈夫っだって」

ゴブリン君が慰めるように声をかけてくるが、不安は消えない。
俺と出会わなければこの厳しい世界で物語が開始するまで生き続けるほどに逞しいが、この数日間は俺からエサを貰って過ごしていたのだから狩りの仕方など分かる訳がない。
もしも、逃げ切れないような魔物（モンスター）に遭遇して食べられでもしたら？と考えるだけで不安になってくる。
日が暮れるまで探し続けたが見つからず、結局その日はこの場所で野営することになった。
夜番は俺とゴブリン君の交互にやる事になっているので今は俺である。
火を見ながらボーっとしていると何か大きいものを引きずるような音が聞こえてくる。
ザックから剣を取り出し、近寄ってくるのを待っているとベビードラゴンが大きな獣を引きずり帰って来た。
……どうやら、コイツは俺の思っていた以上に逞しい生き物のようである。
「ベビードラゴン、黙って行っちゃダメだぞ。
本当に心配したんだからな？」
「ピ～～～～！」
一応怒っとくと悲しそうな声をあげる。ベビードラゴンの頭を撫でると羽と尻尾ををはちきれんばかりに左右に振っている、この様

子からして余り反省して無いと見た。

とりあえずベビードラゴンの運んできた動物を解体する。
正直獣を解体するのには慣れたが、血の匂いにはまだ慣れそうも無い。

解体しているとベビードラゴンが物欲しそうにこっちを見ている。
そういえば朝から居なかったのでエサを与えていないことを思い出し、適当な大きさに切って軽く火で焼き、ベビードラゴンに与えてやる。

その後適当に番をして適当な時間が来た為、俺はゴブリン君を起こして眠りに着いた・・・・。

そして翌朝、ベビードラゴンの取ってきた肉を食べて野営の後片付けをし、その後は本当に何事もなく谷を目指して進む。

魔物と遭遇することも無く、適当に話をしながら進んでを繰り返すこと二日後、目的地の［機兵の谷］まで後一日の所まで来た。

「いよいよ明日到着っすね？」

と感慨深そうにゴブリン君が呟く。

「そうだな、本当にゴブリン君が来てくれて助かったよ。」

俺もしみじみと答える。

正直、ゴブリン君がついて来てくれて本当に良かった。
道中ベビードラゴンだけだったら会話に飢えて孤独死していたん

じゃないかと思う。
この荒地だらけの世界は見ているだけで気が滅入るし、何よりもベビードラゴンは喋れないから本当に助かった。
そう告げると照れくさそうにしたゴブリン君を見て、［機兵の谷］に到着したら何かお礼をしなければならないと考え、その考えを告げるとこう言ってきた。
「じゃあ、この鎧を貰っても良いっすか？」
と、着こんだルーン装備を軽く叩きながら言うゴブリン君。
「別に構わないけど本当にそれだけでいいのか？他にも色々あるんだけど……。」
「何いってんすか？アニキに会わなけりゃあの森で飢え死にしてたんですし、この鎧が有れば喋れるんですからこれ以上は望みませんって！」
……不覚にも、笑いながらそういうゴブリン君は非常に格好良く見えてしまったのは内緒である。

なにはともあれ、いよいよ明日には目的地である［機兵の谷］に到着である。
危険物が大量に眠っているが、掘り起こさなければ何も問題は無い筈。

ザックの中から鍋と食材を取り出し、皿を鳴らす一人と一匹を注意しながら調理に取り掛かる。

今日のメニューは豪勢にカレーライスにカツを加えたカツカレーである。

明日の成功を祈り、二人と一匹で軽い宴会のようになった。

酒の類は流石に出さなかったものの、野営中には変わらないので程々にして切り上げて明日に備える。

ゴブリン君が酒を強請ったが流石に危険なのは分かっているのですぐに夜番に就いた。

［機兵の谷］到着まで後一日……。

４．アニキと呼ばれてたが気にせずに今後の事を。（後書き）

目的地まで後一歩のところまで来ました。

アストレイは一応転生したので最初の約束は守ろうと思ってます（単に放棄した後が怖いだけとも言いますが）

しかし、実際暗黒機兵はどのくらいの性能なんですかね？
バトルオブナイツで姿こそ確認できますがＨＰの表記がないからわからないんですよね。

７．「ルーン装備一式を手に入れた！」
ルーン装備一式
不思議な文字が刻まれた装備品一式。
ＨＰ＋２００

８．「ムーンストーンを手に入れた！」
ムーンストーン
魔力が増大する不思議な宝石。
ＭＰ＋２００

９．「お、喋れるのか？」
ゴブリンザク
ゴブリンザクはルーン装備を身につけた！
ＨＰ５０（＋２００）

感想お待ちしてます！

5．［機兵の谷］は危険でいっぱい！？（前書き）

漸く夜勤から開放されたので5話を投稿。

暗黒機兵に関しては手元の外伝スペシャルの設定に従い、壊して埋めました。

5．［機兵の谷］は危険でいっぱい！？

皆さんこんにちは、毎度お馴染み騎士アストレイです。

［機兵の谷］に到着し、お目当ての暗黒機兵を探して色々とやった結果、見事発掘には成功しました。

――――――発掘には成功したんですが……正直、古代の機兵が眠る［機兵の谷］を舐めてました。

「ピーーーーーーーーーーーーーー！？」
「ひぃいいいいい！？何だよあの化物はーーーーーーーーーーー！？」
「ゴブリン君！　叫ぶのも良いけどとにかく走れーーーー！！」

後ろから追ってくる化物から逃げるべく、俺達一行は死にもの狂いで走り続ける。
捕まったら最後、ＢＡＤ　ＥＮＤに直行なのは目に見えているので全力で走って走って走り続ける。

ズシンズシンと、後方から聞こえてくる足音が俺達の焦りを煽るがそんなもの一々気にしてなど入られない。

……奴の一歩は此方の一歩の何倍もあるのだ。
もっと速く走らなきゃ、後ろから追いかけてくるあれに追いつかれるっ！

――――――そう。

『クワセロ！クワセローーーーーーーーーーーーー！！』

己の飢えを癒す為、俺達を追って来る［ゾンビ機兵ファラオ１３世］からは！！

5．［機兵の谷］は危険でいっぱい！？

遡ること数時間前。

途中、ベビードラゴンがいなくなるというハプニングが起こった以外は何の問題も無く俺達一行は［機兵の谷］へ到着した。

転生直後に死に掛けた場所に、こんなに早く戻ってくることになるとは思っていなかったが……まぁ、それは置いといて。

「幾多の同胞達の夢を叶える為に！確実に起こる物騒な運命（みらい）に抗う力を得る為に！！

［機兵の谷］よ、俺は帰って来たっーーーーー！！」

目の前の［機兵の谷］に向って叫んでみた。

……何故叫んだかって？　深い意味は無い！！

「ピー？」

「こらっ！男にはそっとしとかなきゃいけない時があるんだ。邪魔しちゃいけない」

後ろからなんか生暖かい視線を感じるが気のせいだ！！

「さて、早速発掘に取り掛かるとｓ「あ、その前にちょっといいすか？」なんぞや？」

つるはし片手に走り出そうとする俺に、ゴブリン君が待ったを掛ける。

「アニキが機兵を探しに来たのは知ってるんですがなんか当てはあるんですか？

当ても無しにこの広い谷を二人だけで探すのはちょっと無茶な気が……」

と、ゴブリン君が不安を口にする。

まぁ無理も無い。

本来発掘作業は綿密な調査と莫大な資金、そして大勢の作業者を必要とするのだ。

俺たちの探す機兵は巨大だが、この広い谷の何処かに埋まっている以上、二人で探すのは普通なら無理である。

ーーーーーそう、普通ならば。

「大丈夫、当ても無く探すわけじゃない」

そう言って、俺はザックからある物を、ハンドレス・トランシーバー（この世界には無いだろうが）と片眼鏡がセットになったような形状の物を取り出す。

「これは？」

「これはソーサラースコープといって、見えにくいものや隠れているものを探知してくれる道具だ。

埋まっているといってもそれ程深くには埋まっていないだろうから探知出来る筈だ」

暗黒卿（ダークロード）が封印されたのは覇界神（バロックガン）との戦いが起こるよりも遥か過去。

戦いに敗れた暗黒卿は配下共々［機兵の谷］の地下深くへと封印され、未来でスペリオルドラゴンが太陽の暴走を止めるために命を落とすと共に復活。

その後、彼はデスペリオル三魔卿の機兵をはじめとした古代機兵を発掘し戦力として運用している。

だが、発掘された機兵の中には彼の愛機である［暗黒機兵クーロン］の姿は存在しないのだ。

選ばれし者達との戦いの中でも、彼は［魔龍機デビルドラグーン］を生み出すほどの力を持っているにも関わらず機兵に搭乗せずに戦っている。

このことから俺は、過去の戦いで［暗黒機兵クーロン］は破壊されたのではないかと考える。

黄金神（スペリオルカイザー）との戦いで暗黒機兵は破壊され、他の機兵とは違い地下に封印されていない暗黒機兵の残骸は永い時の中で朽ちてしまったのではないだろうか？

そう考えれば暗黒卿が機兵を使用しなかった理由にも説明がつく。

そして、その残骸が存在する可能性が最も高いのがこの［機兵の谷］である。

他の古代機兵が数多く封印されているこの谷ならば暗黒機兵の残骸が埋まっている可能性も高い。

たとえ残骸が存在しなくても他の古代機兵を発見できれば万々歳である。

「これを使いながら谷の中を歩き回って、反応があった場所を掘れば何か出てくるだろ？」

「適当っすね」

「やかましい！！」

そんなわけで。

「頑張って探すぞー！」
「おー（ピー！）」
テンション低いなー。
「見つかったら今晩は宴会だー！！」
「オーー（ピーー！！）！！」

（谷内部を探索中）
「この間のアレ（神同士の最終決戦）で崩れやすい筈だから注意しろよー」
「へーい」
「ピー」

（谷内部を探索中）
「お、早速反応有り！」
「マジですか！？」

（発掘中）
「……顔？」
「……顔っすね。探してる機兵はこれですか？」
「別物だな。次行ってみよー」
「ピー」

（再び谷内部を探索中）

「そういえば、何で俺達つるはしとかスコップ使ってんすかね？」
「そりゃあお前、埋まってる物を掘り出す為だろ」
「いや、道中でアニキがやってたアレ（錬金術）で上の土を退かせばいいんじゃ…」
「……それもそうだな、次からはそうするか」
「その方がいいっすよ（その方が楽だし）。あ、反応出たっす！！」

（発掘中）

「…何か丸いけどこれも機兵ですかね？」
「埋めなおせ！　いや、むしろぶっ壊すから下がってろ！！（メガグランチャー装備）」
「ピー？」
「ちょっ！？　あ、アニキ落ち着いて！！　ここでそんな物ぶっ放したら崩落するから！！」
「汚物は消毒だーーー（バーニングフォース連射）！！」

（再び谷内部を探索中）

「何考えてんすか！？　自分で崩れやすいって言っておきながら俺達を殺す気ですか！？」
「……カッとなってやった。正直すまんかったと思ってる」
「……反省してるならいいですけど、さっきの丸いのに何か嫌な思い出でもあったんですか？」
「嫌な思い出というか、先のこと考えてもぶっ壊したほうがいいかなぁと思って」
「（先？）まぁ、全員無事な上にさっきの丸いのも壊せましたし良しとしましょうか」

「ピ～～～～♪」
「ん？どうしたって反応してる！？」

（発掘中）

「っ！？」

反応があった場所の土を錬金術で排除し、そこから現れた機兵を見て俺は息を飲む。

「ありゃりゃ、見事に壊れてますね」
「…ピー」

ゴブリン君の言うとおり、掘り出した機兵は原型こそ留めているものの、手足は折れ曲がり頭部に至っては半分失われている。

何処からどう見てももはや動かない壊れた機兵だが、これこそが俺の探していた機兵である！！

「っいよっしゃぁあああああああああああ！！！」

両腕を掲げ、俺は歓喜の声を上げる。
正直存在しないのでは？　仮に存在しても見つからないのでは？と思っていたがこんなにあっさりと見つかるとは！！

「あ、アニキ？もしかしてこのガラクタがアニキの探し物ですか？」

「そう！その通りだよゴブリン君！！これが、これこそが俺の探していた物だよ！！」

ゴブリン君が疑問の声を上げるが、そんなもの気にもならない。

確かに、ゴブリン君から見たらただのガラクタかもしれないが俺にとっては何よりも価値がある物である。

頭部が破損し、手足が折れ曲がっているということは勝手に動き出す可能性が無いということ。

そして！！何よりも重要なことはコックピットのある胸部、全ての機兵の心臓（コア）とも言える場所がほぼ無傷だということだ。

研究資料としては正に超最高な一品であるが……装甲の至る所についている拳の跡はスペリオルカイザーだろうか？……当時まだ成り立てとはいえ、神と殴り合って原型を留めているとは予想以上である。

「あー、アニキ？喜んでるところ悪いんですけどちょっと質問が」

「ウヒャヒャヒャヒャヒャ！！　……って質問？」

「こんなでかいのどうやって運ぶ気ですか？
見事に壊れてますから乗って帰る訳にもいきませんし」

「……あ」

……見つける事に気を取られすぎてて、どうやって運ぶか考えてなかった（汗）

・・・・・・・・・・・・・・・

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

結局、先程発見した機兵を完全に掘り起こして運び出すことになり、先程の場所まで戻ってきたのだが……。

「ここにあった筈…だよな？」

「ここにあった筈…すよね？」

「ピ？ピ〜〜」

戻ってきたその場所に先程の機兵の姿は無く、周りの岩壁は崩れ、機兵のあった場所には代わりに巨大な穴が開いている。

「地下にでも落ちたんですかね？さっきのアレ（バーニングフォース連射）で結構揺れましたし」

と、ゴブリン君は言っているが断じて違う。

確かに揺れはしたが地盤沈下が起こるような威力はなかったはず。

そこで俺は、この［機兵の谷］に存在していた筈のある機兵を思い出す。

「……ゴブリン君、ベビードラゴン、急いでここから逃げるぞ」

「へ？」

「ビ？」

ゴブリン君とベビードラゴンが訳が分からないという顔をしているが、悠長に説明をしている暇がない。

俺の思い出した情報が確かならば、間違いなく奴は俺達を探しているはず。

奴に補足される前に急いでここから逃げなくては！！

「機兵の回収なんて後回しだ！　死にたくなければ急いでここからはなれるんだ！！」

「ちょ！？あ、アニキ落ち着いて！！一体どういうことですか！？」

混乱するゴブリン君の腕を掴み、急いで逃げようとしたその時だった。

……奴が戻ってきたのは。

ズシンズシンと、地響きと共に聞こえてくる巨大な足音。

「ピ！？　ピーーー！！」

「な、何だ！？」

「……遅かったか」

ここ1週間で嗅ぎなれた死体特有の死臭。

姿も見えていないのにも関わらず、ここからでも分かるほどの死臭を纏った何かがこちらに近づいてくる。

［機兵の谷］［消えた機兵］［離れた場所からでも分かる死臭］と、ここまでキーワードが揃っていれば出てくる物は一つしか有り得ない。

ーーーーーそう。

『クワセロ！クワセローーーーーーーーーーーー！！』

岩壁の向こうから顔を出した物はこの［機兵の谷］の最深部で蠢いている機兵のゾンビ、即ち［ゾンビ機兵ファラオ13世］である。

「ななななな！？何だありやぁーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー！？」

「ピーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー！？」

「叫ぶ暇があったらとっとと走れーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー！！」

『クワセロ』を連呼しながら追って来るゾンビ機兵と、それから逃げる俺達。

長い年月を生きても忘れられない、最低最悪の夜の始まりである。

５．［機兵の谷］は危険でいっぱい！？（後書き）

お目当ての機兵は発掘できましたが、余計なものも掘り出したせいでピンチです。

途中でアストレイが壊した物が何なのか、分かった人はいるでしょうか？

１０．「地底の底からゾンビ機兵が這い出した！」
ゾンビ機兵ファラオ１３世
ゾンビ機兵は生物の法力を求めている。
ＨＰ３２００

6．ゴブリンの惨劇（前書き）

戦闘を書こうとしていた筈なのに……どうしてこうなった！？

後半少し暴走気味。

6．ゴブリンの惨劇

かつて二柱の神々が死闘を繰り広げ、数多くの機兵の眠る禁忌の地［機兵の谷］。

本来ならば遥か先の未来まで静寂が支配する筈のこの谷は現在、機兵特有の地響きと爆発音が轟く危険地帯と化していた。

6．ゴブリンの惨劇

『クワセローーーーーーーーーーーーー！！』

「食われてたまるかーーーーーーーー！！」

「ピーーーーーー！！」

後ろから追って来るゾンビ機兵に向って俺は、肩に担いだ大型晶霊銃メガグランチャーを発射する。

メガグランチャーから放たれた火炎弾がゾンビ機兵に直撃するが、痛みを感じないのか若干よろめいただけで大した効果は見られず、隣ではベビードラゴンが小さな口を開きブレスを放っているが相手とのサイズ差がありすぎて全く効果がない。

「アニキーーー！！　何か手はないのか！？　このままじゃ追いつかれるぞ！！」

「手が無いこともないけど、少し時間が掛かるから発動する前に追

いつかれて即GAME（ゲームオーバー）OVERだ！！」
「役にたたねぇえええ！？」
「お前が言うなぁあああああ！！」

走りながら口論になるが、その隙を後ろから追って来るゾンビ機兵が見逃すはずもなく……。

『クワセロ！クワセロ！！クワセローーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー！！』

「「来たーーーーーーーー！？」」
「ピーーーーーーーー！？」

若干追いかけてくるスピードが上がり、唯でさえ近づいていた距離が更に縮まる。

俺たちの今の気分は正に猫（トム）に追い掛け回される鼠（ジェリー）そのものである。

あのドタバタコンビと違う点は鼠（ジェリー）は猫（トム）を返り討ちにすることもできるが、今の俺達には後ろから追って来るゾンビ機兵を打倒する術がないということである。

って変なこと考えてる場合じゃない！！　このままじゃ追いつかれる！！

追いつかれると判断した俺は、すぐさま目的の物をイメージしザックに手を入れる。

［機兵の谷］に到着するまで色々と試してみたが、このザックは某青い猫型ロボットのポケット同様に取り出すものを確りとイメー

ジしなければ何が出てくるか俺にもわからないのだ。

絶体絶命のこの状況でくだらないミスをするわけにはいかないので、確りとイメージして目的の物を取り出す。

取り出すと同時に俺はそれを目前のゾンビ機兵に発動させる。

「クロノグラス！時間を止めろーーー！！」

その瞬間、世界が静止した。

地面も、空も、周囲の岩壁も、目の前にいるゾンビ機兵も、世界に存在する全てが白く染まりその動きを止めた。

白く染まった世界で動くことの出来る唯一の例外、それはクロノグラスを発動させた俺とその仲間の一人と一匹だけである。

「あ、アニキ？これは一体…」

「ピ、ピー！？」

突然、全てが制止した白い世界に放り込まれたゴブリン君とベビードラゴンが困惑の声を上げるが気にしている暇は無い。

急ぎ両手を合わせ錬金術を発動、近くの岩壁に穴を開けて簡易シェルターを作り出す。

急ごしらえなので中はそれほど広くはないが、二人と一匹が入るだけの余地は十分にある筈だ。

「早くこの中に入れ！　もう直ぐ動き出すぞ！！」

「へ、へい」
「ピー！！」

ゴブリン君達が入ったのを確認してすぐさま俺もシェルターへと入り、入り口を閉じる。

閉じたと同時にクロノグラスの効果が切れたのだろう。

静止した世界に音が戻り、全てが動き出す。

獲物の俺達を見失ったせいでゾンビ機兵が暴れているのか、外で凄い音が聞こえるが気にする余裕はない。

「はぁはぁ…本当に……死ぬかと思った」
「アニキ、さっきの…はぁ…白い世界は…ハァ…一体？」
「ピピー…」

ゴブリン君の質問に対して答えるべく、息を整えザックから先程使った物と同じクロノグラスを取り出す。

「それは？」
「時間を止めるアイテム、クロノグラスさ。使えば自分と味方以外の時間をほんの少しだけ止められるんだよ」
「……まるで神様っすね」

……神か。

「そんなに便利なものじゃないよ。止められてもほんの少しだけだ

し、本物の神様はもっと凄いことが出来る筈だから…」

未来の世界から英雄を連れてきたり、とっくの昔に消滅した怨霊を召喚して手駒に加えたりとか出来るんだからこれくらい大したことない。

というか覇界神（バロックガン）や黄金神真剣（スペリオルカイザジ）でチート。

原作まで生きていられたらそんなチート神の戦いに強制参加させられるかもしれないんだよなー。

かといって覇界神が勝利して嵐吹き荒れる闇の世界なんて創造されたら最悪どころの話じゃないから何もしない訳にはいかないし、困ったものだ。

胸中でため息をつきながら、外で元気に暴れまわってるゾンビ機兵のことを考える。

俺がうっかり掘り起こしてしまったあの化物、［ゾンビ機兵ファラオ１３世］は第六章［黄金神話］に登場する魔物（モンスター）なのか機兵なのかよくわからない存在である。

カードダスの設定によると本来はここ、［機兵の谷］の最深部に存在するもので、ユニオン族・デスペリオル族の区別なく襲い掛かりエネルギーを吸収するという物騒極まりない存在である……某薬品会社の作品といい、ゾンビと名の付くものはこんなのばっかりか！？

まぁ、首…というか頭部を破壊すれば倒せるらしいのだが……

「……いや、無理だろアニキ」
「……だよねー」

そもそもサイズ差がありすぎて相手にもならないのだ。

ベビードラゴンのブレスでは威力が低くて（といってもその辺の魔物ならば蹴散らせる威力だが）効果がなく、俺の使える中でも一番威力の高い遠距離攻撃のバーニングフォース（メガグランチャー装備）を喰らってもあまり効いた様子もない。

接近戦？そんなことした日にはあっさり捕まってモグモグと食われるのがオチである。

残る手段は呪文書に記載されている上級魔法を使用することなのだが……正直、中てる自信がこれっぽちもないのだ。

なによりも詠唱の遅い俺では唱えきる前に発見されてしまうだろう。

「…だからといってこのままって訳にもいかないじゃないっすか」
「それはわかってるんだけどさ、何も思いつかないんだよ」
「ぴ～～」

せめてこちらにも機兵があれば何とか出来るのだが……ちょっと待てよ？

「なぁゴブリン君、ちょっと試したいことあるんだけど……」

・・・・・・・・・・・・・・・・・・

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

『クワセロ！クワセロ！！クワセローーーーーーーーーーーー！！』

暴れまわるゾンビ機兵を確認し、俺は呪文の詠唱を始める。

唱えるのは光属性の上級呪文「ディバインセイバー」、名前にゾンビと付いている以上はそれなりに効くはずである。

俺に気づいたのか、奴がこちらに向ってくるが逃げ回っていた先程とはちがい、もう恐れる必要はない。

『ザァアアアアアアアアアクゥウウウウウウ！！』

岩壁の中から現れた巨大なゴブリンザク、「きょだいかのみ」を大量に食したゴブリン君の一撃が突っ込んできたゾンビ機兵を吹き飛ばす。

そう、これこそが俺の考えた策。

といっても策と言えるほどのものでもないのだが、この際それは

どうだっていいだろう。

『はぁ！？　巨大化した俺があの化物を押さえ込んでいる間に詠唱する！？』

『そう！　巨大化したゴブリン君がゾンビ機兵を押さえ込んでいる間に俺が強力な術を詠唱して吹き飛ばす！！……まぁ、ただ時間稼ぎしてくれれば良いだけなんだけどさ』

『いや、理屈は分かるんすけど……巨大化なんて俺出来ないですよ？』

『大丈夫！巨大化できるアイテムも有るから！！』

『有るの！？』

そんなわけで、ゴブリン君には［きょだいかのみ］と［レッドラベンダー］等の薬草を大量に投与させて頂いたのだが……

『ザ～クザク！！』

『グゥオォオオオオオオオオォァアアアア！？』

……お前はどこのスタ〇ド使いだよ！？　と言いたくなる勢いでゾンビ機兵に拳を叩き込むゴブリン君。

何というか、このまま倒してしまいそうなくらいに暴走してます。

「アレー？時間稼ぎだけで良いって言ったんだけど…」

「ピー？」

巨大化&ドーピングしているとはいえ、機兵を圧倒するその強さは異常の一言に尽きる。

……やっぱり、嫌がるゴブリン君の口に薬草詰め込んで［フレアボトル］で流し込んだのがいけなかったかな？

とっくに詠唱を終えた俺だが、暴走しているゴブリン君が離れない為放つことも出来ず、巻き込まれないように距離をとっている間に戦いは進展をみせていた。

ゴブリン君の連撃によって身体を宙に浮かせたゾンビ機兵に、追い討ちとばかりに空中コンボばりの後ろ回し蹴りがヒットする。

吹っ飛ばされ、仰向けに倒れるゾンビ機兵。

『ザックっゥゥゥ！！』

ゾンビ機兵が起き上がろうとするが、ゴブリン君は踏みつけることでそれを阻止する。

踏みつけられたことで動きを封じられたゾンビ機兵が？くように手足を動かすが、その左腕を掴んだゴブリン君は、

『ザックゥゥゥゥアア！！』

『ガァァァァァァァ！？』

「あ、腕千切り取った」

「ピ、ピーー！？」

腕を千切り取られたゾンビ機兵は悲鳴を上げて転がりまわる。

……どうやら痛覚が無かったわけではないらしい。と、くだらない事を考えながら現実放棄を開始する俺。

その後、暴走ゴブリン君とゾンビ機兵の残虐ファイトはゴブリン君がゾンビ機兵の頭をキャメルクラッチでもぎ取るまで続き、ゾンビ機兵の機能が完全に停止すると同時に元のサイズに戻ることで完全に終わりを迎えた。

……その後、俺が［きょだいかのみ］を焚き火に放り込むことによって全て破棄し、この夜の記憶が［ゴブリンの惨劇］として俺の中に刻み込まれたことは言うまでもないだろう。

6．ゴブリンの惨劇（後書き）

アストレイがボロボロになってゾンビ機兵を打倒する筈が、ゴブリン君大暴走になってしまった。

ちなみに、アストレイがザックの中のステータスＵＰの薬草を大量に投与した為、アストレイとゴブリン君の力量差が更に開きました。

……本当にどうしてこうなった！？

１１．「ジャイアントゴブリンザクＧが現われた！！」
ジャイアントゴブリンザクＧ
ジャイアントゴブリンザクＧは力を持て余している！！
ＨＰ９５００

感想お待ちしています！！。

7．ボスの機兵とゴブリン君が何故アニキと慕うのか？（前書き）

暗黒機兵クーロンの能力が分からないので捏造しました。
後半ゴブリン君視点有り。

7．ボスの機兵とゴブリン君が何故アニキと慕うのか？

どうも、騎士アストレイです。

ゴブリン君の暴走から一夜明け、谷を出発した俺達は機能停止している［暗黒機兵クーロン］とバラバラにされた［ゾンビ機兵ファラオ１３世］を運びながらゴブリン君の古巣の森に向っています。

機兵も無いのにどうやって運んでいるかって？

昨夜のドーピングの影響か、ゴブリン君がとんでもなくパワーＵＰしてしまい、台車さえ用意してあげれば機兵を運べるくらいに強化されてしまいました。

ーーーーもうコイツはゴブリンザクのカテゴリーには収まらない気がします。

最初会ったときは然程身長は変わらなかったはずなのに今じゃ頭二つ分は違いますよ！！

「アニキ～？何で泣いてるんすか？」

「ピ～～？」

「いや、気にしなくてもいいから。何か急に泣きたくなってさ」

今だけは、仲間の優しさが辛いです。

7．ボスの機兵とゴブリン君が何故アニキと慕うのか？

数日後、無事に森に帰還した俺達。

夕食を終えた俺は現在、ゴブリン君のお陰で回収できた機兵を調べているのですが……いや、機兵って予想以上に奥が深い。

簡単に説明すると、機兵とは鋼鉄の身体を持つＭＳ族を模して作られた兵器である。

堅牢な装甲と並みの騎士や魔物（モンスター）では歯が立たない戦闘力から未来では主力兵器として扱われ、生身でこれと戦うには［円卓の騎士］クラスの力が必要となる。

一部の機兵は文字通り一騎当千の力を持ち、各章の主人公達の聖機兵・機甲神は世界を滅ぼす程の力を持ち、龍機に至っては操手の成長に合わせて強化されるというチート仕様。

正直、手元にあるアーチェ印の呪文書のＴＯＤ（ティルズオブデスティニー）とＴＯＩ（ティルズオブイノセンス）の兵器の記述を読んでいなければ全く理解出来ないで終っていた……人目の無いところでもっと読んでおいた方がいいな、うん。

で、現在調べているこの［暗黒機兵クーロン］はというと……

「流石は暗黒卿（ダークロード）マスターガンダムの愛機、とんでもないな…」

通常の機兵は搭乗者の法力（もしくは魔力）を動力として稼動するのだが、この機兵はとんでもないことに搭乗者だけではなく、周

囲の生きているもの（人間・ＭＳ族・魔物・植物）の生命力を吸収して己を強化していくという、悪の親玉らしい凄まじく迷惑な仕様である。

しかも吸収できる量に限界が無いという、正に世界全土（スタ・ドアカ・ワールド）のエネルギー奪取を目論む暗黒卿（ダークロード）に相応しいチート機兵と言えよう。

「……解析が終ったら完全に廃棄した方がいいな」

ありえないとは思うが、俺が持ち出したせいで未来まで風化せず残ってました！なんて事態になったら洒落にならない。

神と戦って尚原型を留めている頑丈さから有得る未来を想像した俺は、全てが終ったら必ず廃棄することを心に誓い一刻も早く解析を終えるべく手を伸ばす。

作業に取り掛かろうとしたその時、世話になってばかりのゴブリン君が頭を過ぎる。

彼には本当に世話になってばかりである。

飯を一緒に食べただけの俺のことをアニキと慕ってくれるうえに、［機兵の谷］からここまで機兵二機を運ぶという、とんでもない重労働をこなしてくれたのだ。

谷で解析すると言った俺に対して「こんな危険な場所じゃあ安心して作業なんて出来ないじゃないっすか」と言って運んでくれた彼にはどれだけ感謝しても足りない。

「……やっぱり何かお礼をしなくちゃ駄目だよなぁ」

ゴブリン君へのお礼は何がいいかを考えつつ作業に没頭する俺であった。

【ＳＩＤＥ：ゴブリン君】

［機兵の谷］から帰還し、夕飯を食べ終えたアニキはそのまま掘り出した機兵のコックピットに篭ってしまった。

そんなアニキの姿を見て、俺はため息をつく。

「全く、少しは休めばいいのに……お前もそう思うだろ？」

「ピー？」

隣にいるベビードラゴンに声をかけるが意味が分かってないらしく首を傾げている。

まったく、危険な場面ではこちらの言葉を理解しているような行動を見せる癖に普段はこれだ。

アニキはこのチビ助のことを『神様の分身』と言っていたが……流石に冗談としか思えない。

欠伸をして寝始めるベビードラゴンの頭を撫でながら、俺は自分

がアニキと呼ぶ少年のことを考える。

騎士アストレイ、飢え死にするところだった俺を助けてくれた上に鎧まで与えてくれた命の恩人。

……その恩人を、俺は利用するだけ利用して捨てるつもりだった。

神々の戦いのせいで荒れ果てたこの世界で、食べ物も満足に得られずに森を彷徨っていた俺は、ある日幼いドラゴンを連れたガンダム族のガキを見つけた。

飢えていた俺はすぐさま襲いかかろうとしたが、そのガキはとんでもない威力の魔法を使うではないか。

絶対に敵わない、そう思って引き返そうと思ったその時、食欲を誘う良い匂いがし始めたので隠れて様子を窺えば、あろうことかそのガキとドラゴンは美味そうなものを食べているではないか！？

飢えていた俺に目の前の光景を無視して去る事など出来よう筈がなく、気づけば食事に参加していた上におかわりまでしていた。

食事が終っても何も言われず、このガキを上手い事利用すれば今より良い暮らしが出来るかもしれない、そう思った俺は旅に同行することを決めていた。

その後、ガキは俺が言葉を喋れないと分かると肩から掛けている鞄から見たことのない文字が刻まれた鎧を取り出し、それを俺に与えてくれた。

途中でガキがお礼をすると言ってこの鎧をくれた時は、正直驚きを通り越して呆れたものだ。

冗談でこの鎧を欲しいと言ってみたが、どう考えてもこの鎧は俺みたいな薄汚れたゴブリンザクに与えていい物じゃない。

そんな鎧を本当にくれたばかりか他にもお礼がしたいと言ったアニキに対して、俺は愛想笑いを浮かべることが精一杯だった。

思えばこの時からだろうか？俺がガキのことを本心で『アニキ』と呼ぶようになったのは……。

［機兵の谷］で化物に襲われたときも、アニキは貴重な道具を全て俺のために使ってくれた。

その時、アニキはこう言った。

「こんな物よりもゴブリン君の方が大事だ。それに……これでお前が傷つく可能性が減るなら安いもんだろ」

…その言葉を聞いて、俺は決意した。

この命を賭けてこの少年を護ろうと、こんな薄汚いゴブリンザクにここまでしてくれる少年に報いようと。

その後、湧き上がる衝動を抑えきれずに暴れたせいか、顔が引き攣っていた気がするが……恐らく気のせいだろう。

・・・・・・・・・・・・・・・・・

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

ベビードラゴンを撫でる手を止め、目の前で燃える焚き火に視線を移す。

……森の中で燃える火の光は、森に生きる獣を避ける護りの光であるが、知恵のある魔物にとっては獲物の場所を知らせる目印に過ぎない。

ベビードラゴンに一言掛け、愛用の斧を手にその場を立ち去る。

足音を消しながら走り、俺はそいつ等の背後を取る。

木陰から様子を窺うと蛇を思わせる何かが見える。
鞭にも見えるが恐らくは触手の類、そして触手がついた気色悪い魔物などこの森には一種類しかいない。
「…ワームアッグガイ2匹か……まぁ、何とかなるな」

ワームアッグガイ。
この世界の森や洞窟に生息する下級の魔物。
人型の魔物よりも大型で、両腕のミミズを思わせる触手で獲物を捕獲し口から出る酸性の唾液で溶かして捕食するのだが、触手にさえ気をつければ苦戦せず倒せてしまう。
……これは噂だが、女性のみを襲う突然変異の個体が存在するという。

ゴブリンザクよりも強力な魔物が2匹。
本当ならアニキを呼ぶべきだが作業の邪魔をしたくはない。
というより、この程度なら俺一人で十分だ。
気づかれないように走り出し、勢いのまま斧を振り上げワームアッグガイの背中を切り裂く。
「ぎぃいいいいいい！？」
切り裂いたワームアッグガイが悲鳴を上げるが、気にせずその頭

を叩き割る。

斧を引き抜くと同時にワームアッグガイが倒れるが、気にせずに2匹目へと向かう。

1匹目が悲鳴を上げた時点でこちらに気づいていたのか、2匹目がこちらに向かって触手を伸ばす。

向かってくる触手を軽く避け、避けた触手を掴んでこちらに引き寄せる。

「オラァ！！」
「ぎぃいい！？」

ゴブリンザクの俺に自分を超える力があるとは思っていなかったのか、あっさりとこちらに引き寄せられる。

俺は引っ張った勢いのままに、握った斧をその顔面に叩き込んだ。

「ただいまー」
「ピー」

2匹のワームアッグガイを始末し、野営している場所まで戻るとベビードラゴンが迎えるように声を上げる。

機兵の方を見るとアニキの背中が見える。
変わらずに作業する様子を見て、呆れた俺はため息をつく。
「……全く、少しくらい休めばいいのに」
……夜番の交代までまだ時間がある。
俺は再びベビードラゴンの頭を撫でながら星を眺めるのだった。

7．ボスの機兵とゴブリン君が何故アニキと慕うのか？（後書き）

暗黒卿の目的が全世界のエネルギー奪取だったのでエネルギードレインが機兵の特殊能力になりました。

スペリオルカイザーとマスターは地力に差があるので、当時のマスターは他の生き物からエネルギーを奪って対抗したんじゃないでしょうか？

ゴブリン君がアストレイをアニキと呼ぶ理由をゴブリン君視点でやってみました。

色々と変な所がありますが……作者ではこれが限界だったりします。

１２．「ワームアッグガイが現われた。」

ワームアッグガイ

森や洞窟に生息している。

ＨＰ１３０

お気に入り登録数が１４人になりました。皆さん本当にありがとうございます！

……感想書いてくれたら作者が泣いて喜びます。

8．最終話「東の地を目指して」（前書き）

次回からはラゴル地方から始まります。

8．最終話「東の地を目指して」

8．最終話「東の地を目指して」

機兵を回収し解析を開始してから4ヵ月後、俺達は森の外の荒野へと足を運んでいた。

「アニキー！！準備ＯＫですぜー！！」

「それじゃーちょっと離れてろー！」

何故荒野に出ているかって？

解析の終った［暗黒機兵クーロン］に完全に破棄する為である。解析を終えてその構造を把握した今、こんな危険物は破壊しておくに限る。

……まぁ、解析に4ヶ月もかかったが、そこはボスの機兵なんだし、むしろ4ヶ月で解析を終えた自分を褒めておきたい。

「天光満つる所に我はあり」

唱えるのはテイルズシリーズをプレイしている者ならば確実に知っているであろう有名な呪文。

「黄泉の門ひらく所に汝あり　出でよ　神の雷」

かつて魔王ダオスに対抗する為に魔術師エドワード・Ｄ・モリス

ンが編み出した雷の上級魔術。

当初は錬金術の［分解］で粉々にしてやろうと思ったのだが、流石は神と激闘を繰り広げた機兵、何で出来ているのか全く理解できなかったぜ。

という訳でゴブリン君にわざわざ荒野まで運んでもらい、上級魔術を叩き込んでやることにした。

一応呪文書に記載されている魔術の類は全て叩き込むつもりだが、それで壊れなかったらどこかの火口にでも沈めて封印する予定である。

「ぶっ壊れろ！インディグネイション！！」

虚空より生み出された特大の雷が暗黒機兵に降り注ぐ。

「す、スゲェ…」

「ピー！！」

後ろの方でゴブリン君とベビードラゴンが驚きの声を上げるが、その声を無視して次の詠唱に取り掛かる。

俺が壊そうとしているのは神に反逆した暗黒卿（ダークロード）マスターガンダム

の愛機。

神との戦いで破損し、操手不在とはいえこの程度で終る訳がないーー！

ぴしり。

――――だが、そんな俺の予想とは裏腹に暗黒機兵は最期を迎える。

降り注ぐ雷の中で微かに聞こえた音を切っ掛けに、暗黒機兵の全体に亀裂が走り、そして――――

ぱきん！

かつて、神に反逆した騎士が駆った機兵は、あっさりとその最期を迎えたのだった。

「…終ったんですか？」

「…ピー？」

「……多分」

聞いてくる一人と一匹に、俺はそう答えるしか出来なかった。

…………襲い掛かって来いとは間違っても思わないが、あまりにもあっさりとやられすぎじゃなかろうか？

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

あっさりしすぎた暗黒機兵の最期から二日後、俺達は再び森の入り口にいた。

「それで？今度はどこまでいくんですか？」
「ピー？」
「次の目的地は……東だ！！」

聞いてくるゴブリン君とベビードラゴンに俺は東の方角へ指を向ける。

俺たちのいる未来ではラクロアと呼ばれる国が建国される土地から遥か東、そこは二体の聖機兵が眠るラゴル地方である。

何故俺達が旅の準備をしているか？

その理由を語るには、昨夜の会話まで戻る必要がある。

『…ゴブリン君、これからどうしようか？』
『どうしようかって…何か目的があってあの機兵を掘り出してきたんじゃないんですか？』

『うん、最初は掘り出した機兵を解析して強力な機兵を作るのが目的だったんだ』
『なら作ればいいじゃないですか』

そう、作ればいいのだ。

掘り出してきた二体の機兵からその構造は理解したし、材料となる鉱石や武装のアイディアも幾つかある。
やろうと思えば暗黒機兵の再現も出来るだろう。

だが……

『駄目なんだよ。それじゃあ届かないんだ』
『届かない？』

そう、届かないのだ。

二柱の神の戦いを目撃し、その内の一柱と戦った暗黒機兵を調べた今だからこそ理解できる。
複製（コピー）の機兵では原典（オリジナル）を倒した黄金神（スペリオルカイザー）と同格の覇界神（バロックガン）にはまるで届かない。

カードダスの設定が確かならば、復活したバロックガンは生体コアに取り込んだリリーナ姫の力であの時以上の力を持っている。

仮にリリーナ姫を奪われなくともバロックガン封印の為には「機兵の谷」に向かわなければならないのだ。
リリーナ姫が近づけばバロックガンの力も増す、力を増したバロックガンは自力で封印を打ち破り地上へと出てくるかもしれない。

そうなったら確実に姫は奪われ、生体コアにされてしまうだろう。
そうなったら不味い、不味すぎる。
従機兵（デ・ドール）を見る限り古代機兵は神の影響を受ける。
谷に眠っていた暗黒機兵とゾンビ機兵を基にして作成した機兵では、決戦時にバロックガン側に回る危険性があるのだ。

そういうわけで、現在の俺は途方に暮れている訳だ。

『…アニキが困ってるのは分かりました』
『……』
『…だったら気晴らしに旅とかどうでしょうか？』
『…え？』

ゴブリン君の言葉に、俯いていた顔を上げる。

『実は先日、東の方に7つの流れ星が走るのを見ました。
どうせ時間は腐るほどあるんですし、その流れ星を探しに行くのはどうでしょうか？』

その言葉を聞いて、俺は二体の機兵の事を思い出す。

第四章［機甲神伝説］に登場する月の機甲神アルテイヤーと緑樹の機甲神ジュピタリアスの事を。

機甲神。

それはこの世界（スダ・ドアカ・ワールド）とは別の星、［月の王国セレネス］で作られた機

兵とは別の技術で作られた兵器。

王家の者が操るエルガイヤーとアルテイヤー、それに従うマーキュリアス・アクアリウス・ジュピタリアス・オルフェリス・ギガンティスの五体の機甲神、合わせて七体の機甲神が存在する。

一機だけでも通常の機兵とは比較にならない程に強力だが、その真価は全ての機甲神が合体した姿、超機甲神にある。

合体した超機甲神ガンジェネシスは通常の機兵以上の巨体を誇り、その力は未来で結成される初代シャッフル騎士団でも最強に位置する。

原作ではこの内の二体の機甲神、月の機甲神アルテイヤーと緑樹の機甲神ジュピタリアスが敵の手に渡り、後に敵として登場する。

もっともアルテイヤーは発見された時点で大破していた為、改造され影機甲神カオスガイヤーとなるのだが……関係ないのでそれは置いておこう。

ゴブリン君が見た7つの流れ星とは間違いなく、この星に流れ着いた七体の機甲神の筈。

戦争のあったセレネスから逃げ延びた二人の王子と七体の機甲神は古代のスダ・ドアカに送られ、永い眠りの果てに［機甲神伝説］で目を覚まし、兄弟で悲しい戦いを繰り広げることになる。

さて、ここで重要なのは敵の手に二体の機甲神が渡るということである。

敵の手に渡るアルテイヤーの中には第四章の主人公ネオガンダムの兄であるルナガンダムが眠っている筈。

目覚めた彼は弟のネオガンダムを逃がした後、仮面騎士としてデラーズ王国に潜入する一方で、薔薇騎士として弟を助けていたが後に洗脳され影機甲神の操手にされてしまう。

つまり、今のうちにアルテイヤーを発見してしまえば後の悲劇を防げる上に大破しているアルテイヤーという最高の研究資料が手に入るのだ！！

……中のルナガンダムはどうするかって？　勿論考えはある。

ＴＯＤ（テイルズ　オブ　デスティニー）に登場する天空人愛用のコールドスリープ装置で未来までぐっすりと眠ってもらう予定である。

彼がいないとネオガンダムを逃がす者がいなくなるのだから当然の措置だろう。

……まぁ、見捨てるようで良心が痛むのでエルガイヤーも探す気だが。

「忘れ物はないかー！」
「無いっす！」
「ピー！」

一人と一匹に声をかけ、まだ見ぬ機甲神を求めいざ出ｐ「アニキ、

ちょっといいですか？」なんぞや？

呼び止められたので後ろを振り向くと、ゴブリン君が布を被った何かを運んできた。

目の錯覚じゃなければかなり大きい。

「流石に徒歩で別の土地を目指すのはきついと思い、アニキには内緒でこんなのを用意してみました！！」

ゴブリン君が勢いよく布を取り外すと、そこには見事な馬車と馬車に繋がれた鳥と獣が合わさったような魔物、ビグロフォンの姿があった。

ビグロフォン。

この世界の高地等に生息する翼獣型の魔物で、強い者には忠実に従う習性があり、未来ではザビロニア帝国の要塞入り口を守っていたりする。

なお、間違ってもこんな森の中にはいない魔物である。

「……ゴブリン君、馬車は分かるけど……このビグロフォンは何処から捕まえてきたんだ？」

俺がそう聞くと、ゴブリン君は……

「いやー、本当は馬を用意したかったんですが中々見つからなくて……どうするかなぁって思ってたら丁度いいところにコイツが居たんで馬車に繋いでみました！！」

と、何でもないようにあっさりと答えてしまった。

……もうコイツをゴブリンザクと思うのは止めよう、そう思った俺は絶対に悪くない。

「ま、まぁ気を取り直して、東の地を目指して！」

「いざ出発！！」

「ピー！」

「ピギー！！」

馬車に繋がれたビグロフォンが勢いよく走り出す。

目指すは聖機兵と機甲神が眠る地、辺境のラゴル地方。

そこで何が待つのかは分からないが、少なくとも何かはある筈。

まだ見ぬ土地に想いをはせ、俺達は住み慣れた森を後にするのだった。

第一章［機兵探索編］ー完ー

8．最終話「東の地を目指して」（後書き）

ようやく第一章が終了。

暗黒機兵があっさりと壊れたのは元々ボロボロだった上にアストレイが内部を弄り回したから。

ビグロフォンが森の中にいたのは住処を失って彷徨っていたら良さそうな場所を見つけたからということで。

１２．「ビグロフォンが馬車を引いて現われた。」
ビグロフォン
ゴブリン君に敗れ、馬車に繋がれてしまった。
ＨＰ３７０

人物設定（プロローグ～第一章最終話）

人物設定（プロローグ～第一章最終話）

名前：騎士アストレイ

年齢：０（転生したばかりなので）性別：男

身長：騎士ガンダムと同じくらい　体重：鎧無しでもそれなりに重い

見た目：武者〇伝？の超将爆牙の見た目を赤を基本色に騎士風に直した感じで、ザックを背負っているのでマントは付けていない。

＜好きなもの＞

平和　ロボット（中でもスーパー系が好き）　共に旅をしている仲間　風呂　猫

＜嫌いなもの＞

トラック（前世での死因）　馬鹿神（ストリームカイザー）（創世記に送られた上に出た場所が最終決戦の真下だったから）、

黄金神（スペリオルカイザー）・覇界神（ロックガン）（嫌いというより苦手）　一度交わした約束を破る奴

＜備考＞

・基本的に争いごとが嫌い。

・目的があればあらゆる手段を使って進むが、目的が無くなれば途端に何も出来ない駄目人間化する。

・生来のロボ好きもあり、最近機兵の設計図を書くのにはまっている。

＜能力＞

?.錬金術

漫画「鋼の錬金術」に登場する国アメストリスにおいて、発展した技術及び学問。

錬成陣を用いて、物質の構成や形を変えて別の物に作り変える技術とそれに伴う理論体系を扱う学問がある。

現実における錬金術とは一部の用語が共通する以外は全く関係がなく、むしろ魔法に近い（作品中では科学技術として位置付けられている）。

アストレイは「鋼の錬金術」に登場する様々な錬金術師の知識を頭の中に書き込まれているため彼等の錬金術を発動できるが、元の能力が凡人なので使いこなせないでいる。

作中で遠隔練成、錬丹術を発動できなかったのはアストレイの中で錬金術と錬丹術が別の技術と認識されていたせい。

?.テイルズ各種の武術・特技・魔法

テイルズ各種の武術・魔法を使用できる。

ただし、武術に関しては素質があるだけで、初期から覚えている技以外は鍛錬を積んで習得する必要がある。

魔法は最初から全て使用できるが、上位魔法は集中と詠唱が必要。

?.なんでも入る鞄（ザック）

文字通りなんでも入る鞄（形状はザック）。

中にはテイルズ各種の全武器・防具・レシピ・道具（ＴＯＰ・ＴＯＤ・ＴＯＥ・ＴＯＤ２・ＴＯＳ・ＴＯＩ・ＴＯＶ）が入っており、その要領は無限。

奥義書や呪文書もこの中に入っているので、これが無くなったらアストレイは何も出来なくなる。

Ｆａｔｅ風ステータス

【属性】秩序・悪（目的の為なら手段を選ばないため）

【筋力】ｃ【魔力】ＥＸ【耐久】ｃ【幸運】Ｆ－【敏捷】Ｂ

名前：ベビードラゴン

年齢：０（誕生したばかりなので）性別：雄

身長：大き目の猫位　体重：大き目の猫位

見た目：猫位の大きさの黒い翼竜

＜好きなもの＞

騎士アストレイ（飼い主）　ゴブリンザク（飼い主）　食べ物（雑食）　昼寝、狩り

＜嫌いなもの＞

虎（アストレイが暇潰しで作った虎のヌイグルミを見ただけで燃やすほど）

飼い主を傷つける奴等　昼寝を邪魔する者全て（飼い主含む）

＜備考＞

・黄金神（スペリオルカイザー）の肉体が無垢な竜の幼生として生まれ変わった姿。

・当初は自分と同じ黄金神の一部である［黄金の鎧］を持っている騎士アストレイについて来たが、現在では普通にペット化している。

・元が神の肉体の為か、既にラクロア付近の魔物（モンスター）では歯が立たない戦闘力を持つ。

Ｆａｔｅ風ステータス

【属性】秩序・善

【筋力】Ｂ【魔力】Ａ【耐久】Ｂ【幸運】Ｄ【敏捷】Ａ

名前：ゴブリンザク（ゴブリン君）

年齢：２４　性別：男

身長：ＯＶＡのネオブラックドラゴンと同じくらい　体重：鎧無しでもそれなりに重い

見た目：普通よりも大きく、銀色の鎧を着た戦士（ファイター）ザク

＜好きなもの＞

騎士アストレイ（息子のように思っている）　ベビードラゴン（ペット）　肉

＜嫌いなもの＞

神（戦いの余波で仲間が死んだ為）　薬と名の付く全て（アスト

レイに飲まされた薬草が凄まじく苦かった為）

＜備考＞

・アストレイの力を見て利用する為に近づいたが［機兵の谷］のアストレイの行動で改心、今では『アニキ』と呼びながら世話を焼いている。

・アストレイがステータスＵＰの薬草を全て（１４（薬草全種類）×１０５（７作品分）＝１４７０）を全て飲ませたため、生身で機兵を持ち上げるほど超強化されてしまった。

・当初はアストレイから与えられたルーン装備一式の知力上昇効果のお陰で言葉を話せたが、薬草強化のせいで今では鎧無しで喋れる。

Ｆａｔｅ風ステータス

【属性】秩序・中庸

【筋力】Ａ＋＋【魔力】Ｆ【耐久】Ａ＋【幸運】Ｄ【敏捷】Ｂ

＜おまけ＞

名前：ピグロフォン

年齢：９　性別：雌

身長：大人の牛くらい　体重：かなり重い

見た目：ピグロフォン

＜好きなもの＞

肉　休憩時間（ゴブリン君が休む暇なく扱き使う為）

＜嫌いなもの＞

ゴブリン君（現在の馬車馬生活の元凶）　野菜（肉食）

＜備考＞

・放浪の果てに漸く住めそうな森を見つけ、腰を下ろそうと思ったその時にゴブリン君に捕まってしまった哀れすぎる魔物。

・これから先彼女は文字通り馬車馬の如く扱き使われる運命にある。

・乗り物である彼女に出番は……多分無い。

人物設定（プロローグ～第一章最終話）（後書き）

第一章の人物設定を公開。

設定は出来てるのに……何で俺には文才が無いんだろう。

9．たどり着いた新天地、やることは鬼ごっこ？（前書き）

ようやく投稿。

アストレイの冒険は（命を賭けた）鬼ごっこから始まります。

俊様から指摘があった為、成長したベビードラゴンの名前を「ブラック」に変更。

俊様ありがとうございます。

9．たどり着いた新天地、やることは鬼ごっこ？

――――――かつて、神々の間でこの世界の存亡をかけた壮絶な死闘があった。

――――――黄金神スペリオルカイザーと覇界神バロックガン。

――――――共にこのスダ・ドアカ・ワールドを守護する１２柱の神でありながら異なる思想から敵対し、結果として互いの眷族と世界を巻き込んだ大戦争へと発展してしまう。

――――――世界を賭けた戦争は長い年月続き、戦いは二柱の相打ちという結果で幕を閉じた。

――――――そして、二柱の神が世界から姿を消して二年、神不在の世界は徐々に元の落ち着きを取り戻しつつあった……。

皆さんお久しぶりです、騎士アストレイです。

ラクロア地方から旅立って約２年、砂漠を超えたり海を渡ったり

と色々ありましたが何とか目的地のラゴル地方に到着しました。
到着したのですが……もう何というか、目的とか誓いとか、色々なもの全て投げ捨てて帰りたい気分です。

俺達は現在……死に物狂いで全力疾走してます！！

「■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■！！」
「アニキ！！現実逃避してないで攻撃してくれ！！」
「キャゥウ！！」
「ＨＡＨＡＨＡＨＡ！！……無茶いうな！？」

足止めたら食われるだろうが！？

９．たどり着いた新天地、やることは鬼ごっこ？

長い旅の末、聖機兵と機甲神が眠るラゴル地方にたどり着きました。
さっそく機甲神の探索開始！…といきたい所ですが、俺達はラク

ロア地方から来たばかりなのでこの地方の地理は全くわかりません。

俺の原作知識はカードダスしかなく、ゴブリン君はラクロア地方の出身なので分かるわけありません。

まあ、こちらには馬車馬にして良し、パシリに使って良し、おまけに空も飛べちゃう万能ユニットビグロフォンがいるので人の住んでそうな場所を探すということになったのですが、ここで問題が起きました。

少し目を離した隙にビグロフォンが飛んで逃げました。しかも馬車を繋げたまま！！

以前逃げた時に縄を切られたので鎖に変えておいたんですが……鎖を引きちぎるのではなく、馬車をぶら下げたまま飛んで逃げるとは思いもしませんでした。

隣でゴブリン君も口を開けてポカーンとしています。

「……ゴブリン君、生き物って……必死になれば何でも出来るんだな」

「……そっすね」

「……ブラック、追いつけるか？」

「キャルルル（フルフル）」

ブラックでも追いつけない速さって……（汗）

あ、ブラックっていうのはベビードラゴンのことです。

２年で馬くらいの大きさになったので、いつまでもベビー（赤ん坊）は駄目だろうということで改名しました。

成長した分、吐き出される炎の威力や飛ぶスピードも上がったのですが、逃げる為に力を蓄え続けたビグロフォンには追いつけないようです。

……やっぱり扱き使いすぎたかなぁー？

そんなわけで、馬車を失った俺達一行は２年ぶりに徒歩で旅をすることになりました。

え？　新しく馬車を作ってブラックに引かせればいいだろうって？

そんなことした日にはＭＳ族の焼死体が二つ出来上がります。大人しそうに見えて結構プライドが高いんですよコイツ。

「なー、乗っけてくれたりとか「グルルルゥ！！」ダヨネー」

……ゴブリン君、絶対に無理だから諦めろって。

・・・・・・・・・・・・・・

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

「なぁ、アニキ…」

「……何？」

旅を続けて三日後、テントを張り終わり夕食の支度をしている時に突然、ゴブリン君が土下座してきた。

「こんなことになって……本当にすまねぇ！！」

「ちょっ！？いやいや！！なんでいきなり土下座なんてするのさ！？」

いきなり土下座される覚えは無いぞ！？

「あいつが逃げ出したのは俺が扱き使いすぎたからだ！！俺がまともな扱いさえしてればこんなことにはっ！！」

「へ？」

あー、ビグロフォンが逃げたことに責任感じてるのか……。

ってか、それ明らかにゴブリン君の責任じゃないから！！

「いや、扱き使ってたのは俺も一緒だし、そもそもゴブリン君が責任感じる必要ないから」

そう言って土下座を止めさせようとするが、強く責任を感じてるらしく頭を上げてくれない。

正直、ビグロフォンが逃げたのは扱き使い続けた俺達全員に責任があるのだから、ゴブリン君だけ悪いというわけでは決してないのだ。

一向に土下座を止めようとしないゴブリン君を見ながら、どうやってなだめたものかと頭を捻っていた……その時だった。

――――――――――奴が現われたのは。

「グルルゥ！！」

「っ！？　ゴブリン君、後ろだ！！」

「へ？」

「■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■！！」

ブラックが唸り出し、俺が叫ぶのと奴が叫ぶのはほぼ同じタイミングだった。

ドスンッ――――――！！！

重い足音を響かせ、月明かりがその巨大な姿を照らし出す。

土の色をした頑丈そうな皮膚……

血のように真っ赤な色をした単眼……

口は裂け、鉄をも噛み砕く牙が並ぶ顎……

短い腕、その代わりに発達した両脚……

それは人間やＭＳ族とは遥かにかけ離れた姿……所謂（いわゆる）恐竜の姿……

「ティ……ティラノザクぅううううううう！？」

数ある魔物（モンスター）の中でも最強クラスに名を連ねる一匹、恐竜ティラノザクの姿がそこにあった。

恐竜ティラノザク、それは第三章［聖機兵物語］に登場する操獣士インディガンダムことジムヘンソンＪｒが駆る魔物で、ネオジオン族に所属するヘビーモンスター以上の力を持ち、機兵には劣るがその力は並みの騎士や戦士をものともしないほどに強力且つ獰猛。

……なお、原作に登場するティラノザクは精々ＭＳ族の二倍くらいの大きさで、間違っても目の前にいるような機兵並の巨体はしてない。

「で、でかい……！」

「ア、アニキ？見上げてる場合じゃ「■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■！！」キターーーー！？」

見上げる俺にびびるゴブリン君、口から涎を垂らしながら吼えるティラノザク。

吼えた時に飛び散った涎から察するに、どうやらお腹が減ってるご様子……ってあれ？どこかで似たようなことがあった気が……

「アニキー！！ぼっとしてないで逃げましょうぜ！！」

「あ、ああ！！」

ゴブリン君の声で我に返った俺は即座に精神集中を開始する。

2年の歳月は伊達じゃない！なんと呪文書を見なくても発動可能になったのだ！！

しかも身に着けてる詠唱短縮効果のあるアクセサリーのお陰で発動までの時間がかなり短くなったので、この距離なら十分に間に合う！！

「目晦ましにはなるだろ、ディープミスト！！」

術の発動と同時にティラノザクの視界を覆うように霧が発生し、その動き止める。

ただの目晦ましと思うなかれ、この霧は相手の視界を閉ざして攻撃の命中率を下げるだけでなく、相手の動きを一瞬だけ止めることが可能なのだ！！

「今の内に全力で走れーーーーーー！！」

「アイアイサーーーーーーー！！」

「ギャピーーーーーーーーーーーー！！」

目の前の怪獣が動きを止めている間に全力で逃亡を開始する俺達。

「■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■！！」

いきなり現われた霧が余程気に入らなかったのか、憤怒の雄叫びを上げるティラノザク。

長い旅の末にたどり着いたラゴル地方、逃げる俺達と追ってくる怪獣ティラノザク。

どこか懐かしさを感じさせる生死を賭けた鬼ごっこが今、幕を開けたのだった。

「キャゥウ！！」
「あ！？ブラック、テメェ飛んで逃げる気か！？」
「打ち落としてやる！！この状況で一匹だけ逃げるとか絶対に許さん！！」
「■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■！！」
「「キターーーーーーーーーーーー！？」」

9．たどり着いた新天地、やることは鬼ごっこ？（後書き）

ビグロフォンは地獄の馬車馬生活から逃れる為、一生懸命身体を鍛えて逃亡しました。
今頃は馬車をぶら下げたままのんびりと羽を休めていることでしょう。

１３．「またこの展開かぁあああああ！？」
騎士アストレイ
二年間の旅で少し成長した。
ＨＰ９５０

１４．「死んでたまるかぁあああああ！！」
闘士ゴブリンザク
ビグロフォンに逃げられて落ち込んでいる。
ＨＰ２７００

１５．「グルルルゥ！！」
魔物ブラック
ベビードラゴンの成長した姿。
ＨＰ２４５０

１６．「■■■■■■■■■■■■！！」
恐竜（始祖）ティラノザク
古代のティラノザク
ＨＰ１００５０

１０．ラビアン砂漠の出会い（前書き）

結構遅れた上に後半グダグダ。

１０．ラビアン砂漠の出会い

……こんにちは、騎士アストレイです。

本日は……大変お日柄が良すぎるくらいに良く…、空は憎たらしい程に晴れていて……雨が降ってくれる様子は髪の毛一本分も無いようです。

「……アニキ」
「……なに？」

隣を歩くゴブリン君が話しかけてきますが、本音を言うと声を出すだけでもキツイです。

「……着ているだけで死にそうな鎧を脱いだのに……なんでこんなに暑いんだろう？」

……ゴブリン君、そんなこと聞かなくても分かりきってるじゃないか。

「ここが……砂漠だからだろ」
「……そうだったな」
「……ギャウゥ」

ゴブリン君の隣を歩くブラックも疲れきった声を出す、正直俺達の中で一番体力のあるコイツが此処まで弱った所を見るのはこの２年間で始めてである。

ティラノザクとの命を賭けた鬼ごっこから三日後、俺達は今にも死にそうな感じでここ、無駄に広い砂漠を歩いています。

１０．ラビアン砂漠の出会い

何の前触れも無く現われた怪獣（あの大きさは恐竜じゃねぇ！！）ティラノザクとの鬼ごっこは一晩中続き、魔術やら罠やらを駆使してなんとか振り切ったのだが……

「グルルルゥ…」

ごらんのようにブラックが警戒を解いていないので決して油断してはいけない。

なのであの怪物（ティラノザク）に出くわさないように警戒しながら移動していたのだが……うっかり遭遇。

戦っても勝ち目は無いし、諦めて食われるよりはマシ！と思って砂漠に逃げ込み、やり過ごすことには成功したが見事に遭難した訳である。

「クキュル～」

「ア、アニキ……水をくれ」

「……一口だけだぞ？　一気に飲むなよ」

そう言ってザックから水の入ったボトルを取り出しゴブリン君達に手渡す。

砂漠で水は貴重品、これ常識。

晶術や魔術で水を出せばいいだろ？

無論試したさ！　試してみたら理科の実験で使う不味い水ができたんだよ！！

「アニキー、このマント本当に意味あるんですか～？」

「鎧着てるよりはましだろ」

「そりゃあそうですけど……」

現在、俺達は鎧を脱いで暑さ対策にフレアマント（火属性耐性５０％）を羽織っているのだが……暑すぎてあまり意味が無い。

「キュ～～～～♪（ゴクゴク）」

「ってお前は飲みすぎだ！？」

「ゴブリン君、不味い水だったらあるけど飲むか？」

途中、目を放した隙にブラックが出した水を全部飲むというハプニングが起こったりもしたが、怒る気力も体力も無いので拳骨だけ落し、当ても無く太陽が沈む方角に進む。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

遭難して１０日後、ひたすら歩き続けるが砂漠以外の風景が俺達を迎えてくれることは無かった。

元々持っていた水はとっくに無くなり、水を作る為に術を使おうにも魔力が底を尽いた。

溜まった疲労の為か回復する兆しは一向に見えず、結局はゴブリン君に背負われてお荷物になっている。

そして、俺を背負っているゴブリン君とその隣を歩くブラックが遂に限界を迎えた。

「……す、すいませんアニキ、もう……限界です」

「キュ……キュルゥ……」

そう言って、二人は砂漠に横たわった。

水が無くなった為食料も喉を通らず、飲まず食わずで終わりの見えない砂漠を歩き続けたのだ。気力は既に無く疲労も限界である。

気が遠くなる。

腹いっぱい肉が食いたい。

冷たい水が飲みたい。

原始的な欲求が俺達の頭の中を駆け巡り、熱と空腹で霞みかかった頭の中が白く染まっていく。

……もう駄目かもしれない。

二年間の旅で生まれた冷静な自分が告げている。ここで俺達は死ぬのだと……。

ここまで自分について来てくれた仲間を下敷きにしていたくは無い。

そう思った俺は力を振り絞って転がるようにゴブリン君の背から降りる。

それが本当に最後の力だったのか、少しずつ意識が遠くなる。

閉じていく視界の中、俺は何かがこちらに近づいてくるのが見えた。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

・・

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

・・・・・・

気がつけば、俺は闇の中にいた。

何も見えない闇の中、心地よい感じが伝わって来る。

俺は今どこに居る？　ここはどこだ？　二人はどうなった？

暗い闇の中を手探りで探し続けるが何も見つからず、ただ時間だけが流れていく。

……どのくらいの時間そうしていたのか分からないが、闇の中に一筋の光が見えてきた。

俺は必死にその光の元へと進んでいく。

光のあるところに何があるのかは分からない。

分からないまま手足を必死に動かし、その先の光へと目指していく。

やがて、目前にまで辿りついた時、俺は腕を思いっきり伸ばしてその光に触れた。

その瞬間、俺の意識はまた閉ざされていった……。

「……ぅ……」

ズキリ、と走る頭の痛みで俺は目を覚ました。

ぼやけた視界が少しずつ定まり、やがて見たことのない――――おそらく岩でできた――――天井を映し出す。

「知らｎ……絶対に言わないぞ、俺は」

自然と口から出てきそうになった言葉を、なんとか飲み込み辺りを見渡す。

「何いってんすか？」

声のした方をみれば、椅子に座ったゴブリン君が呆れた顔をしてこちらを見ていた。

床の方を見ればブラックがいるが……器用にも鼻ちょうちんを膨らませて寝ている。

「……暢気そうな顔して寝てるなー」

「まあ、こいつも疲れてましたから」

暢気な顔して寝ているブラックを見て苦笑する俺とゴブリン君。

―ガチャッ――

そんな時、奥のドアがギギィと音をして開き始め、其処から一人のＭＳ族――顔からしてジェガン――が木で出来た器を持って入ってきた。

「おや？　目が覚めましたか」

「……えっと、どうも……」

部屋の脇にある机に食器を置き、椅子に座るジェガン（仮）。

「私はこのラビアン砂漠に暮らすフレメン族の長を勤めるフレメンジェガンと申します。

どこか悪いところはありますか？」

「あ、特に悪いところは……えっと、貴方が俺達を？」

「正確には外に出ていた一族の者がですが」

その後詳しい説明を受けたり、此方の事情を説明すること３０分。

「ほお、機兵の研究を」

「はい、その為に世界を旅をしていたんですが……」

「［森の主］に襲われたと」

「……はい」

［森の主］というのは俺達が遭遇したあの巨大なティラノザクのことで、砂漠近辺を縄張りにしているらしく、出会ったら諦めろと言われるほどの魔物だそうだ。

なお、俺達は暫くこのフレメン族の村に滞在することになった。

なんでも、「出るにしろ留まるにしろ、もう少し鍛えないと野垂れ死にしますよ？」とのこと。

「あ、お礼代わりに機兵なんてどうでしょうか？」
「機兵ですか？」

ゴブリン君と話し合った結果、村に滞在している間はそれぞれの得意分野で助けられた恩を返していこうということになったのだが、ゴブリン君が働きすぎてやることがないのだ。

ザックから食料や生活雑貨を取り出したりもしたが働いてる気が全くしない、このままではまたお荷物状態に逆戻りである。

それだけは御免なので出来ることを考えてみた結果、土木用の機兵を作ってみようと思い至ったわけである。

長さん（フレメンジェガン）に申し入れてみたらあっさりとＯＫも出たので、気合を入れて材料を取り出す。

「まずは設計からだ！！」
「ギャウー！！」

後年、フレメンジェガンはこう語る、「あの時追い出していればよかった……」と。

１０．ラビアン砂漠の出会い（後書き）

遭難した結果、フレメン族と出会いました。

次回は土木用の機兵が登場する予定。

１７．「ふむ、悪いところはなさそうですね」

族長フレメンジェガン

フレメン族の族長。

ＨＰ４５０

11．フレメン村で過ごすアストレイの日々（前書き）

なんか受信したので投稿。

タイトル変更。

１１．フレメン村で過ごすアストレイの日々

アストレイ一行がフレメン族の村に滞在することが決まってから数日後。

アストレイはどのようにして日々をすごしているのか？

少々覗いてみることにしよう。

１１．フレメン村で過ごすアストレイの日々

１．模擬戦

「とおおおりやあああっ！！！！！」

開始の鐘と共に木剣を振り上げた大男、戦士フレメンガンキャノンが凄い勢いで駆けてくる。

大男が叫び声をあげながらズンズンと迫ってくるその様はド迫力。

「はぁっ！」

勢いとともに一閃。真上から振り下ろされる木の凶器。

木で出来ているとは言え、岩をも砕く彼の腕力から繰り出される攻撃は当たり所が悪ければ死んでもおかしくない。

その攻撃を??

「陽炎！」

俺は、陽炎でかわすのだった。

「てめぇっ！」
「陽炎！」
「このっ！」
「陽炎！」
「ちょこまかと逃げるんじゃねーーーーーー！！！！！」
「陽炎ぉおおおおおおおおお！！」

ぜぇぜぇはぁはぁと息を吐きながら肩を上下に揺らすフレメンガンキャノン。
正面にたつ俺も同じように呼吸を荒くして息を吐く。

開始から15分。俺はひたすらにニュータイプも真っ青な回避力で攻撃を回避しつつ、攻撃の当たらないSフリーダムのように逃げ回っていた。

「お前、やる気あるのかよっ！」
「ある訳ねーだろ！！！」
「なにぃ！」

俺の答えが気に障ったのか、ブウンと唸りをあげて剣が横薙ぎに払われる。
それをなんとか陽炎でかわして、再びフレメンガンキャノンと向

かい合う。

「おまえが逃げてばかりじゃ、模擬戦にならないだろうが！！」

「陽炎！」

「ええい、訳のわからん技でよけるな！」

「陽炎！」

「お前騎士だろう！？　逃げずに戦え！」

「騎士だからと言って正面から戦わなければいけないなんて掟はないっ！！　俺は逃げる！」

「逃げるなーーっ！」

「模擬戦中、攻撃から逃げてはダメとは言われてないっ！」

「ああ言えばこう言いやがって！」

「その隙もらった！　紅蓮剣！！」

「へ？　ギャーーーーー！？」

会話の隙をついて放たれた業火を纏った木剣を、フレメンガンキャノンは避けることが出来ずに直撃を食らってしまう。

「こ、この野郎ーーーー！！」

直撃を喰らい、フラフラになりながらも立ち上がって切りかかる。

ダメージを負ってなおその一撃には揺らぎが無い。

俺はその攻撃を？？

「陽炎！」

やっぱり陽炎でかわすのだった。

「も、もうわかったから・・・それ・・・もうやめて・・・」

３０分後、模擬戦は心の折れたフレメンガンキャノンが降参し、俺の勝利で幕を閉じた。

無傷で勝ったのに周囲の反応がとてつもなく冷たかったり、フレメンガンキャノンが俺を見るたびに「く、来るな！？来ないでくれーーー！！」と言って逃げ出すようになってしまったのは余談である。

2．試作品

「長さん、遂に完成しました！！」

「おお、待っていました。これで念願の村の拡張工事が・・・」

「滞在してから3週間、試作機も3機完成しました！」

「3機もですか！」

「まずは…これをどうぞ！！」

「……ボール？」

フレメンジェガンの間の前に現われたのは、スダ・ドアカ・ワールドの各地に生息し、各家庭で番犬として飼われている小動物ボールであった……ただし、そのサイズは村にいるボールの何十倍もあるが。

「……アストレイさん、私は土木用の機兵をお願いした筈ですが？」

「無論です！この騎士アストレイ、目的を忘れて趣味に走るそこらのマッドどもとは一味違います！！」

「しかし、腕が無いのにどうやって工事を？」

そう、目の前のボールには腕が無い。
正確に言えば、ちょこんと機体下部に付いているのだが。

「ご安心下さい、この機兵の名前は試作機兵ホバーボール！！　砂漠での高速移動を実現した試作機です！！」
「高速移動？」
「砂漠での移動は徒歩、もしくはラクダのどちらかが基本でしょう？」
「え、ええ」
「しかし、急ぎの用事等があった場合それでは時間がかかり過ぎる！！かといって通常の機兵を使っても時間がかかる上に搭乗や整備の手間を考えると更にかかる！！」
「ま、まあ…たしかに」

自己修復機能を持った聖機兵とは違い、通常の機兵は関節等の整備には時間がかかるのだ。

「このホバーボールは従来の機兵とは違い、人型をしていない分整備には手がかからない上にホバークラフトを採用したことによって砂漠での高速移動を実現したのです！！」
「おお！……ですが砂漠には魔物が出ますよ？」

砂漠での高速移動は凄いとは思うが、この丸い機兵が強そうには見えない。

「ご心配なく。その為のヘッドキャノンです」
「へっどきゃのん？」
「ええ、上に付いている大砲のことです」

確かに、ホバーボールの上には大砲が付いている……それも太く

てでっかいのが。

「その威力は見てもらった方が早いでしょう……操手フレメンジム、ヘッドキャノンを撃て！」

『了解！！　照準、構え！！』

上部に設置された砲身がゆっくりと動き出し、照準を合わせる。

ホバーボール内部でフレメンジムが砲弾を装填する。

『反動ブレーキ、固定！』

ガシン！！と巨大なバンカーが左右に地面に突き刺さり、ホバーボールを固定する。

『行くぞ、これが我等の力！　ヘッドキャノン……発射！！』

放たれた砲弾が目標に迫り、爆散した。

「おお！素晴らしい威力ですね！」

「そうでしょうそうでしょう！！」

「最初の1機でこれということは……他の機兵も凄いのでしょう！？」（既に当初の目的を忘れている）

「無論！他の2機も土木用とはいえ緊急時の事を考えて相応の戦闘力を持っています。操手フレメンダガー！　次の機兵を…あれ？フレメンダガー！！」

持っていた通信機に呼びかけるも応答が無く、通信機からはノイズしか返ってこない。

「どうしました？」
「いえ、何か応答が無くて……故障か『あの～』どうした？」
通信機を弄っている所にホバーボールから通信が入る。
『じ、実は……撃つ方向間違えちゃいました（汗）』
「「……は？」」
『今確認したんですけど……ターゲットのある方向は今撃った方角とは正反対で…』
「「……」」
『あっちの方には…試作の機兵が…あったみたいなんですが……』
「「なにやってんだお前等ーーーーーー！？」」
黒煙が立ち上る砂漠の中、アストレイとフレメンジェガンの悲痛な叫びが響いた。

余談ではあるがホバーボール自体は有効に使われ、アストレイ達が村を去った後に解析されて量産されることになり、遠い未来でネオジオン族を圧倒する脅威のボール軍団が誕生することになる。

１１．フレメン村で過ごすアストレイの日々（後書き）

アストレイは接近戦になったらひたすら回避に専念し、隙をみては術を放つか逃亡します。（今回は術禁止の模擬戦だったのでこうなりました）

１８．「く、来るな！？来ないでくれーーー！！」
戦士フレメンガンキャノン
フレメン族の戦士。
ＨＰ４５００

１９．「試作機兵が起動した！」
試作機兵ホバーボール
騎士アストレイが製作した試作機兵１号機。
ＨＰ２００００

２０．「了解！！照準、構え！！」
操手フレメンジム
ホバーボールの操手
ＨＰ２００

２１．「な、何が……起こったんだ？」
操手フレメンダガー
破壊された試作機兵の操手
ＨＰ２８０

１２．ドリルは未だ轟かず。（前書き）

今回ゴブリン君達は出番なし。

１２．ドリルは未だ轟かず。

「次ッ！　赤組構え！」

「ハッ！」

側に控えたフレメンジムに旗を振るうように指示を出した。
部隊の入れ替えを示す旗をフレメンジムが高らかにあげて振り回す。
青組が下がり矢を補充し、前に出た赤組が弓を構える。

「？？？放てっ！」

叫ぶと同時に背後で太鼓の音が鳴り響く。

次の瞬間には２０人が同時に発射した強弓の矢が空へと放たれていた。

「ギィエエエエエエエエエーーーーーー！！！」

つんざくような叫び声。それは身体中を矢で打ち抜かれた魔物の断末魔。
群れを成して迫ってきた魔物達が次々と矢で射抜かれ、砂漠に屍を晒していく。

「アストレイ殿。やりましたな！」
「油断するな。急いで矢の補充に取り掛かれ！！すぐに次が来るぞ

！」
「ハッ！」
傍に控えていたフレメンジムに指示を出し、俺は迫る魔物達を睨み付ける。
「幾らでもかかって来い！！　お前等なんて怪獣王（ティラノザク）に比べれば屁でもないからな！！」
「アストレイ殿、それはフラグです」

12．ドリルは未だ轟かず。

俺達がフレメン村に滞在してから1年後。
砂漠を越えられるだけの体力も付き、そろそろ旅を再開しようと思ったその時、突如として魔物の群れが村を襲った。
村の戦士達と『試作機兵ジムタンク？』の活躍によって撃退したものの、間を置かずに新たな群れが来襲。
終わりの見えない襲撃に備える為、村の周りに城壁を構築して防衛戦をしてから、もう2週間になるわけだが……
「うがーーーーー！？　倒しても倒しても切りがない！！」
「ハァ…ハァ…あいつ等無限にいるんじゃないだろうな？」

食料や武器は俺が無限に供給するので問題ないが個人の体力や気力には限りがあり、休む間もなく現われる魔物をひたすら倒し続けていたので既に限界を突破している。

終わりの見えない襲撃のせいで屈強な村の戦士たちも限界である。

というか……

「なんでこの村が襲われるんでしょうね？」

「分かりません。　魔物の繁殖期はとっくに過ぎてますし……そもそもあんな魔物は見たことがありません」

そう、この村を襲っている魔物はこのラビアン砂漠には存在していない魔物なのだ。

長さんの話によると、本来この砂漠にはボーンビグロやスコーピオンドックの二種類の魔物しか存在せず、村に押し寄せてくる翼の生えたＭＳ族のような魔物は存在しないそうだ。

ちなみに、俺は押し寄せてくる魔物に心当たりがある……というか確実に俺の知っている魔物である。

「……何で砂漠に『レッサーギャプラン』がいるんだよ」

レッサーギャプラン、それは第一章の最終決戦の舞台であり『闇の皇帝ジークジオン』の本拠地『ムーア界』に生息する魔物で、空中から繰り出される一撃は戦いなれた戦士を苦戦させる程である。

だが、奴等の本当の恐ろしさはその数にある。

「敵襲ーーー！！」

城壁に設置された見張り台に立つフレメンダガーの襲撃を知らせる声が村に響く。

「ああもう！！あいつ等一体何万匹いやがる！？」

ＯＶＡ版を観ていただければよく分かると思うがレッサーギャプランは空を埋め尽くすほど存在するのだ。

現在は１度に２０～３０匹くらいしか出現していないが、もしも今まで以上の数が現われでもしたら対処のしようが無くなってしまう！！

急ぎ迎撃に向かう為に城壁へと急ぐが、フレメンジムが『試作機兵ドリルボール』の前で整備士フレメンメタスと言い争っているのを目に留めた。

「だからどうして出られないんですか！？」

「何度も言ってるでしょう！　この機兵は採掘用で戦闘用じゃないんです！」

「っ・・・なら少しでも戦えるようにできないんですか！？」

「無茶を言わないで下さい！　改造するにしても時間が足りません！」

……まぁ、ドリルボール自体ノリで作ったようなもんだから空飛んでるレッサーギャプラン相手じゃ分が悪いどころの話じゃないんだよね。
そもそも武器といえるのが手と頭に付いてるドリルだけだし。
――って止めないと無理やり出撃しかねないな。
「ストップ！そこまでだ」
俺の声にフレメンジムはびくっと反応してこちらを睨みつける。
「あ！　アストレイさ「邪魔しないで下さい！　この機兵があれば俺だって戦えるんだ！！」ちょっ！？」
おー、嫌な感じに殺気立ってるなー。
「メタスちゃん、ちゃんと説明した？」
「しましたよ～！！　しましたけど全然聞き入れてくれないんですよ！！」
涙を流しながら言うメタスちゃん。
フルカラー劇場でメタスが涙目になる場面が結構あったけど……慣れたらけっこう愛らしいなほんと。
「あのなー、この機兵は見て分かるように戦闘用じゃなくて採掘用なの。　分かる？」
「そんなのやってみなければ分からないじゃないか！！」
「無理なものは無理！！　作って動かした俺が言うんだから間違いない！！」

自分で作った機兵の安全確認もせずに他人を乗せたりはしないよ俺は。

「じゃあ何とかして下さいよ！！　製作者なんでしょ！？」

「だ・か・ら！！その時間が無いって言ってるだろうが！！　大体戦いたいんなら弓でも持って戦え！！」

問答してる暇もないけど勝手に出撃されるほうが迷惑だ！！　寝ずに作った城壁を（ドリルで）壊されて溜まるか！！＊

＊壁は村を覆う形なのでドリルボールが出撃するには壁を壊すしかありません。

「そ、それはそうだけど……」

「わかったら弓（これ）持って一緒に来い！！　猫の手も借りたい状況で無駄な時間使わせるな！！」

フレメンジムにザックから取り出した弓を押し付け城壁へと急ぐ。

走る俺の後ろに弓を持ったフレメンジムが続く。

――というか！！

「こんな時にゴブリン君とブラックが風邪で寝込むとかどんな無理ゲーだぁあああああああああ！？」

戦闘員が出撃し、非戦闘員が避難して静かになった村に俺の叫び

が響く。

叫び声を上げながら走る俺の後ろ姿を、操者のいないドリルボールが悲しげに見送っていた。

１２．ドリルは未だ轟かず。（後書き）

９月じゃないけど書けちゃったので投稿。

ドリルボール以外の機兵は城壁の外に配置されてます。

……アルテイヤーはいつになったらでてくるやら。

２２．「試作機兵ジムタンク？が出撃した！」
試作機兵ジムタンク？
破壊された試作機兵ジムタンクを改造した機兵。
ＨＰ２２０００

２３．「ケケケッ、レッサーギャプランが現れた！」
レッサーギャプラン
本来はムーア界に生息している筈だが？
ＨＰ２４０

２４．「無茶を言わないで下さい！　改造するにしても時間が足りません！」
整備士フレメンメタス
フレメン族の整備士。
ＨＰ２１０

２５．「試作機兵は悲しげに起動の時を待つ！」
試作機兵ドリルボール
騎士アストレイが悪ノリして作った機兵。

H
P
1
9
0
0
0

１３．煎餅と早すぎる侵攻（前書き）

後半グダグダ。

１３．煎餅と早すぎる侵攻

どうも、騎士アストレイです。

砂漠を越えれるだけの体力が付いたので旅を再開しようとしたら仲間が風邪引いた上に、出る場所間違えてるだろテメー等！？と言いたくなる様な魔物レッサーギャプランが大量にフレメン村を襲ってきた為足止め食っています。

「あのーアストレイ殿？」
「ん？　何ぞや？」

空を眺めながらお茶を飲んでいる俺にフレメンジムが声をかける。

「何でお茶なんて飲んでるんですか？」
「あー、何というか……やる気が失せたから？」

うん、襲撃の知らせを聞いて急いで城門まで走ってきたのに……正直やること無いんだもん。

「ま、まぁそうかも知れないんですが……警戒くらいはした方がいいのでは？」
「最低限の警戒はしてるよ？　それに…」

俺はあえて視界に入れないようにしていた村の外、砂漠の方に視線を移す。
フレメンジムも同じように砂漠の方を見る。

『ゴォオオオオオオオオオオオオオオオオオオ！！』
『ギィイイイイイイイイイイイイイイイイイ！！』

　そこには、飛び回るレッサーギャプランの群れを相手に、蝿を叩き落すかの如く剣を振るう白水晶の巨像(ゴーレム)…に偽装した白晶の機甲神オルフェリスの姿が。

「……あれにうっかり攻撃中てててみろ、矛先がこっち向くぞ？　確実にな」

「デスヨネー」

　あ、茶柱がたってる。
　今日は良いことがありそうだな。

13．煎餅と早すぎる侵攻

　さて、何故オルフェリスがレッサーギャプランの群れ相手に大暴れをしているのか？

　城壁の上で待機していたフレメンジム達の証言によると、レッサーギャプラン達との戦闘が始まって数分後、レッサーギャプラン達が何かを落としたと思ったら突然現われたらしい。

　原作でエルガイヤーやカオスガイヤーが呼んだ際に一瞬で現われたことから一種の転移装置らしきものは備わっているとは思うが……今回は単に防衛行動をとっているだけではないかと思われる。

通常、王家の者が操縦する2体を除いた五体の機甲神は主不在時はあそこで大暴れしているオルフェリスのように何らかの姿に偽装し自立して動き、敵対者に対して過剰すぎる防衛行動を行う。

結局何が言いたいのかというと、レッサーギャプランが爆撃をする為に運搬してきた爆薬か何かを手違いで落す→偽装が完了して活動休止中のオルフェリスの真上に落した爆薬が直撃→オルフェリス起動&虐殺開始(ジェノサイド)……という流れで概ね正しいのではないかと思う。

「しかし、あの化物は一体なんなんですかね？」

隣でお茶を飲み始めたフレメンジムが疑問の声をあげる。

「見た感じは呪術師が使うゴーレムのようですけど白水晶のゴーレムなんて聞いたことありませんし、どう見ても人が乗ってるような感じがしませんから機兵でもなさそうですし・・・・・・あ、煎餅貰いますね」

そう言ってフレメンジムが煎餅に向かって手を伸ばす。

「海苔煎餅以外だったら食べてもいいよ・・・って皿ごと持っていくな！！」

皿ごと持っていこうとするその手をすかさず迎撃して煎餅を死守する。

「こんなにあるんだから良いじゃないですか」

「だからって皿ごと持っていこうとするな！　作るの結構大変なんだぞ！！」

「いつもの手合わせ魔法で出せばいいじゃないですか」
「魔法じゃなくて錬金術！！　しかも出してるんじゃなくて練成してるの！！」
「似たようなもんじゃないですか」
「似てるけど違う！！　それにこの煎餅は手作りなの！！」
「え、そうだったんですか？」
「お前ね、何の為に村に研究所まで拵えたと思ってるんだよ」
「へ？　長老への嫌がらせじゃないんですか？」
「違うわ！！」

現在フレメン村の端には俺の自宅兼研究所がデカデカと建てられており、俺の趣味に賛同した村の若者達が仕事ほったらかして研究に励んでいたりする。
なお、村の発展を願う長さんは仕事せずに研究所に篭りっきりの若者達に大変困り果てており、何度も説得を試みているが成功した試しは皆無である。

「長老泣いてましたよ？　「恩を仇で返されるとは……」って」
「……いや、俺のせいじゃないような気がするんだけど」

あいつ等元々素質あったし……まぁ、ドリルの素晴らしさと変形合体の浪漫を吹き込んだのは俺だけど。

煎餅を齧る俺達を尻目に行われるレッサーギャプラン軍団ＶＳ謎の巨像（オルフェリス）の戦いは続き、日が暮れる頃には謎の虚像の勝利に終ったという。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

　レッサーギャプラン達の襲撃から3日後、俺と回復したゴブリン君達を乗せたホバーボールはフレメン村のあるラビアン砂漠を越えた先にあるという『ナラカの谷』を目指し進んでいた。

　何故そんな場所を目指しているのか？　理由は簡単である。

　先日、村の付近で休眠状態だったオルフェリスをうっかり覚醒させて全滅したレッサーギャプラン、その生き残りを発見したので尋問してみたところ、ナラカの谷にある魔界に通じる穴から此方側に侵攻してきたらしい。

　そういえば番外編にどうみてもガンダム系のキャラに見えないのがいたなぁと思い出し、そこから予想される最悪の展開を思い描いた俺は病み上がりの二人を連れ、急遽『穴』があるというナラカの谷を目指している訳である。

「アニキ、こんなに急ぐ必要があるんですか？　燃料にはまだ余裕がありますが砂漠を越える頃には底を尽きますぜ？」

　操縦席に座るゴブリン君が忠告してくるがそんなことに構ってる暇は無い。

「構わないッ！　どうせホバーボールは砂地専用、谷では使えない

だろうから砂漠を越えると同時に乗り捨てる！！」
「乗り捨てるって……いいんですか！？　コイツを完成させるのにあんなに苦労したのに……」
確かに苦労はした。
知識はあっても実際にそれを再現するのは骨が折れるどころの話ではない。
だが、今はこれ1機に拘ってる場合ではないのだ！！
「ゴブリン君！！　エンジンが焼き切れても構わないからもっとスピードを上げてくれ！！」
ホバーボールの出せるギリギリの速度を出しているがそれでも遅く感じてしまう。
こうしている間にも奴が此方側に来てしまう可能性があるのだ！！
「頼む、こっちに来てるんじゃないぞ……！？」

機甲神伝説の番外編に登場した黄金神によってナラカの谷に封印された『悪魔サタン』はこう言っていた筈。
ジークジオンは魔界を支配しようとした程、と。
もしかしたらジークジオンが支配するムーア界と悪魔サタンが語

った魔界は繋がっているのではないだろうか？

そして、その考えが正しいならば俺が思い描いた最悪の予想が実現されかねない。

俺が思い描いた最悪の予想――――それは

「まだ数千年以上はある筈なのに……早すぎる！！」

勇者も魔王も存在しない今のスダ・ドアカ・ワールドで行われる、闇の皇帝ジークジオンの武力支配の幕開けである。

１３．煎餅と早すぎる侵攻（後書き）

表現の仕方等で指摘がある方はどうか報告お願いします。

一応作者も何度も書き直してみたりはするのですが……かなり自信がありません。

２６．「砂漠に埋もれていた巨像が動き出した！」

謎の巨像

砂漠に埋もれていた。

ＭＰ４００００

１４．遭遇！！　ジオン族最強の……騎士？（前書き）

戦闘場面を書こうと思ったら変な感じになってしまった！！

ゼノンマンサ好き注意！！

ジャンル変えた方がいいのかな？

１４．遭遇！！　ジオン族最強の……騎士？

どうも、毎度お馴染み騎士アストレイです。
前回柄にもなく焦ってホバーボールを使い潰してラビアン砂漠を横断し、レッサーギャプランの大量発生地である『ナラカの谷』へとやって来た訳ですが……正直帰りたくて堪りません。

近くまで来た後、地面の下を錬金術で掘り進みながら谷に侵入したのですが、谷内部はスライムアッザムを初めとしたジオン族の魔物で溢れかえってます。

あえて名づけるなら『愛☆ジオン族博』といったところでしょうか？

「アニキ、現実逃避は程々にしたほうが……」
「グルルゥ」
「戦わなきゃ駄目かなぁ？」
「ここまで来たんだし、戦わないといかんでしょう（現実と）！！」
「ギャウ！！」
「だよねー（涙）」

ああ、こんなことなら転生した時にもっと強力な能力（チート）を望んでおけば良かった……。

１４．遭遇！！　ジオン族最強の……騎士？

さて、いつまでも現実逃避しても埒があかないのでがあかないの

で締め上げたレッサーギャプランから得た情報を整理してみよう。

・レッサーギャプランを始めたとしたジオン族はこの『ナラカの谷』の最深部にある『穴』からこの世界に侵入している。

・何故魔界とこの世界（スダ・ドアカ・ワールド）を繋ぐ穴が出来たのかは不明（下っ端だったせいか全く知らなかった）

・ジオン族の支配者である『ジークジオン』が此方側に来る為には『穴』が小さすぎるので広げる必要がある。

・『穴』を広げる為には此方側の住人達の怨嗟と恐怖が必要な為、各地の村や集落を襲っている（嫌なテンプレだな）

・神不在の好機を生かす為、ジークジオンの側近である『ジオン親衛隊』が直接指揮を執っているという（親衛隊の誰かは不明）

ここで重要なことは一つ。

ジークジオンが此方側へ来ていないこと、これはかなり重要なことである、

闇の皇帝ジークジオン。

第一章［ジークジオン編］のラスボスであり、復活したばかりとはいえ強力な力を持った神であるスペリオルドラゴンが単体で滅ぼしきれずに逃亡を許すほどの化物。

他の魔物とは比較にならないほどの巨体と死んだ魔物を復活させ

るほどの魔力に容易く部下を切り捨てる冷酷さ、そして最も厄介なのは神同様に他者の肉体を仮の肉体として使用するという厄介な特性にある。

原作では下級の魔物ザクレロキャット、ダバード王国の重騎士ガンダムＧＰ０２、デラーズ王国のエギーユ王と肉体を変えている上、超機甲神との戦いで追い込まれた際は自身をエネルギー体に変えて逃亡しようとした程なので、完全に消滅させるにはその特性を凌駕できるほどのエネルギーを叩き込むくらいしか無いと思われ……あれ？

機兵並の巨体＋超魔力＋肉体潰しても死なないって……どう考えても俺等の敵う相手じゃなくね？

「おかしいな？　情報をまとめてた筈なのに敵の強大さに心を折られはじめてる自分がいる」
「アニキ！？　心を強く持つんだ！！」
「ギャウ！！」
「いやでもさ？　むこうは闇の皇帝とその軍勢、こっちはガンダムが一人、（チート）ゴブリンザクが一人、ドラゴンが一匹……勝てる訳ねーだろ」
「気持ちで負けてたらどんな戦いも負け戦だ！！　そもそも俺達は封印に来たのであって戦いに来たんじゃないだろ！？」
「――――あ」

そういやそうだっけ。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
・・
・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
・・・・・・

その後、このまま地面の下を掘りながら最深部に侵入、『穴』を封印したら即撤退！！という流れでいくことが決まり、最深部まで侵入することには成功したのだが……

「ほう、谷に配置した魔物共や戦士達の警備を潜り抜けてくるとは……中々出来るようだな？」

やることが無くて暇だったのか、一人の騎士が岩に座って剣の手入れをやっていました。

そうだよね、紅蓮剣で武器を使い捨てる俺と違って普通の人はちゃんと武器の手入れをしますよね！！

正に戦う者の鏡！　ご立派過ぎて涙が出てくるね！　っていうか何でお前が此処にいるんじゃぁあああああ！？

「谷の魔物とは比較にならない威圧感（プレッシャー）……、手前が『親衛隊』ってやつか！？」

「いかにも、我が名は騎士ゼノンマンサ。ジークジオン様を御守りする『ジオン親衛隊』を束ねるものだ」

騎士ゼノンマンサ。
闇の皇帝ジークジオンの側近である『ジオン親衛隊』を指揮し、その実力は『アルガス騎士団』の団長である『騎士アレックス』と互角の実力を持つジオン族最強の騎士。

なお、初期のＳＤガンダム外伝では最強クラスの騎士である（［ジークジオン編］以降では雑魚とは言ってはいけない）。

「……何であんたみたいな大物まで出てきてんだよ！？　親衛隊なら主君を護ってろ！！」
「答える義理は無い！！　……と言いたいところだが答えてやらんでもない、ただの人手不足だ」

――――――――――はい？

「ひ、人手不足？」
「うむ、我々の軍の殆んどは魔物で構成されている。が、その魔物を指揮する騎士や呪術師が不足していてな。ジークジオン様の親衛隊である我々が駆りだされた訳だ」
「じゅ、呪術師は？」
「呪術師は現在別の任務に就いている」
「せ、戦士は？」
「我々の本拠地で開墾作業中だ」
「……闘士は？」
「……あんな脳筋どもに魔物の指揮が出来るわけないだろう」

騎士ゼノンマンサの口から語られる驚愕の事実に驚きと呆れを隠

すことが出来ない俺達。

闘士に指揮権ないってそんなに脳筋なのか？　いや、そもそも自分の側近兼護衛を人手不足だからってこっちの世界に送り込むって・・・・・・それでいいのかジークジオン（汗）

騎士ゼノンマンサも放っていた威圧感（プレッシャー）を収めて「ビグザムはでかい図体のわりに役に立たないし…」「ケンプファーは気持ち悪いし」とか愚痴をこぼし始めてるし。

明かされた事実によって脱力させられた俺達一行と愚痴をこぼし続ける目の前のゼノンマンサ。

無視していったら駄目かな？と、ゼノンマンサの背後にある『穴』を見ながらそう思うが……この力の入らない状況でやる気が出ない俺を誰が攻められるだろうか？

１４．遭遇！！　ジオン族最強の……騎士？（後書き）

何千年も前にゼノンマンサがいるか！！という突っ込みは無しの方向でお願いします。

きっとジークジオンの魔力で不老長寿なんですよ！！

２６．「はあ、何でこの私が……」
騎士ゼノンマンサ
ジークジオンの側近。
ＨＰ１８００

１５．始めての戦闘とゼノンマンサの恐怖。（前書き）

戦闘に挑戦してみました。

15．始めての戦闘とゼノンマンサの恐怖。

どうも、騎士アストレイです。

ゼノンマンサが愚痴をこぼし始めた為か、戦う気が失せたのとお腹が減ったのでザックから取り出した食料を肴にお互いの苦労話で盛り上がるという奇妙な展開になってます。

「うーん、やっぱ見逃してはもらえないか」

「無理だな。いくらやる気が起きないからと言ってジークジオン様への背信行為をする気はない」

頭を掻きながら呟く俺に、傲然と立ちながらも答えるゼノンマンサ。

いくらやる気が起きないからといって主であるジークジオンを裏切る気は無いらしい。

「楽しかった礼代わりに見逃してやる。『穴』の封印を諦め出てきた場所から谷を出て行くがいい」

「……従わなかった場合は？」

答えは決まっているが一応聞いてみる。

「――――決まっている」

ゼノンマンサが鞘から剣を抜き、構える。

そこから感じる威圧感（プレッシャー）は先程の比ではない。

「我等の邪魔をするというなら容赦せん……、ここで消えてもらお

うか！！」

１５．始めての戦闘とゼノンマンサの恐怖。

疾すぎる。
ただ、それしか感想が出なかった。
気付いたときにはゼノンマンサの剣はすでに俺の眼前にまで迫っていたのだから。

「――――ッ！！！」

かわすことが出来たのは単に運がよかっただけだ。
頭が認識するよりも早く、フレメン村での鍛錬で戦いに慣れた身体が反射的に動いてくれたために剣は紙一重で俺を捉えなかった。

『バックステップ』で距離を取る俺をゼノンマンサは追ってこない。
その場に立ち止まり、小さく深呼吸をしている。

「コォォォォ……」

ゼノンマンサから感じられる『力』が高まっていく。
目の前の騎士の体内に溜め込まれた膨大な『力』が、ついに解き放たれようとしている。

「ハァァァァァッ！！」

地面が抉れ、大気が震え、解き放たれた『力』が暴風となって吹き荒れる。
全身から冷や汗が流れ、本能が全力で警報を鳴らす。
逃げろ、全力で逃げろ、恥も外聞も捨てて逃げろ……！　と。
前回俺は『第一章では最強クラス』と書いたが全力で撤回させてもらう。

目の前のコイツは間違いなく『円卓の騎士』並の化物だ！！
「アニキは下がれ！！　ブラックはアニキの護衛を頼む！！」
「ギャウ！！」
「前衛は頼んだ！！　俺は援護に徹させてもらう！！」

ゴブリン君が斧を持ってゼノンマンサへと向かって突進し、俺は一歩下がりブラックが俺を護れる位置に立つ。
走り出した勢いのまま斧を振り上げ、それを一気に振り下ろす。
ゼノンマンサはその一撃を盾を構えることで受け流し、ゴブリン君の懐へと潜り込む。
「……ふっ！！」
懐にもぐりこむと同時に放たれた剛力も上乗せされた一撃が、ゴブリン君の巨体を弾き飛ばす。
「……ま、だまだあ！」
弾き飛ばされるもかろうじて踏みとどまり、迫るゼノンマンサに斧を振り下ろす。

「ちっ…！」

ゴブリン君の斧を紙一重で避けたゼノンマンサだが、その顔には汗が滲んでいた。

目の前を通過する斧のなんと重々しくも力強いことか。

まともに受ければ唯では済まない、盾で防いだとしても盾を砕かれて終るだけだろう。

（力だけなら私を超えるか…）

一撃でも受ければそこで勝敗が決まる。

そう確信させるだけの力がゴブリン君にはあった。

しかし、ゼノンマンサはまだ余裕を持っていた。

「確かにパワーはあるようだが……」

ゴブリン君はパワーこそ段違いだがスピードはそれほどでもない。

一撃を喰らえば終わりだとしても命中しなければ意味は無い。

「その程度では私を捉え切れんぞ！！」

「なっ、しまった！？」

案の定、ゴブリン君はそのスピードに付いていけずゼノンマンサを見失う。

そのゴブリン君の横をすり抜け、一直線にゼノンマンサは俺のほうへと向かってくる。

「貰った！！」

「ギャウ！！」

此方を切り伏せるべく迫ってくるゼノンマンサに、俺を護るべくブラックの口から炎が放たれる。

「ちっ…！　火竜か！！」

ブラックの炎は文字通り牽制の意味しか成さなかった。

放たれた炎に一瞬怯んだものの、ゼノンマンサは動きを止めずに再び迫ってくる。

だが、その瞬間に俺の詠唱が完了した。

「串刺しだ！！　プリズムフラッシャ！！」

ゼノンマンサを串刺しにするべく、その頭上に七色の剣が降り注ぐ。

「っ！？　貴様法術師か！！」

ゼノンマンサは降り注ぐ七色の剣を後ろに跳ぶ事で回避する。

「まさかガンダムが魔法を使うとはな！！　だがこ「ぬおおおおっ！」むっ！」

プリズムフラッシャをかわしきったゼノンマンサが踏み込もうとするが、後ろから巨大な気配が迫っていることに気付き、慌てて振り返る。

「おおおおっ！」

「ぐっ！」

追いついてきたゴブリン君の一撃をゼノンマンサは何とか受け止める。が、それが仇となった。

「うおおおおおお！」

「ぐ……お……き、貴様本当にゴブリンザクか！？」

ゼノンマンサは知らないことだが、鍔迫り合いの相手であるゴブリン君は普通のゴブリンザクとは桁が違う。

その巨体から生み出される剛力は素手で大型の魔物を殴り殺すほどだ。

ゴブリン君と鍔迫り合いを始めたゼノンマンサ、動きの止まった隙に俺は援護するべく即効で詠唱を完了する。

「追い討ちだ！　シャープネス！」

対象の攻撃力を一定時間上昇させるその呪文は鍔迫り合いをしている二人にとって最高で最悪の呪文だ。

無論、かけられて最高なのはゴブリン君で最悪なのはゼノンマンサである。

「おおおおおお！」

「ぐっ……こ、こんな馬鹿な！？」

元々パワーではゴブリン君がゼノンマンサを上回る。その上俺がシャープネスをかけたことでその差は更に広がる。

「このまま潰れろ！！」
「ぐぅう！！」

一気に勝負を決めるべく、ゴブリン君はその巨体の体重全てをかけ、押し潰すように斧に力を込めていく。

「ブラック！」
「ギャウ！！」

このまま黙ってみていればゴブリン君が決めてくれそうだが、念には念を入れるべく俺は鍔迫り合いをしている二人の頭上を指差す、すると俺の意図を理解したブラックが二人の頭上に飛び上がる。
ブラックの背に生えた一対の翼は伊達ではない、数回の羽ばたきでブラックは目的地である二人の頭上に到達した。

目的の場所に到達したブラックは吸い込めるだけの空気を吸い、眼下の二人目掛けて特大の炎弾を吐き出した。

「ギャアアアアッ！」
「ぐぅうううっ！」

鍔迫り合いを続けていた二人はかわす事など出来る筈もなく、着弾と同時に炎に包まれた。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

「……アニキ、やるならやるって事前に言ってくださいよ」

「あははは、悪い悪い……また一段と頑丈になってるなお前」

ブラックの特大炎弾の着弾地点から自力で戻ってきたゴブリン君に高位回復魔法(キュア)をかけつつも苦笑いを浮かべる俺。

3年前の幼竜だったころとは桁違いの威力となったブラックの炎、それを圧縮して放つ炎弾の威力は鋼鉄をあっさりと溶かすほど。

「冗談は止めてくださいよ。あの程度だったら100発くらい喰らっても死ぬわけ無いじゃないですか」

「いや、それ普通におかしいから」

そう、俺達の背後で瀕死になっているゼノンマンサの状態になるのが普通なのであって、軽く焦げた程度で済んでいるゴブリン君のタフさが異常なのだ。

「で、コイツはどうするんですか？　トドメ刺すんだったら俺がやりますけど…」

「あー、とりあえず縛って『穴』に放り込むか……殺したら後味悪いs「ギャーッ!?」ん？」

ゴブリン君と話をしている最中に背後からゼノンマンサの叫び声が聞こえてきた。

もう意識を取り戻したのか!?　そう思った俺は武器を構えて警戒しながら振り向く。

そして、俺は振り向いたを即座に後悔した。

「ギャウ～～♪（ガジガジ）」

「グワーーー！？」

そこには、瀕死になってるゼノンマンサに噛み付いているブラックの姿が！？

「ブラック！？　お前何食おうとしてるんだ！！」

「止めんかー！！　魔物はともかくＭＳ族を食うんじゃない！！」

「ギャウ～～～（イヤイヤ）」

「イヤイヤじゃない！！　ほらっ！　ペッしなさい！！」

その後、ブラックに食われかけたゼノンマンサは無事？に『穴』へと放り込まれ、俺達はこの世界と魔界（スダ・ドアカ・ワールド）を繋ぐ『穴』を閉じることに成功したのだった。

――――――――――――――――余談だが、俺達は永い旅の中で度々ジークジオンの手の者と剣を交えることになるのだが、原作が始まる数千年後に至るまで此方の世界でゼノンマンサの姿を見ることはなかったとだけ伝えておく。

１５．始めての戦闘とゼノンマンサの恐怖。（後書き）

ブラックの炎弾はホバーボールくらいならあっさりと破壊するだけの威力があります。
ゴブリン君のタフさが異常なのであってゼノンマンサが弱いわけではありません。
後書きに書いているＨＰはあくまでＨＰです、他のステータスはゼノンマンサが圧倒しているので１対１なら確実にゼノンマンサが勝ちます。

１６．見つけてしまった探し物（前書き）

時間が出来たので投稿。

16．見つけてしまった探し物

どうも、毎度お馴染み騎士アストレイです。

前回、華麗なコンビネーションで強敵ゼノンマンサを倒し、物騒極まりない『穴』を封印して谷を後にする……筈だったのですが…

「サガセェェェェ！！」
「ドコダァァァ！？　ドコニイルゥゥゥゥ！！」
「ピギャーーーーー！！」

谷の上空をレッサーギャプランやジャムルバーン、怪鳥ガゥーダ等のジオン族の飛行モンスターが埋め尽くし、

「オレサマアイツラマルカジリ」
「「「「ドーガドーガドーガ」」」」
「フシューッ！！　フシューッッ！！」

谷の内部をワーカプールやヒドラザク、スケルトンドーガの大群が跋扈し、

「トンネルニハイナイ」
「ドコイッタノカシラ？」
「シラン」

谷の地下をモールアッグ達が掘りまくる。

魔物だらけのこの状況を一言で表現するなら……

「ＴＨＡ☆地獄絵図！！」
「ギャウ？」
「そっとしておけ、辛いことが続けばこういう日だってあるんだ」
やかましい！！

１６．見つけてしまった探し物

さて、何故谷に存在しているジオン族の魔物達が血眼になって俺達を探しているのか？

その理由は簡単。
俺達が彼等の帰還方法を封印したからである。

ブラックに食われかけたゼノンマンサを『穴』に放り込んだ後、漫画でスペリオルドラゴンがやったように石柱を封印の楔とした結界＋αによって『穴』を封印したのだが……封印した直後に侵入者の存在に気づいた魔物達が最深部に押し寄せてきたのだ。

押し寄せてきた魔物達が目にしたものは、しっかりと封印された『穴』と封印作業を終えて一息ついている俺達の姿。

結果、本拠地に帰れなくされた恨みと封印を解ける可能性を信じる谷全域に存在する魔物達によって俺達は退路を奪われ、谷から出られなくなったわけである。

「いやー、魔物の恨みって怖いねー」

「怖いねー……じゃないですよ！？」

魔物除けに大量のホーリーボトルを使用して作った隠れ家にゴブリン君の声が響く。

「これからどうするんですか！？　あいつら俺達を逃がす気ありませんよ！！」

「空中地上地中、考えられる逃げ道全部封鎖されたもんねー」

最初は侵入する際に掘った地下トンネルを通って逃げていたのだが、地下を住処にするモールアッグ達が待ち伏せていたので地上に脱出、地上に出たら今度はスケルトンドーガの大群に襲われ、何とか撒いたかと思い、空を見上げれば魔物で埋まっているという正に最悪の状況。

「まあ、殺す気は無いから何とか逃げられてるんだけど……解いた後を考えると捕まる訳にもいかないし」

「アニキが『穴』の封印解いたら殺す気満々ですよ」

「あいつ等にしたら帰れない原因だしね」

「数が多すぎるからまともに戦っても勝ち目が無いですし…」

「…なによりもこれを置いて行く訳にはいかないし……どうしたもんかなぁ」

背後にある物体を見てため息をつく。

「これさえ見つけなかったら包囲網を力ずくで突破も考えるんだけど……何でこんな所にあるのかな？」

そう、逃げ回ってる最中に見つけてしまったのだ。

俺達がラクロア地方から遠く離れたラゴル地方までやってきた理

由である物を。

原作では失われてしまった7体目の機甲神、セレネスの王子ルナガンダムが眠る揺りかごである月の機甲神アルテイヤーを。

「フレメン村に来る行商人とかが知らない筈だよ、まさかこんな谷の中にあったなんてな……」

砂漠にあるフレメン村にも時折旅人や行商人が来る事がある。

彼等はこの広いラゴル地方の各地を回っているので噂話にも詳しく、『アバロン山』や辺境の密林に落ちた流星等の機甲神に関する噂も知っていたのだが他の４つ流星の行方に関しては何一つ知らなかったのだ。

まあ、『アバロン山』に落ちたのは火のマーキュリアスと水のアクアリウス、密林に落ちたと思われるのは樹木のジュピタリアスだと思うが。

「しかし、見事に壊れてますね」

ゴブリン君が見たまんまの感想を口に出すが、その感想通りアルテイヤーの状態は悪い所か最悪の一言に尽きる。

頭部のアンテナは折れてカメラは破損、左腕は完全に消失して右腕に持っている黄金の剣？は折れ曲がってるし、おまけに白銀の装甲には至る所に輝が入り辛うじて無事なのはコックピットのある胸部くらいなものである。

「確かに、これは直すよりも解体して一から作り直したほうが早いか」

原作では解体されて影機甲神カオスガイヤーの部品にされたらしいがこの状態をみれば納得である。

「運ぶだけなら俺がやりますけど……外にいる連中をどうにかしないと運んでる最中に襲われますよ」

大破しているアルテイヤーを見ながらゴブリン君が告げる。

「……駄目だ。状態が悪すぎるから運び出すわけにはいかない」

「？　状態が悪いって……前みたいに解析するんじゃないんですか？」

「解析はするけど運び出すわけにはいかないんだよ」

そう、運び出すわけにはいかないのだ。

「これには人が乗ってるんだよ」

「ハァッ！？」

もう少し状態が良ければ運び出すことも考えたが破損が酷すぎる。もしも運んでいる時に攻撃を受けたりしたら中で眠っているルナガンダムにどんな影響が出るか分からないのだ。

「結局、外をうろついてる連中をどうにかしないことには逃げることさえ出来ないわけだが……どうしようか？」

「ギャウ～」

「何か手は無いんですか？　御伽噺みたいに瞬間移動とか」

「そんな便利な呪文があればとっくに使ってるわ！」

「……使えねー」

「お前が言うなッ！！」

「グルルルゥ！！」

会話の途中でブラックが唸りだす。

「あ、やべ。ホーリーボトルの効果が切れたか」

補給補給っと。

「で？どうするんですか？　外は魔物がウジャウジャ、ここに篭ってても埒があきませんよ」

「そうだよなー、外は魔物がウジャウジャ……ん？」

ゴブリン君の言葉で自分達のいる位置を思い出す。

ここは谷のほぼ中心部。で、外は魔物がウジャウジャ。

――――――いい機会だしアレの練成にチャレンジしてみるのもいいかもしれない。

「ゴブリン君、一人だけだったら捕まらずに移動できるか？」

「そりゃあ出来ますけど……アニキとブラックを置いて逃げたりはしませんよ」

最高だ、条件は全て揃った。神様の類に感謝したことは無いが今回は感謝しておこう。

「ゴブリン君、ちょっとやってもらいたいことがあるんだけど……」

故郷への帰還を願う魔物の皆様。
俺達の安全と未来への対抗手段生成のために犠牲になってもらいましょう。

恨むならとっとと諦めなかった自分達とこんなこと思いついた俺を恨んでくれ♪

……間違ってもゴブリン君は恨むなよ？

１６．見つけてしまった探し物（後書き）

……お気に入り登録数が１２０人突破。
前の更新から３日しか経ってないのに５０人増加ってマジデスカ！？

２７．「ギャーッツギャーッ、ジャムルバーンが現われた！」
ジャムルバーン
ナラカの谷上空を旋回している。
ＨＰ１２０

２８．「バッサバッサ、上空から巨大な怪鳥が襲ってきた！」
怪鳥ガゥーダ
ナラカの谷上空を旋回している。
ＨＰ４９０

２９．「オレサマアイツラマルカジリ」
ワーカプール
ナラカの谷内部を徘徊している。
ＨＰ２７０

３０．「「「「ドーガドーガドーガ、スケルトンドーガが群れを成して現われた！」」」」
スケルトンドーガ
ナラカの谷内部を徘徊している。
ＨＰ２７０×５０

３１．「フシューッ、ヒドラザクが現われた！」
ヒドラザク
ナラカの谷内部を徘徊している。

ＨＰ５４０

３２．「ボコッ、地面からモールアッグが現われた！」
モールアッグ
ナラカの谷の地下に潜んでいる。
ＨＰ６０

３３．「アルテイヤーを発見した！」
アルテイヤー
ナラカの谷に漂着していた。
ＭＰ？？？

……できれば感想書いてくれたら嬉しかったりします。

１７．魔王じゃないよ、騎士だよ（一応）（前書き）

捏造注意！！

17．魔王じゃないよ、騎士だよ（一応）

どうも、騎士アストレイです。

『穴』を封印した結果、谷中の魔物から追い掛け回された挙句、隠れる場所を探していたら当初の探し物であるアルテイヤーを発見！　で、そのせいで逃げることも出来なくなったので谷の魔物を全滅させるついでに物騒極まりない未来への対抗手段を得る為に……鋼錬でお馴染みの『賢者の石』を錬成することにしました♪

17．魔王じゃないよ、騎士だよ（一応）

漫画、『鋼の錬金術師』のキーアイテムである『賢者の石』とは複数の生きた人間を対価に錬成される、魂が凝縮された高密度のエネルギー体である。

石その物に莫大なエネルギーと構築式が内包されているため、代価はおろか錬成陣すら必要とせずに錬金術を行使できる上、さらに「真理の扉」を開ける際にも石を代価とすることで「通行料」を払う必要が無くなるという正にチートアイテム。

さて、ここで重要なのは『賢者の石』を錬成する為に必要な対価は複数の生きた人間、正確にいうならその魂が必要ということである。

原作では『賢者の石』を錬成した際には対価にされた人間の死体が残され、対価が生きた人間の魂と述べた人造人間（ホムンクルス）もそれらを残り滓と断じているが俺はそうは思わない、人間の肉体だって様々な物質で構成されている以上は分解すれば多くのエネルギーとなる筈。

魂だけを抽出して錬成した石があれほどの力を持っていたのだ。

もしも、肉体そのものを分解してエネルギーに変換する術が存在し、そのエネルギーを上乗せして『賢者の石』を錬成することが出来たならどれほどの力を持つのだろうか？

谷の魔物達を対価に賢者の石を錬成することを思いついた俺は早速ゴブリン君に指示を出す。

出した指示は指定した場所で魔物を殺すこと。指示を終えたら隠れ家から決して出ないことの二つ。

ゴブリン君は一日とかからずにそれを終えて隠れ家に戻ってきたので俺は出せるだけの食料とホーリーボトルを出した後、錬成陣となるトンネルを掘る為に地下に潜った。

日の光の届かない地下での生活は気が狂うかと思うほど過酷だったが、この苦しみの後に待つ物を考えれば苦でもなく、途中地下に潜んでいたモールアッグ達が襲ってきたが返り討ちにして鍋にぶち込んでやったりもした（地下で食べた土竜鍋は意外と美味かった）。

地下でトンネルを掘ること3ヶ月後、邪魔なモールアッグを排除しながらではあったが問題なく完成し、無事に地上へと帰還した俺は早速錬成陣を起動したわけだが……

「……アニキ、実は正体は魔王とか言いませんよね？」

ゴブリン君が目の前の光景を目にしながら言葉をこぼす。
心なしか顔色も悪い気がするが……まあ、それが普通である。

今の状況で笑顔を浮かべているなら頭のネジが緩んでいるか気が狂っているかのどちらかである。
そういう意味では俺は狂っている気もするが問題はないだろう。

「失礼だな、騎士を名乗った覚えは有っても魔王になった覚えは無いよ」

うん、魔王になった覚えはない。が、やってることは魔王顔負けってことくらいは自覚してる。

あー、何ていうか地獄絵図とはまさにこの光景を言うのではないだろうか？

現在、ナラカの谷に存在する全ての魔物達は地下に張り巡らされた錬成陣の効果によって魂を剥ぎ取られる激痛と肉体を分解されエネルギーに変えられるという二重の苦しみを味わいながら悲鳴を上げて消えていく。

……つーか、この怨嗟の声を子守唄に等しいとか言える某紅蓮の錬金術師は凄まじくイカれてると思う。

そんな風に目の前の光景を見ていたら、此方に何かが向かって来るのが見えた。

「ア、アニキ？　何かこっちに向かって来てるんですが？」

「ギャウー」
「……おかしいな？　魂引っぺがすのに身体の大きさは関係ないと思うんだけど……」
「へ？　どういうことですか？」

意味が分からないという感じでゴブリン君が首を傾げているので説明することにする。

「通常、生き物は肉体・魂・精神の３つで構成されているんだが……これは関係ないから置いとこう」
「は、はぁ…」
「この谷にいる生き物は地下にある錬成陣の効果で、魂を無理やり引っぺがした上に肉体を分解されてエネルギーに変えられてる真っ最中なんだが…って何だよその目は？」
「……アニキ、本当に魔王とか悪魔の類じゃないんですよね？」
「ち　が　う　と何回も言ってるだろうが！！
兎に角！　魂抜かれれば動ける生き物なんて普通はいない！　それに現在進行形で肉体も分解されてれる筈だからこっちに向かってきてるアレは生き物じゃない何かだっていうことなのっ！！　わかったか！」
「ま、まぁ何とか…（そこまで怒らなくても）」

そんな感じでゴブリン君への説明を終えた俺は、ザックの中から久しぶりにメガグランチャーを取り出して肩に担ぐ。

近づいて来るアレが何かは分からないが、遠距離攻撃が出来るのは俺とブラックしかいない以上、正体不明なものは警戒しておくに限る。

「…来た！」

「ギャウ！！」

地響きと共に近づいてきたもの、その正体は……

『ストーンッ！！』

呪術師によって石から生み出された石人形（ゴーレム）、ストーンズサであった。

「なんじゃありゃーーーーーッ！？」

「ギャピーーーーーーーーッ！？」

「ゼノンマンサと魔物だけだと思ってたけど……呪術師も混じってたのか？」

ストーンズサ、それはジオン族の呪術師が秘術を用いて石から生み出した人形。

巨体ゆえの剛力は恐ろしいものがあるが、ストーンズサと戦うにあたってもっとも注意しなければならないのは全身に搭載された初期の世界観をぶち壊しにするミサイルである。

「あー、そもそも生き物じゃないから錬成陣の中でも動けるわけだ。込められた魔力が切れるまで動けるわけだし」

大方、この近くにいた呪術師がこの状況を打破する為に作って此方に向かわせたってところかな？

「何落ち着いてるんすか！？　あのデカブツ間違いなくこっちを狙ってますよ！！」

「狙ってるねー」

「狙ってるねー…じゃないですよ！　俺とブラックはここから動けないんですから早くどうにかして下さ『ストーンッ！！』キターッ！？」

いつの間にか近くまで来ていたストーンズサが此方に向かってミサイルを放とうとしているが、そんなものを正直に受けてくれるのは特撮の怪獣くらいなものである。

『ストー「はいはい、トラクタービーム」ンッ！？』

発動と同時に発生した力場によってストーンズサはそれなりの高さまで持ち上げられ、そして――――

『ストーンッ！？』

地面に叩きつけられると同時に撃とうとしていたミサイルが爆発、見事に爆散したのだった。

「馬鹿め。こんな間近でミサイルを撃つ隙なんぞ与えるわけなかろうが」

「……ギャウ」

「……ってか、こんなことが出来るならいつぞやのティラノザクも倒せたんじゃないんですか？」

「あのな、足止めたら食われる状況で詠唱なんて出来るか！！」

「ギャウ！！」

「ん？　どうし……何ですかこれ？」

「お、完成したか」

完成した賢者の石を拾い、手に取って眺めてみる。

原作に登場した『賢者の石』は赤い宝石や赤いスライムのような形状をしており、色は一貫して赤色をしていた筈なのだが……

「何かドス黒いっすね」
「うん、何かドス黒いな」
「ギャウー」

魔物を対価にしたせいか、それとも肉体も分解して一緒にぶち込んだせいなのかは定かではないが、赤ではなく何かドス黒い色をしていた。
しかもなんか禍々しいオーラを出してるし。

「…アニキ、これ捨てた方が良くないですか？　絶対に呪われてますよ」
「……うん、俺もそんな気がしてきた」

１７．魔王じゃないよ、騎士だよ（一応）（後書き）

賢者の石（ぽい何か）一応完成。
ただし、色はドス黒い上に常に邪気を放ってます。

なお、人間以外を対価に賢者の石を作れる筈ないだろ！や肉体を分解して賢者の石に組み込める筈ないだろ！等の突っ込みは無しの方向で。

３４．「ズシーンッ、ストーンズサが現われた！」
ストーンズサ
呪術師によって作られた石人形
ＨＰ２９０

１８．いつの間にか村長？（前書き）

色々試しながら書いてたらこんなことに……。

１８．いつの間にか村長？

どうも、最近不幸が続いてる騎士アストレイです。
突然ですがとんでもない事になりました。

前回、谷の魔物を『賢者の石』に変えることによって、探していたアルテイヤーとドス黒い賢者の石を手に入れたまでは良かったのですが……

「アストレイ様、例の研究についてなのですが…」
「その件は自重できなくなるから凍結！　ある程度忍耐力つけたら解除してもいい！！」
「大変ですアストレイさん！　新作の機兵が爆発しました！！」
「またか！？　今度の原因はなんだ！！」
「テンション上がりすぎて無理な改造をしたらしいです！」
「…あれほど冷静さを無くすなと言ったのに……」
「アニキ、大変だ！！」
「今度はなんだ！？　いい加減に休ませ「ビグロフォンが見つかった！！」絶対に逃がすなぁあああっ！！」

……何というか、『ナラカの谷』が『狂科学者（マッド）の村』になってしまいました。

１８．いつの間にか村長？

前回、俺達は谷中の魔物を賢者の石に錬成することによって全滅させ、アルテイヤーの解析に入ろうとしたその直後、地響きと共に地下からフレメン村にあるはずのドリルボールが数機出現。

突然の展開に驚く俺達の前に、ドリルボールの中からフレメンメタスを筆頭に村の（マッドな）若者達が出現。

本人達曰く「加勢に来ましたっ！！」とのこと。

流石にそれだけでは事情が良く分からないので詳しく話を聞いてみると……

「…なんでさ？」

「フレメンジムから話は聞きました！！　何でも村を襲う魔物を退治する為に危険を冒してここへ向かったのだと！！」

「まぁ、間違ってないけど…」

「アストレイさんとゴブリンさんの御力は知っています。が！！　幾らなんでも二人と一匹だけでは多勢に無勢！」

「長に加勢に行くべきだと言っても皆さんに任せておけば大丈夫としか言いません！！」

「今まで村の発展に尽力してくれた二人にたいして酷すぎます！」

「（まぁ、俺のせいで村がマッドの巣窟になった訳だし）…で、来ちゃったと？」

「はいっ！！　血も涙も無い長に代わって我等が加勢します！！」

「村で開発した武器や道具を全部持ってきました！　力不足はこれで補います！」

「「「「「さあっ！！　魔物は何処ですか！？」」」」」

そう言って、村の研究所で作った武器を構えるメタスちゃん率いる村の若者達。

使い慣れない武器を携え、危険を承知で加勢に来てくれたのは嬉しい。

いや、本当に嬉しいのだが・・・・・・

「……アニキ」
「……ギュウ～」
「……わかったよ」

ゴブリン君とブラックが何とも言えない目で俺を見てきたので、事情を説明するために俺はメタスちゃんに近づく。

「あー、メタスちゃん？」
「魔物なんてぼこぼこに…って何でしょう？」
「あー、大変申し上げにくいんだが……さっき終ったとこなんだ」
「……へ？」

説明するついでに回収した機兵（と誤魔化したアルティヤー）の解析をする為、フレメン村には帰らないと言ったところ……

「ならば手伝います！！」
「ハァッ！？」
「フレメンダガーさん、村に戻って研究所から機材を持ってきて下さい」
「ヘイッ！」
「フレメンジムさん達はドリルボールで居住スペースを掘って下さい」
「「「アイアイサー！」」」

テキパキと指示を出していくメタスちゃんとそれに従う若者達、その展開に思考停止する俺達と着々と出来上がりつつある研究所（洞窟バージョン）。

それを見ているだけの俺達に出来ることといえば、研究所の建設に夢中になっている彼女達の目を盗んでアルテイヤーからルナを降ろして再び冷凍庫に入れることだけだったりする。

「という訳で、邪魔が入らないうちに降ろしちまおう」
「うぉっ！？　本当に乗ってた！！」
「最初から乗ってるって言ったでしょうに……あ、起きないよう見張っててくれ」
「へ？　起こしたらまずいんですか？」
「うん、起きそうになったら気z「う…此処h「セイッ！！」グハッ！？」

会話の最中にルナガンダムが目覚めそうになったので一撃叩き込んで気絶させる。

ってか、コックピットから出して１０分とかからずに目覚めるんじゃねーよ。

「チョッ！？」
「こんな感じで気絶させてくれ」
「（可哀相に…）へい」

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

・・・

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

・・・・・・・・・

その後、フレメンダガーがフレメン村から機材と一緒に来なかった若者達を連れてきてしまい、そのせいで『ナラカの谷』は2年とかからずにちょっとした集落のような感じになってしまいその結果
……

「静かだったナラカの谷は、爆音轟く狂科学者（マッド）の谷と化してしまいましたとさ」
「アニキ、そんな他人事みたいに……」
「いや、他にどう言えと？」

実際、フレメン村から来た連中が機兵の研究してるせいで地響きはうるさいし、谷の魔物を一掃したせいで近くの村の住人がここに移住して来るし。

「いや、それは仕方ないんじゃないですか？　2年前に連中が各地の村を襲撃したせいで住むところを失った人は多いんですし」
「そうかもしれないけどさ……そのせいでマッド共が増えてるんだけど？」

朱に交わればなんとやら。
移住者の中には技術者達も当然存在し、彼等がここのマッド共が行っている研究に興味を持たない筈が無く、結果としてマッドの数が急増、何の研究をしているのか谷に爆音まで響く始末である。

「…はぁ、長さんもこんな気持ちだったのかねぇ？」

他人に迷惑さえかけなければ何をやってもいいと思っているのか彼等の勢いは留まることを知らず、機兵の起こす地響きと彼等が原因で起こる騒動は村の日常風景と化している。

――――――というかさ……

「何で俺が村長になってるのさ！？」

そう、何故か俺はこの村のまとめ役になっている。

「それは貴方が私達のリーダーだからですよ、アストレイさん」

「なった覚えは全く無いぞメタスちゃん！？」

当初は予定通りにアルテイヤーの解析を行っていたのだが、人が集まっていくにつれて問題が発生し、その度に何故か俺に相談されたので答えていたらこの立場に収まっていたのである。

「俺最初に言ったよね！？　機兵の解析が終ったらまた旅に出るって！！」

「ええ、聞きましたよ」

「じゃあ何でこんな立場に収まってるかな！？」

「無論私がそうなるように誘導したからですよ」

「何てことしてくれたかな君は！？」

気づかない内に責任者にされていた俺はなんとか辞退しようとしたのだが、メタスちゃんに掌握された住人達には聞き入れてもらえず、黙って出て行くことも出来ずに足止めを食っている訳である。

ちなみに、アルテイヤーの解析作業は村のマッド達が嬉々として行っているので問題は無い（流石に中枢部は手を付けられないので俺がやってるが）。

「つーか、何であの子はここまでするかね？」

メタスちゃんが退室し、運ばれてきた要望書に目を通しながら呟く。

む、もっと研究がしたい？　アイツ等今度は何やらかす気だ！？

「……アニキ、それ本気で言ってます？」

「ギャウ」

「何がだよ？　あ、この要望書は却下」

そんな俺の様子を見てか、呆れたように一人と一匹はため息をつくのだった。

……だからなんなんだよ。

１８．いつの間にか村長？（後書き）

アストレイ、谷に出来た村の村長になる。

最初はアストレイの解析を終えてゴブリン君関係でトラブルを起こそうと思っていたのに……どうしてこうなった！？

ところで……コンプリートボックスってまだ入手可能でしょうか？

１９．最終話「永い旅のはじまり」（前書き）

第二章完結。

19．最終話「永い旅のはじまり」

どうも、気づいたらナラカ村（前回できた村）の村長なんてやらされていた元村長の騎士アストレイです。

え？　何で元が付いてるかって？

そんなの簡単です。仕事が多すぎるのともう一つの理由でフレメンダガーに押し付けて逃げてきました。

「だからってアニキ、簀巻きにして『こいつが次の村長です』はないだろ…」

再度捕獲されたビグロフォンが揺らす馬車の中、ゴブリン君が呆れた目を向けてきてるがそんなもの気にしない！　そもそも仕事の量が異常なのだ！！

「いやいや、それも元はといえばアニキのせいでしょうが…、フレメン村の連中に機兵作りのノウハウ教えたのアニキなんですし」

「やかましい！　教えたのは俺だけど負荷で自爆するような物の作り方は教えてない！！」

ナラカ村で機兵を作ってる研究者達のほとんどはフレメン村の出身である。

そして彼等の製作する機兵は高い性能に拘るあまりに全体にかかる負荷を全く考慮せず、そのせいで頻繁に爆発するのだ。

「そのせいで提出される要望書のほとんどが爆発にたいする苦情で埋め尽くされてるし！！」

「まあ、最初はまたやってるなぁで済ませてましたけど、1年中やられてたら嫌にもなりますしね」

曰く「爆発音のせいで夜も眠れない」、曰く「御爺ちゃんが腰を抜かした」等と、執務室の机が埋め尽くされるほどである。

だが、俺が逃亡してきた理由はもう一つの方である…というより、こっちのほうが大きい。

「大体、メタスちゃんのことはどうするんですか？
あれだけやられて気づきませんでしたは通りませんよ」
「うぐっ！？」

そう、俺が村から逃亡してきた一番の理由はメタスちゃんが原因だったりする。

フレメン村でホバーボールを製作してる最中に話しかけてきたのを切っ掛けに親しくなったフレメン族の少女フレメンメタス。
大人しいように見えてかなりの行動力の持ち主で、その行動力は気づかれないうちに村を影から掌握するほどである。
そんな彼女が何を切っ掛けにしたのかは分からないが、何故か俺に好意を持っていたりする。
気づいていたのかって？　夜這いまでかけられては流石の俺も気づくわ！！

……置手紙だけ残してきた時点で最低なのは変わらないのだが。

「で、こうやって逃げてきた訳ですか？　このヘタレが」
「うっさいわッ！！　大体、ゴブリン君だって俺が一箇所に長く留まれない事くらい知ってるだろが！！」

俺が彼女から逃げてきた理由、それは俺が転生する際に願った不老長寿が原因だったりする。

不老長寿、即ち歳をとらずに長生き出来るということである。
事実、この世界に転生してから何年も経っているにもかかわらず俺の身体は一切老化していないのだ。
……まあ、外見が変わらないだけで中身が老化している可能性が高いが、こっちはその内対策を考えるので問題ない。

「不老長寿ねぇ、何でそんな面妖な体質になったんだか…」
「ギャウ」
「うるさい！　俺だってこんなことになると知っていればこんなもん望まなかったわ！！」

実際、転生した当初は自分が誰かに好意を持たれるとは欠片ほども思わなかったのだから仕方あるまい。

「で？　アニキが逃げ出てきた理由は理解しましたが実際のところメタスちゃんのことどう思ってるんですか？」
「ブッ！！　いきなりなんだよ！？」
「ギャウ！！」
「だから、身体のこと抜きにしてあの子の事をどう思ってるのかって聞いてるんですよ」
「そ、それは…」
「あの子村ではかなりモテてましたからねぇ、
　知ってます？　フレメンガンキャノンが喧嘩売ってきたのもあの子が好きだったからなんですよ」
「う、うぅ…」
「さ、ここには俺とブラックと馬車引いてるパシリしかいませんよ

？　誰にも言いませんから正直になりなさいって！」
「も、もう止めてくれ！？　俺のＨＰはもう０だ！！」
「ギャフ～…」

笑いながら追い討ちをかけてくるゴブリン君と馬車の中を転がりまわる俺、そして我関せずといった様子で欠伸をするブラック。
狭い馬車の中を転がりながら外を見ると、もはや見えるはずのないナラカ村と村にいるだろうメタスちゃんの姿を幻視した。

…もしも、俺が不老長寿なんて望まず、違うものを望んでこの世界で彼女と出会っていたら、
そこで今のように彼女に好意を持たれていたら……俺は何と答えたんだろう？

今の俺のように逃げ出したのだろうか？　それとも村に留まって彼女の想いに答えたのだろうか？

様々なＩＦの光景が浮かんでは消えていくが所詮はＩＦ。
逃げ出してきた自分にそれを思い浮かべる資格はないと頭を振ってそれを打ち消す。

取り合えず今俺がやらなければならないことは……

「調子に乗るんじゃねぇえええええええええええ！！」
「ちょッ！？　ア、アニキ！？」
「ギャウ！？」

この調子に乗ったアホを黙らせることだ！！

【ＳＩＤＥ：フレメンメタス】

はじめまして、フレメンメタスです。

アストレイさん達が置手紙を残して村を去ってから、もう三日経ちました。

村は時折爆発こそありますが平和そのもの。

立地の事もありますがこの村に訪れる人は二年前の襲撃で住む場所を無くした人たちか、それを狙う山賊さんくらいしかいません。

そういう困った人達を狙う山賊さんには試作機兵の実験に付き合ってもらうことになってますが。

それにしてもアストレイさんにも困ったものです。

夜這いをかけた私がいうのもアレですが、置手紙に「俺、実は不老長寿なんだ」って書かれても納得なんて出来っこありません。

第一！！そういう大切なことは手紙ではなく本人に言うものだと思います！！

あの人は女心というものが分かってないんですよ！！

気を引こうと思って機兵の製作に加わっても対応がいつもと変わりませんし！！……まあ、製作が終わった後打ち上げで頭を撫でてもらえたのは嬉しかったですが…ってそうじゃありません！！

もうアレです、切れました！　ブチ切れました！！

振り向いてもらおうと思ったのがそもそもの間違いだったんです。

どんな手を使ってでも探し出します。そんでもって一発ぶん殴って首輪つけて部屋に監禁してやる！！

その後の行動は自分でも驚くほどのスピードでした。

嫌がるフレメンダガーさんに二代目村長を引き受けさせ（脅してませんよ？）、村の住民達に事情を説明して回り、実験場代わりに使われている谷から使える部品を探して機兵を組み立てて、気づけば二日経っていました。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

・・・・・・・

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

・・・・・・・・・・・・・

「もう行くのかい？」

村の入り口にいたお父さんが、機兵に乗り込もうとする私に尋ねる。

「うん、もう行きます」

「そうか」

振り向きもせずに答える私に、短く答えるお父さん。

「メタス、お前が決めたことだ。私がアレコレいうのは間違っているかもしれないがこれだけは言わせて貰う」
「……」
「いつでも帰ってきなさい」
「え？」

振り向いた先にいたお父さんは、とても優しい表情(かお)をしていた。

「私はずっとこの村にいる。お前と、彼等が作ったこの村にな」
「……」
「あの家にずっと私は居るから、だから、いつでも帰ってきなさい」
「……お父さん」
「……元気でな」
「……はいッ！」

今度こそ機兵に乗り込み、ハッチを閉める前にお父さんに目を向ける。

「行ってきますッ！！」
「行ってらっしゃい！！」

答える父の顔を目に焼きつけ、ハッチを閉めて村を出る。

朝日が昇り大地が照らされる中、様々な想いを振り切るように、私は機兵を走らせたのだった。

第二章［機甲神を求めて］ー完ー

１９．最終話「永い旅のはじまり」（後書き）

ようやく第二章完結！！
アストレイは悩んだ挙句に置手紙を残して逃亡という、主人公の癖に情けなさ過ぎることをやらかしました。
そして、メタスちゃんがそれを追いかけていく……二人が再会できるかは作者の気力次第。

ちなみに、アルテイヤーは解析がほぼ終ったので谷の最深部に封印、ルナは谷からそれなりに離れたところにアルテイヤー型の装置で冬眠中……正直すまん。

３５．「いつでも帰ってきなさい」
メタスパパ
ナラカ村に住むフレメン族。
ＨＰ１９０

人物設定（9～第二章最終話）

人物設定（9～第二章最終話）

名前：騎士アストレイ
年齢：5　性別：男
身長：騎士ガンダムと同じくらい　　体重：鎧無しでもそれなりに重い

見た目：武者〇伝？の超将爆牙の見た目を赤を基本色に騎士風に直した感じで、ザックを背負っているのでマントは付けていない。

＜好きなもの＞
平和　ロボット　共に旅をしている仲間　風呂　猫　メタス

＜嫌いなもの＞
トラック（前世での死因）　馬鹿神（ストリームカイザー）、黄金神（スペリオルカイザー）・覇界神（ロックガン）（嫌いというより苦手）　一度交わした約束を破る奴　自分

＜備考＞
・ラゴル地方での暮らしでそこらの魔物なら撃退できるようになった（ティラノザクは別格）
・フレメンメタスに好意を持たれているが、逃亡という主人公にあるまじきことをやったのでゴブリン君からヘタレ認定された。
・最近は現実逃避の為か、谷で撃破したストーンズサの術式を解析している。

＜能力＞

?錬金術
・谷で賢者の石を錬成したが通常の物と違い黒かったのでザックの中に封印中。

?テイルズ各種の武術・特技・魔法
・ラゴル地方到達の時点で呪文書無しでも術使用可能になり、技もそれなりの種類が使えるが…活躍することは暫く無い。

?なんでも入る鞄（ザック）

名前：ブラック
年齢：5　性別：雄
身長：馬位の大きさ　体重：馬位の重さ
見た目：馬位の大きさの黒い翼竜

＜好きなもの＞
騎士アストレイ（子分）　ゴブリンザク（飼い主）
食べ物（最近MS族を食べたいと思っている）　昼寝、狩り

＜嫌いなもの＞
虎（アストレイが暇潰しで作った虎のヌイグルミを見ただけで燃やすほど）
飼い主を傷つける奴等　昼寝を邪魔する者全て（飼い主含む）

＜備考＞
・第一章のベビードラゴンが成長した姿
・ラゴル地方に着くまでの旅でアストレイとの力量差を把握した為、彼の中での順位が逆転した。

名前：闘士ゴブリンザク（ゴブリン君）
年齢：２９　性別：男
身長：ＯＶＡのネオブラックドラゴンと同じくらい　体重：鎧無しでもそれなりに重い
見た目：普通よりも大きく、銀色の鎧を着た戦士（ファイター）ザク

＜好きなもの＞
騎士アストレイ（最近ヘタレ認定した）　ブラック（ペット）　肉

＜嫌いなもの＞
神、薬と名の付く全て、
書類仕事（ナラカ村に居た際にアストレイに押し付けられた）

＜備考＞
・ただのゴブリンザクじゃ箔がないということで闘士を名乗っている。
・ラゴル地方についてからの数年間で更に強化されてしまった。
・ラゴル地方に来るまでの旅で愛用していた斧が壊れた為、現在はアストレイから貰ったバハムートティアを使用している。

名前：整備士フレメンメタス
年齢：１５　性別：女
身長：騎士ガンダムと同じくらい　体重：（塗りつぶされて読めない）
見た目：祈祷士リ・メタスの色を白くして丸くした感じ

＜好きなもの＞
騎士アストレイ（初恋）　両親（母は６年前に他界）　機兵製作

＜嫌いなもの＞
戦士フレメンガンキャノン　族長フレメンジェガン　レッサーギャプラン

＜備考＞
・アストレイ達が村に運び込まれるまでは普通の村娘。
・アストレイが好きなので自分なりにアプローチするが気づかれなかった為、告白ついでに夜這いを実行、ギリギリのところで逃げられる。
・逃げたアストレイを追って旅に出た（再会出来るかは作者の気力次第）。

＜おまけ＞

名前：パシリ（ビグロフォン）
年齢：１４　性別：雌
身長：大人の牛くらい　体重：かなり重い
見た目：ピグロフォン

＜好きなもの＞
肉　自由

＜嫌いなもの＞
ゴブリン君（全ての元凶）　野菜（肉食）　馬車

＜備考＞
・ラゴル地方に到着と同時に馬車を繋げたまま脱走。
・脱走してからはラゴル地方各地を放浪していたが、運悪くゴブリン君に発見され捕獲される。

名前：戦士フレメンガンキャノン
年齢：１７　性別：男
身長：騎士ガンダムと同じくらい　　体重：鎧無しでもそれなりに重い
見た目：剛戦士ガンキャノンの色違い

＜好きなもの＞
整備士フレメンメタス（片思い）

＜嫌いなもの＞
騎士アストレイ（恋敵）　レッサーギャプラン

＜備考＞
・フレメン村を守る若い戦士。
・フレメンメタスに片思い中、だがフレメンメタスからは嫌われている（気づいてない）。
・恋敵のアストレイに模擬戦を挑むが、長時間攻撃をかわされ続けた挙句に紅蓮剣で黒焦げにされる。
・以来アストレイがトラウマに。
・実はナラカ村に移住していたりするが今後出番は無い。

名前：族長フレメンジェガン
年齢：５９　性別：男
身長：騎士ガンダムと同じくらい　　体重：それなりに重い
見た目：ジェガンを黄色くして爺っぽくした感じ

＜好きなもの＞

平穏　トカゲ料理

＜嫌いなもの＞
騎士アストレイ（村の若者のマッド化の原因）　レッサーギャプラン

＜備考＞
・フレメン村の村長兼族長。
・村の拡張工事の為にアストレイに機兵の製作を依頼。
・現在は依頼したことを凄く後悔している。

名前：メタスパパ（本名フレメンメタスＣ）
年齢：３９　性別：男
身長：騎士ガンダムと同じくらい　体重：それなりに重い
見た目：メタス改

＜好きなもの＞
娘　妻（６年前に他界）

＜嫌いなもの＞
レッサーギャプラン

＜備考＞
・整備士フレメンメタスの父。
・かつては村で一番の弓の使い手（既に引退したが腕は衰えていない）。
・実は娘が告白したのを知っている為、返事をせずに逃げたアストレイにたいして物凄く怒ってる。

名前：フレメンジム
年齢：１５～１８　性別：男
身長：騎士ガンダムと同じくらい　体重：それなりに重い
見た目：フレメンジム

＜備考＞
・フレメン村の住人。
・かなりの数がいる。
・村の住人は見分けがつくらしいが、アストレイ達には見分けがつかない。

名前：フレメンダガー
年齢：１５～１８　性別：男
身長：騎士ガンダムと同じくらい　体重：それなりに重い
見た目：全体の色を黄色にしてアンテナ部分に羽飾りをつけた感じ
＜備考＞
・フレメン村の住人。
・かなりの数がいる。
・やっぱりアストレイ達には見分けがつかない。

名前：騎士ゼノンマンサ
年齢：？　性別：男
身長：騎士ガンダムと同じくらい　体重：鎧無しでもそれなりに重い
見た目：騎士ゼノンマンサ
＜備考＞
・ジオン親衛隊隊長
・谷での戦いではあっさりと敗れたが、この作品では円卓の騎士

並に強い設定。

・横暴な上司や癖の強い同僚に苦労している。

人物設定（9～第二章最終話）（後書き）

第二章の人物設定を公開。
Ｆａｔｅ風ステータスは今回から無し。

番外編『夢の中で出会うは東方不敗』　（前書き）

ネットカフェと理解ある友人万歳！！

なお、今回の話はＳＤガンダム外伝ではないキャラが出まくってます。

幕間から番外編に変更しました。

番外編『夢の中で出会うは東方不敗』

それは、ナラカ村から逃亡して3日たった日のこと。

「とっとと起きんか！！　このぶぁか武者がぁぁぁぁぁ！！」
「目を覚まさんか！！　この大馬鹿者がぁぁぁぁぁぁぁぁ！！」
「「「「「「トットトオキンカァアアアアア！！！」」」」」」

目を覚ますとそこには、とんでもない数のマスターガンダムがいました。

――――――いや、何この状況？

番外編『夢の中で出会うは東方不敗』

欠伸を一つし目を擦る、メタスちゃんに告白（夜這い？　何のこと？）されてからと言うもの、よく眠気に襲われる。

まあ、起きててもメタスちゃんのことしか考えられないし、疲れも溜まってるのでゴブリン君に一声掛けて毛布を被ったその瞬間、何かに引っ張られる感じがして俺は意識を失った。

そして、目を開けたらそこには――――

「くぉのヘタレがぁぁぁぁぁぁ！！」
「このヘタレが！！、それでも武者かぁぁぁぁぁ！？」

「「「「「「ヘタレガァアアアアアアアアアア！！」」」」」」

数多く存在するガンダムの中でも有名な物の一つであるマスターガンダムの姿が！？
しかもたくさんいる上に大変お怒りのご様子！！

視界一杯に存在するマスターガンダムの群れを見て、俺は――

「……夢だな」

即座に二度寝に移行した。

だってマスターガンダムの群れを怒らせるような命知らずなことした覚えなんてないもん。
だから、これは夢である！！　そう断じて二度寝しようとした俺を？？

「寝・る・な！　酔舞・爆覇槌撃！！」
「ぎゃぁあああああ！？」

マスターガンダムの群れに混じっていた爆覇丸の必殺技が襲ったのだった。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

「目は覚めたか？」

「はい、ばっちりと…」

必殺技を叩き込まれて強制的に起こされた俺は、何故かマスター軍団の中央に座らされていたりする。

落ち着いて良く見てみると普通のマスターガンダム（SDサイズ）だけでなく、先程俺に必殺技を叩き込んだ『SDガンダムフォース』の爆覇丸に、『ムシャジェネレーション』の武者マスターガンダム（量産型）等が混じっている。

何というか、タイトルを付けるなら『マスターガンダム博覧会』ってところだろうか？

「さて、何故貴様がこの空間に呼ばれたか理解しているか？」

「い、いえ！　全く分かりません！！」

外道なことした覚えはあるが、いくらなんでもこんな恐ろしい場所に呼ばれる覚えはないぞ！？

「貴様がこの空間に呼ばれた理由、それは……貴様がヘタレだからだ！！」

「…は？」

――――なんじゃそりゃ？

「我等は訳あって、貴様が転生してからずっと見守っていた」

「は、はあ」
「戦いではいつも前には出ず、後ろで援護ばかりしていたな？」
「まあ、ゴブリン君と一緒に戦うときはその方がバランス良いもんで」

並みの相手なら俺の詠唱が完了する前に倒しちゃうしね。

「後ろで援護するのは別に構わん、だが！！　仲間ごと敵を撃つとは何事か！！」
「あー、ゴブリン君が異常にタフなもんで…つい」

巻き込む俺が言うのも何だが、ゴブリン君のタフさは異常の一言に尽きる。
どのくらい異常かというと、分かりやすく言えば声優が若本〇夫な狂戦士並と言えばお分かりいただけるだろうか？
実際、パイングミを併用して行った連続晶術も軽く耐えられるタフさをしているのだ。

「だからと言って巻き込んでいい理由になる分けなかろうが！！」
「……仰るとおりです」

まあ、実際に巻き込んでる俺が悪いわけだし。

「他にも色々有るが……極めつけはこの間のことだ！！」
「……この…間？」

ま、まさか……！？

「勇気を出して夜這いをかけてきた女に恥をかかせ、挙句の果てには告白の返事もせずに仲間を巻き込んで逃亡するとは何事だ！！」

「据え膳食わぬは男の恥！　貴様、それでも男か！！」
「以前この空間に来たアスカという少年を見習え！！」
「「「「「「「「この……ヘタレが！！」」」」」」」
「やかましいわッ！　そもそも恋愛なんてしたことない元学生に何を求めてやがるッ！！」

周囲からのヘタレコールに、流石に切れて反論したのだが……

「「「「「「「「だからと言って返事も返さずに逃亡する理由になるかぁあああああ！！」」」」」」」
「ぎゃぁぁあああああ！？」

ごもっともな正論と周りを取り囲んでいたマスターガンダム達から放たれてダークネスショットによってあっさりと沈黙するのだった。

ってか、ここまでするか普通？

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

その後、『あまりにも情けなさ過ぎる！！　その根性を鍛えなおしてくれるわッ！！』というありがたさの欠片もない申し出によって地獄を見る羽目になりました。

具体的には――――

「この……馬鹿武者がぁぁぁ！！」
「ぎゃぁぁぁぁぁぁぁぁ！？」

爆覇丸の木槌によって空へと打ち上げられ、

「も、もう…嫌だぁぁぁぁぁぁぁぁ！？」
「逃がさん！！　十二王方牌大車併（じゅうにおうほうぱいだいしゃへい）！！」
「へ？　うぎゃぁぁぁぁぁぁぁ！？」

逃亡を試みれば見張りのマスターガンダムの放ったミニマスターによって袋叩きにされ、

「キョウノアイテハワシダ！」
「無理無理無理無理！？　サイズ差を考えろよアンタ！！」
「モンドウムヨウ！！　ユクゾ！！」
「どうやって戦えって言うんだぁぁぁ！？」

機兵並の大きさの武者マスターガンダム（量産型）と戦わされたりと、正気を疑う修行をつけられてます。

そういえば、向こう（現実？）の俺の肉体は無事なんだろうか？
この修行（いじめ）から開放されたときに「肉体はとっくに死んでるから！」とか言われたら最悪だな。

……もしもそうなっていたら刺し違えてでも皆殺しにしてやる！！（勝算は神父と吸血鬼の戦い以上に無いが）

で、今どうしているかというと―――

「し、死んでたまるかぁあああああ！？」

馬鹿みたいに広い荒野のど真ん中に放り出された挙句に……

「コロセコロセコロセ！！」

「ワタシハマスターワタシハマスターワタシハマスター」

「カンキョウカイフクカンキョウカイフクカンキョウカイフク」

「ショセンワタシハヤラレヤク……」

数えるのが馬鹿らしくなるような数の偽マスターガンダムこと『デスマスター』の大群に襲われてます！！

「ちくしょぉおおおおおお！？　何が卒業試験だ！！　どう考えてもイジメ以外の何物でもないだろうがぁあああ！！」

【遡ること数分前】

『この空間に来て数十年、良くぞワシ等の修行に耐え抜いた！！』

『（修行？　イジメだろうが！！）……おかげ様で』

『それではこれより、貴様の卒業試験を始める！！』

『卒業試験？』

『うむ！　貴様のヘタレな精神もこの数十年で多少は改善されたようだからな！！

この試験を超えた時、元居た空間へと戻ることが出来るだろう』

『よっしゃぁあああ！！　で、卒業試験は一体何をすれば？』

『うむ、試験内容はいたって単純。全部倒せ、以上』

『へ？　全部倒せ？』
『では逝って来い！！』
という感じでここに飛ばされたわけだが……
「シネェエエエ！！」
「お前がな！［分解］！！」
飛び掛ってきたデスマスターに錬金術の［分解］を喰らわせ、
「デスマスターB、デスマスターC、ジェットストr…」
「お前等がその技を使うには十年早いわッ！！」
連携攻撃を仕掛けようとした三体をザックから取り出した槍で串刺しにし、
「ナノアルキシトオミウケスル、ワレハ…」
「名がある以前にお前等の敵は俺一人だろうがッ！！」
名乗りを上げてきたアホを取り出した『オニボウチョウ』で真っ二つにし、
「「「「ショセンワタシタチハヤラレヤク……」」」」
「だったら出てくるな！［断空剣］！！」
既に諦めている連中を［断空剣］で巻き上げて一気に倒していく。
「はあ、はあ、はあ」
あれからどれだけの時間がたっただろう？　デスマスターの数は

一向に減らず、無限に沸いてくる。
こちらといえば外傷はなく、あってもグミを食べて回復するので何も問題ない。しかし、精神的な疲れはかなりあった。
今はＭＳ族でも元は人間なのだ。
倒しても倒しても減らない敵を前にすれば、気力も尽きるというもの。

「……ふざけるなよ」

死ぬのは怖い。
転生してから5年も経っているが、今でも自分が死んだときに感じたあの恐怖を忘れたことは無い。
死ぬ瞬間に感じた全てが消えてなくなるような恐怖、あの恐怖を二度も味わうのは御免である。

ではどうすればいいのだろうか？
このまま戦っていたとしても、いずれ圧倒的な物量差で押し切られるのは火を見るよりも明らかである。

だからと言って諦めるのは論外。
諦めたところで何の解決にもならず、何よりも元の世界にいるであろうゴブリン君達やメタスちゃんに会えなくなってしまう。

俺はもっとゴブリン君達と一緒に旅がしたい！　メタスちゃんにもう一度会って、今度はちゃんと自分の口で返事をしたい！！

その為にはどうすればいい？　何をすればいいのか？
簡単である。殺られる前に殺ればいいのだ！！

その結論に至った俺は、ザックの中からある物を取り出す。

「……これを使う日が来るとはな」

取り出した『賢者の石（黒）』を使い、握っていたオニボウチョウを対価にしてある物を錬成する。

そう、アストレイを知るものならば必ず知っているであろう強力な武器を……！！

『賢者の石』を用いれば、等価交換の原則を無視した強大な錬成を可能とする。

つまり、７０ｃｍ程の長さの刀を１５０ｍというふざけたサイズに錬成することも可能なのだ！！

「ナ、ナンダ！？」

「ヒカリがキエ……！？」

錬成完了と同時に、デスマスター達の頭上から光が消える。

視線を上げてみれば、彼等の目に映るのは『巨大すぎる刀』という、武器というにはあまりにも馬鹿げた物の姿だった。

「……アイツ、アホカ？」

「コンナモノダシテナニガシタインダ？」

「バカ？　イヤバカカ」

周囲を取り囲むデスマスターから呆れた視線が突き刺さってくる。

が、そんなものは全く気にならない。

何故なら――――

「これだけな訳ないだろうがッ！！　こっからが本番だぁあああああ！！」

再び賢者の石を使用し、地面に転がる倒したデスマスターの残骸を対価に錬成を開始する。

イメージするのは鎧、イメージするのは見た目的にも性能的にも兵器とは呼べない機械、イメージするのはただ巨大な刀を振る為に生まれた装備。

地響きを伴い、デスマスターの残骸を対価にして錬成された物が姿を現す。

「ナ、ナンダアレハ！？」
「ア、アタマノナイキョジン……」
「ミロ！！　ムネニアストレイガ…！！」

足元の遥か下から、デスマスター達の声がする。

ふと気が付くと、俺は錬成した巨人こと対城兵装『パワーローダー』の胸部に収まっていた。
試しに腕を上げて見れば、連動するようにパワーローダーの腕も同じように動く。

……どうやら、完全に成功したらしい。

まるで山の上から見下ろしているようで、これは中々気分が良いじゃないか！

「さ～て、この数十年で溜まったフラストレーション、ここで晴らさせてもらおうか！！」

傍に刺さっていた巨大な刀、『150ガーベラ』を引き抜き、パワーローダーが足元にいるデスマスター達を踏み潰しながら大地を揺らして走る。

「ニ、ニゲロー！！」
「ショセンワタシタチハヤラレヤク……」
「ア、オレシンダ」

「逃がすかッ！！　とっとと逝けやぁあああああああああッ！！」

パワーローダーが150ガーベラを振り上げ、一気に振り下ろす。

それからは早かった。

僅か十分ほどでデスマスターは全滅、あんなに手こずっていたのが嘘のようだ。

デスマスターの全滅を確認すると共に、錬金術を使いすぎたせいか意識が遠のいていく。

……意識が遠くなっていく中、どこからか『合格』の一言が聞こえたような気がした。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

「……ん」

意識が覚醒していく、まず見えたのはよく知っている天井。ここは馬車の中か？

「あ、目ぇ覚めたんですか」

「ん？　ああ、おはよう」

いつからいたのかは知らないが、隣にいたゴブリン君が声を掛けてくる。

どれくらい眠っていたのかゴブリン君に聞いてみたところ１時間くらいとのこと。

もしかして夢だったのだろうか？

「もう少ししたらブラックも帰ってきますし、飯にしますけど食えますか？」

「ああ、腹減ったから貰うよ」

そう言って立ち上がると、腰に妙な違和感を感じ、腰に目をやれば見慣れない剣が差してあることに気づく。

「珍しいっすね？　アニキが武器を出しっぱなしにするなんて」

ゴブリン君も珍しそうに腰の剣を見ているが、俺は驚きのあまり硬直していた。

――――何故かって？　腰に差してある剣…いや『刀』は大きさこそ違うが、俺が夢の中で錬成した物と瓜二つだったのだから！！

驚きつつも腰に差してある『ガーベラ・ストレート』を見ながら、ポツリと呟く。

「……夢じゃ…ない？」

番外編『夢の中で出会うは東方不敗』（後書き）

松葉杖使って病院から抜け出して投稿。
協力してくれた友人二人には大感謝！！

３６．「酔舞・爆覇槌撃！！」
東方不敗　爆覇丸
違う世界の武者。
ＨＰ２８０００

３７．「十二王方牌大車併（じゅうにおうほうぱいだいしゃへい）！！」
マスターガンダム
別世界の格闘家。
ＨＰ３８９００

３８．「モンドウムヨウ！！　ユクゾ！！」
武者マスターガンダム（量産型）
別世界の人型兵器。
ＨＰ２００００

３９．「パワーローダーが地響きと共に現われた！」
対城兵装『パワーローダー』
アストレイが錬成した巨大兵器。
ＨＰ１９０００

４０．「１５０ガーベラを手に入れた！」
１５０ガーベラ
アストレイが錬成した巨大な刀。
ＨＰ＋１５０００

４１．「ガーベラ・ストレートを手に入れた！」
ガーベラ・ストレート
他の剣よりも手に馴染む不思議な刀。
ＨＰ８００

２０．新たな旅の始まり（一匹不在）（前書き）

ノートＰＣと携帯最高！！

２０．新たな旅の始まり（一匹不在）

――――――二柱の神が姿を消してから五年の月日が流れた。

――――――暗黒卿の失われた暗黒機兵と異星からやってきた機甲神を求め、見事それらを手にしたアストレイ。

――――――成り行きで生まれた新しい村で一人の少女に想いを告げられたものの、アストレイは返事もせずに逃亡するというありえない行動をとってしまう。

――――――逃げたアストレイ達を追って旅に出たフレメン族の少女フレメンメタス、逃げた結果仲間からヘタレと呼ばれるアストレイ。

――――――果たして、フレメンメタスの想いは届くのか？

――――――それは、作者でさえも分からない…。

静寂が――――――

朽ち果てた遺跡によどむ闇を満たした。

アストレイとゴブリン君の二人は、息を潜めて気配を探る。

薄暗い遺跡の中で、ただ時間だけが流れていく。

天井に備え付けられた照明の明りがかすかに揺らいだ。

――――アニキ！

ゴブリン君が声をかけるのと同時に、アストレイは壁から生まれ出た気配の方を振り向いた。

「はぁっ！」

気合と共に振りぬかれた刃が閃き、その一撃は風を切る音と共に壁から這い出した魔物――――一体のゴーストハンブラビを切り裂いていた。

「ぎょえええええええっ！」

耳に残るような絶叫を残し、遺跡を彷徨う亡霊は闇の中へと霧散する。

その最後を見つつも、構えを崩さないまま俺はポツリと呟く。

「……やったのか？」

アストレイの声が聞こえたのか、ゴブリン君はこっくりと頷いた。

「よっしゃぁあああっ！！」

手に持った刀――――ガーベラストレートを掲げて、アストレイは雄叫びを上げた。

騎士アストレイ、ただ今修行中です。

20．新たな旅の始まり（一匹不在）

どうも、騎士アストレイです。

前回、何時ぞやの［ゴブリンの惨劇］並の悪夢から覚めたら腰に差してあった刀、ガーベラストレートの試し斬りついでに、ナラカの谷の近くにある村を拠点にして修行をしています。

「しかし、本当に凄い剣ですよね……一体何処で手に入れたんですか？」

最寄の遺跡に蔓延っているゴーストハンブラビを修行ついでに掃討した俺とゴブリン君。

その後、村にある飯屋で夕食を囲みつつ、ゴブリン君はそう聞いてきた。

「何処でって…前にも言った通り、昼寝から覚めたら腰に差してあったんだよ」

エプロンをつけたジムが運んできたコロッケを口にしつつ、俺はそう言った。

「ですから、その冗談は聞き飽きましたって！　普通は切れない幽霊（ゴースト）モンスターを切れる剣を昼寝から覚めたら持ってるなんて、普通

はありえませんから！」

続けて運ばれてきた肉団子を口に運びつつ、笑いながら言うゴブリン君に、俺はため息をつき、

「だーかーらー、本当なんだってば！　夢から覚めたら腰に差してあったんだよ！！」

「またまたー、ご冗談を！……あ、肉団子おかわりお願いしまーす！」

と、何度目かわからないやりとりをしつつも、おかわりを注文するゴブリン君。

厨房の方から「肉団子一人前追加ー！！」と、聞こえてくる。

「で、何度目かわからないやり取りはここまでにして、アニキはこれから先どうするんですか？」

先程までのふざけた空気はなりを潜め、真面目な顔をするゴブリン君。

「……どう、とは？」

「最初の目的だった機兵探しはとっくに終ってますし、ナラカ村に戻って見ればメタスちゃんは旅に出てるし、

元々やることが無いから始めた旅ですし……まだ旅を続けるのか聞きたくなりましてね」

そう、元々俺達がこのラゴル地方には機甲神を探しにきていたのだ。

色々有って三年もかかった上に村を一つ作ってしまったが、当初の目的は既に達成されているといえよう。

「で、どうするんですか？」
「……決まってるだろう？」

人の悪い笑みを浮かべながら聞いてくるゴブリン君に対し、俺も似たような笑みをつくって答える。

「メタスちゃんを探す！　だから旅は続ける！！」
「その心は？」
「…言わなきゃ駄目？」
「駄目っす」
「返事……返さなきゃ駄目でしょーが」
「まぁ、メタスちゃんもアニキを探してるらしいですし、そもそも探しに行かなかったらメタスCさんがこっちに来かねませんしね」

……実は、この村に来る前にナラカ村にメタスちゃんを尋ねにいった所、「メタスほったらかして何やっとたんじゃぁあぁッ！！」と、怒り心頭のメタスCさんにボコボコにされました。

『で？　今更のこのこと戻ってきて何のようかね？』

俺をボコボコにして少しは怒りが収まったのか、メタスCさんが聞いてくる。

『あー、実は忘れm『トドメを刺して欲しいなら遠慮なく言いたま

え』

チャキと弓が構えられ、いい笑顔で微笑みかけられました。
冷や汗を浮かべ、俺もつられていい笑顔を浮かべた。

『今のは完全に俺が馬鹿だったです。本当は先日の件でメタスちゃんに用があって戻ってきました』

『よろしい』

今のは間一髪だった、マジで危なかった！！
笑みこそ浮かべているが、この人内心ではまだ怒ってるよ！？……
……いや、これが親として普通なんだよな。

『本当ならこの場で殴り殺しているところだが……』

『あ、やっぱり？』

ってことはあれですか！？　残念！俺の冒険は此処までのようだ！！ってやつですか！？

『まあ、ちゃんと答えも出してきたようだし、あの娘（メタス）とその顔に免じて許してやろうじゃないか』

『……あれ？』

と、こんなやり取りがあった後、メタスCさんはメタスちゃんが俺達を追って旅に出たことを告げた。

『はぁッ！？　旅に出た！？』

『うん、君たちが村を出た二日後に機兵を組み上げて旅に出たよ』

あの子にあんあに行動力があったなんて思いもしなかったと、軽

快に笑うメタスCさん。
『い、行き先とかは聞いてませんか？』
『私が知るわけ無いだろう？　行方の分からない君を追って旅に出たんだから』
『う、それはそうですけど……』
『まあ、この地方にはいるとは思うから探してみるといいよ。機兵なんて目立つ物で旅をしているから噂にもなるだろうし』
『ってか、何で機兵に乗って行ったんでしょう？』
『そりゃあ、女の一人旅は危ないからに決まっているだろう？後、君を見つけた時にぶん殴る為だろうね』
『はぁッ！？』
驚きの声を上げる俺を、呆れたように見るメタスCさん。
『…君ね、今回のことで一番怒ってるのはあの子に決まってるだろうに。
あの子を見つけた時、あるいはあの子に見つかった時は覚悟しておくように』
『……はい』
・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
その後、「あの子を悲しませるようなことをしたらトドメを刺しにいくからね？」と、黒い笑みを浮かべるメタスCさんから逃げる

ように村を後にして現在に至る訳だが……

「でも実際に手掛かりがないんだよなー……おまけに馬車も無いし」

「……すんません」

そう、村を出てから数日後、またしてもパシリが逃げ出したのだ。しかも逃亡防止の為に付けた発信機でもあるティアラ（ＴＯＤに登場）を外して！！

「……無理に外そうとすれば致死量の電撃が流れる筈だったんだけど」

「……余裕で耐えてましたね」

ティアラを外したパシリは、ついでと言わんばかりに繋がっている馬車を唖然としている俺達と昼寝をしていたブラックに叩きつけて逃亡。

昼寝を邪魔されて切れたブラックはパシリを追い、以来行方不明である。

「……前回と違ってまともな扱いはしてたんすけど」

「やっぱアレじゃね？　馬車馬にされるのが凄く嫌だったとか」

まあ、それは置いといて――――

「俺はメタスちゃんを探しに行くけど…ゴブリン君はどうするんだ？」

「そりゃあ勿論、アニキについて行きますぜ？

ラクロア地方に帰ったってやる事がありませんし」

「…あんがと」

「礼はいいですって！…って、それは俺の肉団子ですよ！？

何さらっと自分の皿に移してるんですか！！」
「いやー見てたら美味そうだったんで（モグモグ）」
「食ってるし！？　だったらそのコロッケを俺が食っても文句は無い筈！！」

そう言って、俺の皿に乗っているコロッケに向かってフォークをつき立てようとするが、そんな事を許すほど俺は甘くない！

「させるかっ！」

皿に向かってくるフォークに、同じく手に持ったフォークで迎撃してコロッケを死守する！

ギチギチと金属が擦れあう音が響く。

「アニキ？　俺の肉団子に手を出したんだから…そのコロッケを差し出すのが礼儀ってモンでしょうが！！」
「…グ、金出してるのは俺なんだから……一つくらいいいだろ」
「駄　目　に決まってるでしょうが！　いいからコロッケ寄越せ！！」
「断る！！　食いたければ肉団子をもう一つ要求する！！」
「それこそ断る！！」

コロッケを狙うゴブリン君とそれを死守し肉団子を狙おうとする俺の間で火花が飛び交う。

互いに得物（フォーク）を手に、相手の皿に乗っているコロッケと肉団子につき立て、それを阻止せんと両者の間でフォークがぶつかり合う。

速さで勝る俺と力では負け無しのゴブリン君。

ここまで共に旅をしてきた仲間の間で、互いの好物を賭けた戦いが始まる！

その後、あまりの喧しさに切れた店主に叩きだされるのは当然の流れであったといえよう。

２０．新たな旅の始まり（一匹不在）（後書き）

今回からブラック不在でで話が始まります。
どこかでブラックと合流できたらいいなー。

４１．「あんた達、此処での喧嘩はご法度だよ！！」
店長ジム？
飯屋『あなはいむ』の経営者。
ＨＰ１０９０

４２．「ヒュウウ～ッ、ゴーストハンブラビが不気味に現われた！」
ゴーストハンブラビ
暗闇に紛れて襲ってくる。
ＨＰ１３０

２１．手がかりと盗賊の末路（前書き）

書いてたら変になってしまった…。

21．手がかりと盗賊の末路

日が沈み、月が静かに照らす森の中。

夕飯の支度をしていた俺達は盗賊に襲われていた。

「へっへっへっ…命が惜しければ金目の物を置いていきな」

「金目の物が無ければ食料でもいいぜ？」

「俺達も鬼じゃねぇんだぜ？」

「……寧ろ恵んで下さい」

普通、こういう状況に陥ったら武器を構えるなり大声を上げるなりするものだが、俺とゴブリン君はそういったことをする気にはとてもなれなかった。

何故かって？　目の前にいる連中は――――

「あ？　何だ、びびってんのか？」

「けっけっけっ、見れば分かるが盗賊だ！！」

「へっへっへっ、痛い目見たくなければ大人しく金目の物……いや、寧ろ食料を寄越しな！」

「もう七日以上何も口にしてないんです！　お願いですからその鍋の中身を恵んで下さい！！」

目の前にはボロボロの鎧を着込んだドムと思われるＭＳ族が四人、着込んだ鎧以上にボロボロな武器を構えてフラフラしているからだ。

……なんというか、世紀末救世主でなくとも指先一つで倒せてしまえそうである。

流石にこの状態の相手に武器を構えられるほど冷酷にはなれず、結局――――

「……一緒に食うか？」

「「「「ありがとうございますっ！！」」」」

――――――しかし、俺達ＭＳ族の口はどこにあるんだろう？

２１．手がかりと盗賊の末路

どうも、騎士アストレイです。

旅に出たメタスちゃんを追って旅をしていたのですが、飢え死にしかかってるドムを四人程拾いました。

で、夕食に作ったカレーをそいつ等にも分けてやったのですが……

「はっはっはっ、危うく死ぬかと思ったぜ！」

「自分達を襲う奴等に恵んでやるとは馬鹿な奴等だ！」

「へっへっへっ、これから自分達がどういう目に会うかも知らずになぁ！！」

「……まぁ、なんだ。命だけは取らないから金目の物は置いてってくれないか？　もしくは一撃で決めてくれ」

食い終わって数分後、腹が膨れたリックドム盗賊団（自分から名乗ってくれた）に武器を向けられてます……いや、一人だけ乗り気じゃ無さそうなのがいるけど。

「……アニキ、殺ってもいいですか？」

ゴブリン君がバハムートティア（ＴＯＶ仕様）を肩に担いで聞いてくる。

「…あー、気持ちは分かるけど殺ったら駄目だろ」

「ッチ！　じゃあどうします？　ボコって逆に身包み剥ぎますか？

……一銭の価値も無さそうですけど」

目の前の三人が見に付けている装備品を見て断じるゴブリン君。

まあ、あんだけボロボロの武器を買ってくれるような物好きはいないだろう。

「テメェ等！　俺達を無視するとはいい度胸じゃねーか！！」

「余程痛い目を見たいらしいなぁ！」

「へっへっへっ、機兵には負けたが今度の相手は生身、しかも数ではこっちが上だ！」

「……生きてたら盗賊稼業から足洗おう」

自分達を無視したことが頭にきたのか、盗賊ドムが怒りの声を上げる。

つーかドム君や、だったら最初から盗賊なんてやるな。

「……殺っちまってもいいですか？」

「…はあ、殺すなよ？」

「了解っす、暫く固い物は食えなくなるぐらいで勘弁してやりますさ」

そう言って、ゴブリン君はバハムートティアを構え、俺は腰に差したガーベラストレートに手を伸ばす。

「やっちまえ！！」

「飯のお礼だ！　死なねぇ程度で済ませてやるよ！！」

「俺達を怒らせたらどうなるか……思い知らせてやる！！」

「……生きていたら故郷に帰って畑を耕そう、どんな荒地だって頑張れば芽を出すさ」

「上等だ！！　恩を仇で返せばどうなるか……その身で知りやがれ！」

怒鳴り声と共に突っ込むゴブリン君。

かくして、戦いの火ぶたは切って落とされた。

・・・・・・・・・・・・・・・・・

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

そして数分後、戦いの幕はあっさりと降りた。

「……ち、ちくしょう」

「…よ、四対二なら勝てると…思ったのに…」

「……ま、負けてるじゃねーか……」

「い、生きてるって素晴らしい！！」

ゴブリンザクの枠には収まらないゴブリン君の相手をするにはこいつ等は力不足で、俺も油断して不覚をとるほど馬鹿じゃない。

「さ～て、まさかこの程度で済むと思ってるんじゃないだろうな？」
地面に転がるドム達に指を鳴らしながら近づいていくゴブリン君。
先程言ったとおり、流動食しか食えないようにする気満々である。

「ひ、ひぃいいいいい！？」
「お、お助けぇえええ！？」
「ど、どうかお許しを！！」
「……これも報いか」

近づくゴブリン君にびびる三人と既に悟っているのが一人……って、ちょっと待て、さっきこいつ等の一人が気になること言ってなかったか？

「安心しな！　殺しｙ「ゴブリン君ストップ！」…ん？　やっぱり身包みも剥ぎますか？」
「「「ひ、ひぃいいいい！？」」」「まぁ、文句は無いけどさ」
「誰が剥ぐか！！　ちょっと聞きたいことがあってな、ん～と…真ん中のドム！」
「へ？　お、俺ですか？」

指を指された真ん中のドムが素っ頓狂な声をあげる。

「そうお前だ。ちょっと聞きたいことがあるから正直に答えろ」
「こ、答えたら見逃してもらえ「見逃すわけないだろ」……やっぱり」

食後一分とかからずに恩を仇で返したのだから当然である。

「さっきお前、『機兵には負けたが今度の相手は生身』とか言ってたよな？」
「あ、ああ」
「もしかてお前ら、最近機兵と戦ったのか？」
「何でわかるんだよ？　まあ七日くらい前にな。もっとも返り討ちにあったせいで三十人いた仲間が今じゃたったの四人だがな！！」
「…普通は生身で機兵を襲ったりはしねーよ。で？　操手は見たか？」
「……見たさ。ＭＳ族の女だったよ」

――――こいつ等が機兵を襲ったのは七日前で、操手はＭＳ族の女……ってことは！

「アニキ？」
「ゴブリン君、思ったよりも早く追いつけそうだ」
「ということは…おい！　その人はどっちの方角に行ったか言え！」
「ヒッ！？　た、確か東の方角に…」

ドムが指した方角、その方角に俺達が探す女性がいる！

「急ぐぞゴブリン君！」
「ヘイ！　っと、こいつ等はどうします？」

ゴブリン君がドム達を見て訪ねる。
一人はともかく、他の三人はほっとくとまた同じことしそうだな……。

「…もう盗賊稼業から足を洗うって誓えるか？」
「あ、ああ！　誓います！！」
「も、もうこんなこと止めて真面目に働きます！！」

「こ、これからは真面目に働きます！！」
「故郷に帰って畑を耕します」
「本当に？　神に誓って？」
「「「誓います！」」」
「…あー、神様は信じてないんで親に誓います」

俺の後ろで斧を構えているゴブリン君が余程怖いのか、ビクビクしながら答えるドム達。
この様子なら二度と盗賊なんてやらないと思うが……念には念を入れておくとするか。

「そっかぁ、なら働き口を紹介してやるよ」

俺が書いた手紙と地図を手に元気良く走り去っていくドム達の背中を見送り、夕食の後片付けをした俺達は東の方角を目指して駆けていた。

機兵の移動速度はこちらの何倍もある上に一週間もたっているので追いつけるかは正直賭けである。

「そういえばアニキ、あいつ等これから何処にいくんですか？」
「ん？　言ってなかったか？」
「聞いてませんよ」
「そっか、俺が書いた手紙が通用する村なんて一つしかないだろ？」
「……大丈夫ですかね？　死ななければいいけど」
「死にはしないだろ。　精々死ぬほど扱き使われるだけだろうし」
「……まあ、自業自得ってやつですかね」

そう、俺が書いた地図に記された場所、それは――――

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

・

「すいませーん、アストレイって人にここで働けって言われたんですけど…」
「お！　良い所に来てくれた！！」

渡された地図に書いてある村ことナラカ村に着いたドム達は、村長に挨拶をして手紙に書かれていた村の奥にある谷までやってきたのだが、そこにあったのは無数の騎兵の残骸とそれを分解しているジム達。

とりあえずアストレイの手紙を渡すと、ジムはとても嬉しそうに笑い始めたのだった。

「いやー、最近は誰も協力してくれなくて困ってたんだよ！」
「あの、俺達はここで何をすればいいんでしょうか？」
「つーか、ここは一体何をしているんですか？」

妙にテンションの高いジムに、若干ひきながらも質問するドムAとドムB。

「ああ、ここでは機兵の研究をしていてね。
君達にはその操手を務めて欲しいんだよ」
「そ、操手？」

ドム達は少し驚いていた。
彼等はこの場所で雑用でもするかと思っていたのだから。

「意外と簡単そうですね」
「まぁ、造った機兵に乗ってもらうだけだからね。（私は乗りたくはないがね）」
「……今なんか言いませんでした？」
「気のせいではないかね？　じゃあ早速やってもらいたいが……本当にいいんだね？」
「少し考えｓ「頑丈さには自信がありますから大丈夫ですって！」ちょっ！？」
「では、早速やってもらうとしよう！　ついて来てくれ」

――――――そして数分後。

「「「「「うぎゃぁあああああああああっ！？」」」」」

ナラカの谷全域に彼等の悲鳴が響いたという。

――――彼等は知らない、アストレイが書いた手紙にはこう書かれていたことを。

「親愛なるナラカ村のマッドサイエンティスト諸君へ

俺達を襲ってきた盗賊達を実験台（モルモット）としてそちらに送りますので、どうぞ好きにしてください。

後、あまり羽目を外して村長に迷惑をかけないように。　騎士アストレイ」

２１．手がかりと盗賊の末路（後書き）

哀れ、盗賊ドム達はマッドの餌食となりました。

４３．「金目の物を置いていきな！」「食料でもいいぜ？」「腹減った」「恵んで下さい」

リックドム盗賊団

既に壊滅しかかってる盗賊団。

ＨＰ６５０

２２．依頼と噂話と。（前書き）

先日退院しました。

２２．依頼と噂話と。

宿屋の古い扉が軋んだ音と共に開かれた。

戸口に現われた黒い影、マントを羽織ったガンダム族と思われる男はゆっくりと此方へ近づいてきて、

「機兵乗りを探してる変な二人組みってのはあんた達かい？」

そう聞いてきた。

２２．依頼と噂話と。

どうも、最近仲間からヘタレ呼ばわりされている騎士アストレイです。

前回得た情報を信じ不眠不休で二日間走り続けたのですが、結局メタスちゃんが操手と思われる機兵には追い付けませんでした。

その後、二日間も走ったせいで心身共にボロボロだったので宿屋で療養していたら見覚えのないガンダムに話しかけられてます。

「……アニキ、知り合いですか？」

「……そんな訳ないだろ、そっちは？」

「アニキ以外でガンダム族の知り合いは居ませんよ」

俺とゴブリン君は互いに顔を見合わせどちらかの知り合いかどうか確認するが、俺にはガンダムの知り合いは居ないし、ゴブリン君にも居ないらしい。

もう一度話しかけてきた男を見てみる。
朱色の体、土色のマントにそこからはみ出す自身の身体と同じ朱色の鎧、そして腰から下げた二本の剣からして騎士、もしくは剣士か戦士だと検討をつける。

「…もしかして、違ったか？」

何の反応も示さないこちらを別人かと思ったのか、聞いてくる男。

「あ、多分違わないと思う。俺達に何か用か？」
「ああ、少し用があるんだが…その前にテーブルに着かせて貰ってもいいか？」

俺が構わないと言うと、男は軽く頭を下げて隣の席に腰を下ろした。

「突然話しかけてすまないな」
「気にしてないからいいよ。で、あんたは何者だ？」
「俺の名は双剣士ソードカラミティ、あんた達の噂を聞いて頼みたいことがあって探していた」

その名を聞いて俺は、最近薄れつつある前世の記憶から該当するＭＳとパイロットの詳細を思い浮かべる。

――――――ソードカラミティ――――――

アニメ『機動戦士ガンダムＳＥＥＤ』に登場した砲戦型ＭＳ『カラミティガンダム』を地球連合軍が発動した万能機開発計画「リビルド１４１６プログラム」に基づき改装した機体。

オリジナルのカラミティガンダムと対照的に接近戦に特化した機体で、『ストライクガンダム』の換装機構のソードストライカーに搭載された各武装の改良型を装備する。重火器が撤廃されたことで軽量化され、機動性、運動性が向上している。また、搭載ＯＳも一般のナチュラルパイロット用に調整されている。

原作では三機開発され、その内の二号機はパイロットの切り裂きエドことエドワード・ハレルソンと共に多くの戦いを戦い抜いた。

パイロットであるエドワード・ハレルソンも二日酔い状態で出撃し、しかもその状態で戦闘機の翼でジンの装甲を切り裂くという離れ技をやってのけたりする人外である（しかも彼はコーディネイターではなくナチュラル）。

外伝の世界の人物はヤザンをはじめとして原作とは別人が多いけど、何でよりにもよって種世界でもサーペントテールや気違い（ラクス）の関係者並みに強い奴が俺達を探してるんじゃぁあああ！？

……落ち着け、本当に落ち着け、ドイツ軍Ｚじゃなかったガンダムはうろたえない。

とにかく何で俺達を探していたのか？　それをはっきりさせないことには何の動きも取れない。

「……頼みたいこと？」

「ああ、用件を言う前に確認したいんだが……あんた等しばらく暇かい？」

「暇といえば暇だけど……それが何か？」
メタスちゃんを探すにしても手掛かりが全く無いので暇といえば暇である。
「そうか暇か！　この近くにある遺跡のことは知ってるか？」
「遺跡？」
「ああ、最近発見されたばかりで詳しいことは分からないんだが、噂だと凄いお宝が眠ってるらしい」
――――――つまり……
「その遺跡の探索に手を貸せと？」
「話が早いな！　まあ、所詮は噂だから当てにはならんが帰ってきた連中が持ち帰った物が中々の値打ち物だったりするからあながち嘘でもないらしいんだよ」
ほー、そんな噂があったのか。
この村に留まって三日くらい経つけど聞いたこともなかったな。
まあ、受けるかどうか答える前に気になることが一つ。
「なあ、それに答える前に一ついいか？」
「ん？なんだい？」
「俺達の噂ってなんだ？」
どんな噂か知らないが、正直かなり気になるんだが。
「おいおい！？　マジで言ってんのか！？」
「マジで言ってます。どんな噂が流れてるんだ？」

「俺も気になるな」

やはり自分の噂は気になるのか、話に乗ってくるゴブリン君。

「……その様子じゃあ本当に知らないらしいな。まあ、俺もどの噂が真実なのか気になってたし当人達に確認しておいて損はないか」

そう言って、今ラゴル地方の各地で流れている噂を語り始めるソードカラミティ。

話は三十分くらいかかり、その噂を纏めてみるとこんな感じである。

・曰く、二度も［森の主］と遭遇し、命があるばかりか撃退に成功した程の強者。

・曰く、見たことも聞いたこともない未知の魔法を操るという魔法使い。

・曰く、ナラカの谷を十年とかからずに技術者の聖地に変えたほどの賢者。

・曰く、八つ当たりで近隣の盗賊や山賊を壊滅させた魔王。

・曰く、女一人口説けない哀れすぎるヘタレ。

無論、それを聞いた俺が怒り狂ったのは言うまでもない。

事実も混じっているが酷いデマも混じっている。特に最後の！！

――――――――――どこの馬鹿だ！？　こんな噂流した馬鹿はぁあああああああああっ！！

「で、どの噂が本当なんだ？」

腸が煮えくり返ってる此方の気も知らず、暢気に噂の真相を聞こうとしているソードカラミティ。

が、そんなことに構っていられるほど今の俺には余裕は無い！

「……ちょっと出かけてくるわ」

「え？　お、おい！？　まだ話の途中…」

「あー、今は話しかけない方がいいぞ。見た感じ怒り狂ってるし」

ソードカラミティが呼び止めようとしているが、それに構わずに宿屋を飛び出す。

どこの馬鹿かは知らないが命があると思うなぁあああああああああっ！！

「……一体どうしたんだ？」

「……あー、頭が冷えた頃に戻ってくると思うから気にしないでくれ」

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

・・・・

「で、依頼を受けるかどうかだったな？」

「あ、ああ」

　宿屋を飛び出して十分後、村を走りまくって頭が冷えた俺は宿屋に戻って話の続きをしていた。

　ゴブリン君から何か言われたのか、目の前のソードカラミティも先程口にした噂に関しては聞いてこない。

「まあ、暫くは遺跡に潜ることになるし、お宝が本当にあるかも分からないから強制はしない。

　他の奴等に先を越されたくないから早目に返事を出して欲しい」

　ふむ、発見されたばかりの遺跡に長期間潜り、しかもお宝はあるかどうか分からない。

　俺はゴブリン君の方を振り向き、どう思うか聞いてみた。

「（どう思う？）」

「（嘘でもないらしいですし、受けてもいいんじゃないんですか？

　こっちもメタスちゃんの手掛かりが無い以上は探しようが無いんですし）」

「（それもそうだな。まあ、お宝が手に入れば儲け物ってことで）」
「おーい！　出来れば早目に受けるかどうか返事が欲しいんだが」
一向に答えを出さない俺達に焦れたのか、返事を求めるソードカラミティ。
「ああ、暇だから受けさせてもらうよ……見つけたお宝は山分けってことでどうだ？」
「ハハッ！まあ、一緒に潜るんだから妥当なところだよな」
受けることを伝えるついでに見つけた宝を山分けにしようとする俺と笑いながらそれを受け入れるソードカラミティ。
……まあ、こっそり見つけた場合は俺の懐に入れさせてもらうがな！ザックに入れれば幾らでも言い訳できるしね！
「……アニキ、何か良からぬ事考えてませんか？」
「き、気のせいだよ？」
そんなことを考えていたのがばれたのか、ゴブリン君が不審な目を向けてきた。
……後が怖いからゴブリン君には見つからないようにしよう。

「そういえば自己紹介がまだだったよな？俺はアストレイ、一応騎士やってる。
で、こっちは…」
「ゴブリンザクのゴブリンだ」
「……あー、ツッコミ入れるところか、ここは？」
「……入れないでくれると嬉しい。そもそもアニキがそう呼んでたのが定着しちまっただけだし」
「その呼び方が嫌だったら名前教えてくれよ。今後はそっちで呼ぶから」
「そうだな、それが一番手っ取り早いな」
「……実は俺も知らないんすよね」

２２．依頼と噂話と。（後書き）

ソードカラミティ現る。

すれ違いが書けないのでアストレイ達を遺跡に放り込むことにしました。

しかし殆んど惰性で書いてるけど、後書きのこれ←って書かないほうがいいですかね？

４４．「機兵乗りを探してる変な二人組みってのはあんた達かい？」
双剣士ソードカラミティ
ラゴル地方を旅する剣士。
ＨＰ２６５０

２３．突入！遭遇！戦闘へ！

人があまり立ち寄らない山の中、辺りには冷たく湿った緑のにおいがたちこめている。

土に埋もれ、苔や蔦に覆われた古い遺跡の前に、通常では考えられない巨体をしたゴブリンザクとガンダム族と思われる男が二人、武器を携え佇んでいた。

遺跡から放たれる独特の空気と辺りに広がる緑のにおいの中、唐突にその中の一人が口を開いた。

「……ソードカラミティ、ゴブリン君」

「……なんだ？」

「……何すか？」

声をかけられた二人は静かに男の次の言葉を待つ、そして……

「……やっぱり探索止めて帰らない？」

空気を読まずにそんなことを言い放った馬鹿の頭を、隣に立っていた二人が無言で殴ったのは言うまでも無い。

２３．突入！遭遇！戦闘へ！

「……いきなり殴ることはないだろ」

「お前は何考えてやがる！　まだ中にも入ってないのに帰る訳無い

だろうが！！」
「そうっすよアニキ、何の為にこんな山奥まで来たと思ってるんですか」
「そりゃお宝の為だけどさ……下手すれば出てこれなくなるぞ、間違いなく……」
殴られて痛む頭をさすりつつ、俺は遺跡に目をやった。
目の前のこの遺跡、どうやらそれなりに大きな建物がなんらかの要因で埋没したようだが、土に埋もれている部分、つまり山になっている部分だが形が妙な感じに歪んでいる。
おそらくそれが、建物が埋まっている部分なのだろうが……これが何というか、物凄く大きいのだ。
「ま……まあ、確かにな……」
ソードカラミティもこのでかさは予想外だったのか言葉を失う。
「け、けど、中にはお宝とかあるかもしれねーですよ？　アニキが好きな機兵とか」
半ば自分に言い聞かせるようなフォローを入れるゴブリン君。
「……機兵か」
最近メタスちゃんのことで頭が一杯で忘れていたが、覇界神に対抗できるような“力”を探すのも旅の目的の一つだったんだよな。
まあ、暗黒機兵（クーロン）と機甲神（アルティヤー）というスダドアカ・ワールドでも有数の

機兵を解析してきたので他の機兵で参考になりそうなのは二体の聖機兵くらいのような気もするが……もしも手に入るなら解析して損はないだろう。

……あればの話だが。

「……まあ、最悪は俺が遺跡に穴開けて退路を作ればいいんだし、行ってみますか」

「そうっすね」

「うっし！　じゃあ入ってみるか！」

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
・

遺跡の内部は予想以上に深かった。

中に入ってからかなり歩いた筈だが、まだ遺跡の奥にはたどり着いてはいない。

もはや入り口の光も見えず、ソードカラミティが『ライト』の呪文で頭上に造り出した明かりに照らし出されているのは俺とゴブリン君、ソードカラミティの三人と、どこまでも続いているようにも感じられる通路にヒビの（おそらくはヤクトグリフォン）入った壁と天井、そして趣味が悪いと断言できる魔物の顔松明立て。

遺跡に入ったばかりの頃はそれなりに会話もあったのだが、遺跡内部の雰囲気と甘くすえたような淀んだ空気のせいで今は誰も喋ろうともしない。

……ああ、こんな話受けるんじゃなかった……

この時点で俺の体力と魔力はともかく、気力や根性の類がほぼ尽きかけていたとしても誰が攻められようか？

「……なあ」
「なんだ？」
「もう帰らない？　お宝どころか魔物一匹も出てこないし」
「俺もアニキに賛成だ。正直ここまで何もないと逆に気が狂いそうだ」
「……まあ、その気持ちは分からなくもないんだが……もう少しだけ付き合ってくれないか？
このまま手ぶらで帰るのもなんだか悔しいし」
「……それってどのくらい？」

俺がそう聞くと、ソードカラミティは懐から懐中時計を取り出して時間を確認する。

「そうだな……後一時間くらい進んでみて何も無かったら引き返そう」
「了解しましたっと……アニキもいいですか？」
「りょーかーい」

適当に返事をしながら、俺は片手に持ったナイフで壁に×状の傷をつける。

そんな俺の態度が気に障ったのか、ソードカラミティは口を開きかけ――――

突然ぴたりと、足を止めて何かを探るように視線を宙に漂わせる。

俺とゴブリン君もその場に足を止め――――――聞こえる。

「これは……声か？」

ゴブリン君がぽつりと呟いた。

暗い遺跡の奥から聞こえてくるのは、紛れもない人の声。

その内容までは聞き取れないが、複数の声が会話を交わしているようだ。

幽霊魔物（ゴーストモンスター）の類でなければ――――――俺達の前に遺跡に入った別の一団ということになる。

「おーい！　誰かいるのかー！」

ソードカラミティが大声を出して叫ぶ。

その声が聞こえたのか、奥のほうから一斉に大騒ぎいくつかの声が上がった。

騒ぎ声と共に金属を打ち鳴らすような妙な音が混じっており、それが聞こえた瞬間俺は嫌な予感を感じた。

「……どうやら先客がいたらしいな」

これは何も残って無さそうだなと一人ごちるソードカラミティを

横目に、腰に差してあるガーベラ・ストレートに手を伸ばす。
聞こえてくる音が光と共に近づいてくるにつれて、嫌な予感が大きくなっていくのが感じられる。
ふとゴブリン君の方を見れば、俺と同じようにバハムートティアに手を伸ばしている。

そして、曲がり角の向こうから音の主たちがその姿を現した。

角の向こうから現われたもの、それは――――

「アイアンアッシマーかっ！」

アイアンアッシマー、洞窟やダンジョンの中で待ち構えている屈強なモンスター。
ストーンズサやヘビィグフのようにやたら表皮が硬く、なかなか思うようにダメージを与えられない。　そのうえ数も多いので、遭遇したら動きの遅さをついて各個撃破するのが有効である。

「さっきから聞こえてた金属音はこいつ等の身体の音か！？」
「耳良すぎるだろ！　というか何匹居やがる！？」
「数えるな！　数える暇があるならたたk『アッシマーッ！！』来るぞ！！」

２３．突入！遭遇！戦闘へ！（後書き）

とりあえず遺跡探索開始……した筈なのに話が進まない。

４５．「ガギンッ、アイアンアッシマーが現われた！」

アイアンアッシマー

ダンジョンに生息している。

ＨＰ５５０

２４．戦闘、回復、違和感？（前書き）

やっぱり話が進まない！

２４．戦闘、回復、違和感？

腰に差した鞘からガーベラ・ストレートを抜刀し、目の前に迫るアイアンアッシマーを叩き切る。

――――一匹目

叩き切ったアイアンアッシマーの後ろから二体目が此方を押し潰そうと迫ってくる。

握っていたガーベラ・ストレートから手を離し、急ぎザックの中からメガグランチャーを取り出して発砲。

弾丸が放たれる轟音と同時に、迫ってきていたアイアンアッシマーが超威力の弾丸を胸の真ん中に食らって後ろに仰け反り、自重に引かれて引っ繰り返る。

――――二匹目

死角にいた一体が、そこそこ素早い動きで拳を振りかぶりながら接近。

振り返りながらメガグランチャーの銃身で思い切りぶん殴る。が、力不足なのか僅かにその体勢を崩すに留まる。

崩した体勢を整え再び迫ろうとするアイアンアッシマーに銃身を向け、至近距離なのも構い無しに引き金を引き、その金属で出来た身体を吹っ飛ばす。

――――三匹目

こうなれば数で押せとばかりに此方の周りを取り囲み、そして一斉に襲いかかるアイアンアッシマー達。

正面の一体にメガグランチャーをあらん限りの怒りと恨みを込めて投擲、色々な思いが詰まった材質不明の晶霊銃は敵の頭部を見事に打ち砕き、その動きを沈黙させる。

ザックから適当な剣を取り出し、そこからおまけとばかりに沈黙したアイアンアッシマーの身体を踏み台にし天井まで飛び上がり、近くの壁に剣を突き立ててそのままぶら下がる。

下から「お前も戦え！」と文句を言ってる奴（多分ソードカラミティ）がいるが、気にせずに詠唱を開始。

ぶら下がったまま詠唱をするその姿に嫌な予感を感じたのか、青い顔したゴブリン君がソードカラミティを持ち上げてアイアンアッシマーの包囲を力ずくで突破する。

二人が包囲から脱出したことを確認し、詠唱の終った術を届く筈のない俺に向かって手を伸ばしているアイアンアッシマー達に向かって開放する。

「纏めて死にさらせ！　ビッグバン！！」

そして、アイアンアッシマーの群れの中心に生まれた魔力の光が爆ぜ、爆音と共に激しい光が遺跡の通路を満たした。

２４．戦闘、回復、違和感？

どうも、騎士アストレイです。

遺跡の奥から現われたアイアンアッシマーの群れをビックバンで全滅させ、手放したガーベラ・ストレートとぶん投げたメガグランチャーを回収していたら戻ってきたソードカラミティにどつかれました。

理不尽です。

「お前は俺達を殺す気か！？」

「いやいや、そんなつもりは微塵も無いんだが……何で怒ってるのさ？」

群れから離れた所を狙って放ったから巻き込んではいないと思うんだが……

「あー、大変言い難いんすけど……さっきの呪文の爆発の余波がこっちまで来たんすよ…」

意味が分からないという顔をしていた俺に、ゴブリン君が気まずそうな顔で告げてきた。

「おお！」

そういえば余波とか気にしていなかったな。

今までもゴブリン君がタフだから普通に巻き込んでたし（今はやってないけど）。

二人の身体を良く見てみると、若干焦げてるような感じがする。

「おお！じゃねーよ！？　冗談抜きで死ぬかと思ったわ！」

「あはは……いや、本当に悪い」

怒るソードカラミティに軽く謝罪し、ザックからアップルグミを取り出して二人に手渡す。

「…何だこれ？」
「お菓子っすか？」

手渡されたそれを見て首を傾げる二人。
まあ、グミは見た感じお菓子にしか見えないから無理も無い。

「お菓子にしか見えないけど、れっきとした薬だからな？」
「……薬ぃ？　どうみたってお菓子だろ」
「しかも美味しそうな」
「……いいから黙って食わんかい！」

信じない二人の口に、無理やりグミをねじ込む。そして次の瞬間、二人の身体にできた傷が癒えていく。

「…嘘だろ？　本当に治っちまった」
「……相変わらず変な物持ってますね」
「変な物言うな！　で、これからどうするんだ？」

グミの効果に驚く二人に、これからどうするのかを聞いてみる。

「俺としてはこの先に進んでみたいんだが……」
「ゴブリン君は？」
「……俺としてはアイアンアッシマーの巣まで行きたいんすけど」
「巣？」

巣といえばあの巣だろうか？

「何で巣まで行きたいんだ？　あいつらは住処のダンジョンからは滅多に出ないから全滅させる必要はないんだが」

そう言うソードカラミティに対して、そうじゃないと首を振るゴブリン君。

「アニキたちは気づかなかったかもしれませんが、さっきのアイアンアッシマーは妙な感じがしたんですよ」

「…妙な感じ？」

「へい、アイアンアッシマーは俺達ゴブリンザクと同じである程度知恵がついたら言葉を話すんですが…さっきの連中は一言も話さなかったでしょ？」

そういえばアッシマーしか言ってなかった気が――――

「アッシマーは違うのか？」

「違いますよ！　アニキとあった頃の俺が『ザク』しか言えなかったみたいなもんですよ！」

ふむ、つまり――――

「あれだけ居たのに一匹も言葉を話せるのが居なかったのが変だって言いたいのか？」

「そうっすよ！　知恵なんて生きてれば勝手につく物なのに、さっきの奴等は一匹も話せるやつが居ないどころか戦い方もおかしかった！

普通だったら逃げた俺達を追うはずなのに届く筈のないアニキを狙うなんておかしすぎますよ！！」

「……言われてみれば確かに変だ。

言葉云々はともかく、壁にぶら下がってたアストレイを狙うならその辺の瓦礫でも投げつければいいことだしな」

辺りに散らばる瓦礫を見ながらそう言うソードカラミティ。

まあ、詠唱中の俺は身動き取れないからそれを投げつけるだけで事足りるけど……まさか、余裕があれば俺に投げつける気だったんじゃなかろうなコイツ。

「まあ、どちらにせよ奥まで行ってみれば分かることだな」

そう言って歩き出そうとする俺を変な目で見る二人。

「……何だよその目は？」

「い、いや、あんだけ帰りたがってたのにと思ってさ…」

「あのな、二人が奥に行こうとしてるのに俺だけ帰る訳ないだろうが」

いくら俺でもそんな空気読まないことはしないぞ、多分。

「…ま、何にせよ全員奥まで行くのは賛成ってことだな？」

「さっきからそう言ってるだろうが」

「アニキに同じく」

そして俺達三人は顔を見合わせ、頷くように歩を進める。

（…まあ、奥に何があるにせよ進めば何か面白いものがあるだろうな）

（…さっきのアイアンアッシマーからは俺達（魔物）特有の気配が無かった、一体何があるってんだ？）

（これだったら宝の山分けじゃなくて、報酬請求しとくべきだった

なー……はあ）

そんな風に三者三様のことを考えて、アストレイ達は薄暗い遺跡の奥へと向かって歩き出したのだった。

この遺跡の奥に何があるのか？　アイアンアッシマーの謎とは？

……それはまだ誰にも分からない。

２４．戦闘、回復、違和感？（後書き）

グミって見た目お菓子ですよね。
さて続き書くか。

２５．撃退、喧嘩、制裁、嫌悪。（前書き）

弟から財布の中身を全部奪ってスッキリしたので開き直って投稿。

25．撃退、喧嘩、制裁、嫌悪。

「邪魔すんな！！」

怒声と共にゴブリン君の（割と）手加減した一撃がアイアンアッシマーの身体に叩きこまれる。

体重の十分に乗った一撃はアイアンアッシマーの意識を刈り取り、意識を失ったその体は重力に引かれて床に沈む。

「ったく、一体どれだけの数がいるってんだ？」

ソードカラミティが愚痴りながらも周囲にいたアイアンアッシマーの群れを鞘に収めたままの剣でどついて気絶させていく。

「……そりゃ…お前、数えるのが馬鹿らしくなるくらいじゃね？そもそもこいつらの住処なんだし」

「テメーもぶら下がってないで戦え！」

例によって壁に突き立てた槍にぶら下がって傍観している俺に向かって、ソードカラミティが戦うように言ってくるが俺にそんな気は無い！

「だが断る！！　こいつ等みたいな重量級とは相性が悪いからお前等に全部任す！！」

「ど・こ・が・相性が悪いだ！？　最初にこいつ等と遭遇した時あっさりと蹴散らしてたじゃねーか！！　楽してねーで降りて来い！！」

「うぉっ！！　い、石投げんな！？」

２５．撃退、喧嘩、制裁、嫌悪。

どうも、騎士アストレイです。
最初にアイアンアッシマーの群れと戦って以降、遭遇したアイアンアッシマー達を気絶させながら進んでいるのですが……異常なくらいに数がいるので困ってます。
いやー、角を曲がれば出くわすし、埃が落ちてきたかと思えば天井（恐らく外から見て埋まってる部分）をぶち抜いて落ちてくるし、一息入れようと思ったら壁と床ぶち抜いて現われるし！！
お前らはどこのシュ〇ちゃんだと言いたいねホント。

「…しかし、ここまで進んできて何だが、この遺跡が大きいにしてもこの数は異常だな」
「そうなのか？」

数が異常だと言うソードカラミティの言葉に首を傾げる俺。

「ソードカラミティの言う通りっすよ、今まで出くわした奴等全部を数えてたわけじゃないっすが、多分二百はいってますよ」
「数えるだけ無駄だろうなーって思ってたから数えなかったけど……マジで？」
「割とマジで」

ゴブリン君の言葉に驚く俺とソードカラミティ。

……というかお前も数えてなかったんかい。

「自然に生まれたとしてもこの数はおかしいっすよ、住処のこともあるけど何より食い物が無いし…」
「……ていうかこいつ等何食って生きてんだ？」
「あ、それ俺も気になってた」

カードダスにはダンジョンに生息しているとしか書かれてなかったし、漫画ではそういう詳しい事は書かれないからなー。

「多分石の類だとおもいますよ？　身体も金属質ｄ『アッシマーッ！！』ってまた来た！？」
「だーっ！！　いい加減にしやがれ！！」
「よし、俺は壁に張り付いて待ｋ「お前も戦え！！」…戦えばいいんだろ？　戦えば！！」

通路の向こうから現われたアイアンアッシマーの群れを確認し、即座に詠唱を終える。

そして――――

『アッシ「お前等の相手なんて一々していられるか！トラクタービーム！」マー！？』

頭上に発生した力場により天井近くまで持ち上げられ反転、効果が切れると同時に重力に従って落下し、彼等本来の重さもあって見事に頭から床に突き刺さったのだった。

「おー、見事に突き刺さったな」
「……アニキ、こんなに楽に無力化できるなら最初から戦って下さいよ」

「面倒だからやだ！！」
「少しは働けや！　このヘタレが！！」
「へ、ヘタレって言うな！！」
「はー、喧嘩してないで次が来る前に進みましょうよ…」
「……そうだな、ヘタレを苛めるのはいつだって出来るんだし」
「ヘタレヘタレとしつこいわ！！」
「うるせーよヘタレ、事情を聞いてみれば逃げたお前が悪いんじゃねーか」
「やかましい！！」
「……はあ、お前等いい加減にしやがれっ！！！」

口げんかを始めた俺とソードカラミティはその後、珍しくマジ切れしたゴブリン君に殴られました。
お陰で人（今はMS族だけど）は殴られると星が見えるというのは本当だと身を持って知ることとなりました。全くもって嬉しくもありません。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
・

「痛～！　まだヒリヒリする！！」
「お前のは自業自得だろうが！！　俺は完全なとばっちり…」
「……また喰らいたいか？」
「「いえ、結構です！！」」

指を鳴らして俺とソードカラミティを睨むゴブリン君。

正直、イライラしている彼を敵に回すくらいならアイアンアッシマーと戦っていた方がまだマシというものである。

「しかし、この遺跡はどうなってんだ？　埋もれてる部分を含めても大きいのは分かってたけど、この広さは異常だ」

ソードカラミティが遺跡の広さに愚痴り始めるが、その気持ちは分からないでもない。

遺跡に入ってから大体数時間は経っているというのに、未だに最深部までたどりつけていないのだ。

一応迷わないように壁に目印を付けてはいるが、広すぎてその目印を見つけられるかも危ういほどだ。

その後、性懲りもなく現われるアイアンアッシマーを殺さずに撃退していた時、俺は妙なことに気づく。

それに気づいたのは、例によって出現したアイアンアッシマー達をボコって床に沈めた時だった。

「…ん？」

「……どうした？」

訝しむソードカラミティを尻目に、俺は床に倒れたままのアイアンアッシマーの一匹に近づく。

「……なあゴブリン君、聞きたいことがあるんだけど」

「何すか……って、何だこりゃ！？」

俺は動かないアイアンアッシマーから目を離さずにゴブリン君を呼び、疑問を口にする。

「俺は魔物のことは名前を知ってるくらいでそれほど詳しいわけじゃないんだけどさ……こいつ等の傷ってこんなに早く治るものなのか？」

俺達の前で倒れている一匹、そいつはゴブリン君にバハムートティアの一撃を貰って手傷を負っていたのだが……もの凄い早さで治癒していっているのだ。

「無い無い無い！！　いくら身体が金属で覆われてるといってもこいつも魔物の一種ですよ！？

この自己治癒の早さありえない！！はっきり言って異常だ！！」

ゴブリン君の驚きようを見て、俺は一つの確信を得る。

このアイアンアッシマーは自然発生したものじゃない！　明らかに何者かの手が加えられている！！

俺は即座にその考えを二人に打ち明け、俺の考えを聞いた二人は難しい顔をして唸り声を上げる。

「人の手で魔物に手を加える……そんなことが出来るのか？」

「出来るさ、手を加えるどころか全く新しい魔物を作ることだって出来る」

ソードカラミティの疑問にたいして、俺は即座に答えを返す。

実際、原作ではジークジオンが兵器としてジオダンテを、ザビロニア帝国を初めとした敵勢力もまた複数の生命体を融合させる事で誕生する人造モンスターの魔道技術を所有しているのだ。

それを考えれば暗黒卿や覇界神という最悪な連中が活動していたこの時代に似たような技術、いやそれらのオリジナルと言える技術があっても不思議ではないのだ。

「おいおいマジか？　俺達はあまり苦戦せずに倒せるけどよ……こんなのが外に出たりしたら大惨事だぜ！？」

「おまけにこんな技術を持ってる奴が善人なんてまずあり得ないしな」

俺も賢者の石を錬成したりするくらいに外道だが、こいつ等の生みの親ほど堕ちちゃいないと信じたい。

まあ、どっちにしろ――――

「先に進めばわかることかな？」

25．撃退、喧嘩、制裁、嫌悪。（後書き）

今まで出会ったアイアンアッシマーは実はアイアンアッシマー（改）だったんだよ！？

……うん、読んでくれた皆さんも予想してはいたんじゃないかと思ったりしてます。

２６．現われた敵と強すぎる仲間達（前書き）

一段落してようやく書けたので投稿。

26．現われた敵と強すぎる仲間達

遺跡の最深部を目指して数時間後、最深部に到達した俺達がそこで見たものは、広い空間一杯に配置された水槽とその中で培養されているアイアンアッシマー達と思われる物体。

ここまで揃えば遺跡に存在している彼等が野生の魔物ではないことは明白である。

当然、下級とはいえ魔物の端くれであるゴブリン君がその光景に怒りを抑えきれずに暴れようとし、俺とソードカラミティが宥めようとした瞬間――――俺達の背後に殺気が膨れ上がった。

「ソードカラミティ！　避けろ！」

殺気（それ）に気づいた俺が発した警告に従い、ソードカラミティは急いで横に跳ぶ。

先程まで彼が立っていた空間をＭＳ族の肉体を容易く貫けるほどの威力を持っているだろうと思わせる熱線が駆け抜ける。

その熱線はたなびくソードカラミティのマントを貫き、斜線上にあったアイアンアッシマーの入った水槽の一つを打ち砕いた。

俺達は背後を振り向き、それを放った存在を見る。

そこに居たのは――――

２６．現われた敵と強すぎる仲間達

「…外したか、遺跡のアイアンアッシマー共を退けてここまで侵入してくるだけのことはある」

そこには法衣を纏い、此方に杖を向けているＭＳ族の姿があった。

「……手前、ここの主か？」

怒りのあまり逆に冷静になったのか、静かな口調でゴブリン君が呟く。

「左様、我が名はゲーマルク！
この世界の真の支配者（スダ・ドアカ・ワールド）であるジークジオン様に仕える魔道士なり！」

ゴブリン君の呟きに対して、己の名を誇るように名乗りを上げるゲーマルク。

俺はその名を聞いて、覚えている知識の中から関係するものを引っ張り出す。

魔道士ゲーマルク、原作では本拠地『ティターンの魔塔』の最上階を守護する呪術士ビグザムの部下。
『梟の杖』を所有する『法術士ニュー』には劣るがその実力は高く、『ジオン三魔団』の紅一点である『呪術士キュベレイ』を上回る程。

……余談ではあるが、何故ジークジオンは己の居城を守る彼ではなく、格下と思われるジオン三魔団に梟の杖を含んだ三つの武具を授けたのかは不明である。

「またジークジオンかよ…」
「…またって、アイツの主のこと知ってるのか？」
「……一応はな」

ソードカラミティの疑問に対して、俺は嫌気の混じった声で言葉を返す。

……つーか、ゼノンマンサといい目の前の奴（ゲーマルク）といい、何で本拠地を守っている奴等がこっちの世界に居るんだよ！？
以前ゼノンマンサが愚痴っていた通り、ジークジオンはそんなに人手不足だってのか！！

頭を抱える俺と油断無く構えるゴブリン君とソードカラミティ。
しかし、目の前に立つゲーマルクは杖を構えたまま動かず、何かを確認するように此方を睨む。

その視線の先にいるのは……俺とゴブリン君？

「普通では考えられない巨体のゴブリンザクに黒い鎧のガンダム族……成る程！」

俺とゴブリン君を一通り眺め、何かを納得したのかのような様子で声を上げるゲーマルク。

コイツとは初対面の筈だが……もしかして何かを知っているのか！？

疑問と共に脳裏に浮かぶのは、殺さずに簀巻きにして『穴』に放り込んだゼノンマンサの姿。

「…くっくっく、そうかそうか！　ゼノンマンサ様の報告にあったという妙な連中は貴様等か！！」

俺の考えを裏付けるかのように、ゲーマルクは笑いながら杖を構えなおす。

「ゼノンマンサ？　確か二年前に『ナラカの谷』で戦った奴がそんな名前だったような？」

「ゴブリン君、それぐらいは覚えてようぜ！？」

「なあ、話が見えてこないんだが？」

「ああ、お前は知らなかったけ？　ちょっと前にこの地方の村や集落が魔物に襲われたのは知ってるか？」

「噂くらいはな、それが目の前のアイツと関係してるのか？」

噂くらい？

ソードカラミティは違う地方から来たのか？今度聞いてみようっと。

「うん、その襲撃を指揮していたのがアイツの上司にあたる騎士ゼノンマンサ。
馬鹿みたいに強くて死ぬかと思った」
「……そんなに？」
「おう、まともに戦ってたら絶対に勝てないと思えるくらいに化物だ」
「マジで！？」
「マジで」

しかし、向こうに情報が漏れたってことはジークジオンが此方のことを知ったということである。
漫画やアニメでは平気で部下を使い捨てる上にキレたら何をしてくるか分からない奴が此方を知った以上、俺達の身の安全のためにもこれからはジオン族の連中と敵対したら確実にトドメを刺しておこう。

「……貴様等、私を前にしていい度胸だな？」
「「「あ」」」

無視されたことが気にくわなかったのか、怒りに声を震わせるゲーマルク。
やべー、すっかり忘れてた（汗）

「ふん、まあいい。
どの道この場所を見られたからには死んで貰うのだからな！！」
その言葉と共に部屋に配置された水槽が爆ぜ、中にいたアイアンアッシマー達が這い出す。
薄々感づいてはいたが、こいつ等の製作者はやっぱり奴か！？

「来るぞ！　今回はサボるなよ！」
「流石にサボらねーよ！　ゴブリン君、行けるか！？」
「無論！　アイアンアッシマー達を作ったのがあの野郎（ゲーマルク）だっていうなら生かしちゃおけねぇ！」
「それなんだけど……アイツを殺すな」
「……何でですか？」
「ここで何を研究していたのか気になってさ、その後でなら殺って良し！」
「っち！　わかりやしたよ」

「さぁ！行けいアイアンアッシマー共！」
ゲーマルクの号令と共に、アイアンアッシマー達が俺達を殺すべく突っ込んでくる。
それを迎え撃つべく武器を構えるソードカラミティとゴブリン君、その後ろに回って詠唱を始める俺。
かくして、戦いの火蓋が切って落とされた。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

『アッシ「毎度お馴染みのトラクタービーム！」マァアアアアッ！？』

此方へと突っ込んできたアイアンアッシマー達が、トラクタービームの効果によって持ち上げられ、床に突き刺さり戦闘不能となる。
それに驚いたのか、足を止めたアイアンアッシマー達をゴブリン君の斧とソードカラミティの双剣が襲う。

「オラァ！！」

手加減せずに振り回される斧が迫るアイアンアッシマー達を蹴散らす。
ここまでの道のりでは殺さぬように加減されていたが、今回は殺す気１００％で振るわれている為か、容赦というものが全く無い。

「オオオオオオオッ！！」

ゴブリン君が放つ攻撃、その全てが必殺の威力を持つ。
ＭＳ族を上回る防御力を持つアイアンアッシマー達だったが、それを鼻で笑うかのような破壊力を持つ攻撃が相手では分が悪く、次々に倒されその数を減らしていく。

「…おいおい、本気を出してないのは分かってたが……マジか？」

ゴブリン君の戦う姿を見て、ソードカラミティは呆れたように呟く。

それを隙と見たのか、背後からアイアンアッシマーが襲い掛かる。

「じゃ、俺も少し本気を出すとするかねっ！」

振り返りながら背後の敵を斬り捨て、両手に握る剣に力を込める。

「はあああああッ……」

ソードカラミティが力を込めて双剣を交差するように構え同時に、その手に握られた剣に赤い光が灯る。

「喰らいな！マイダスメッサー！」

ソードカラミティが双剣を振りぬくと同時に赤い光が前方から迫ってくる敵に向かって放たれ、その全てを切り裂く！

———おいおい！？　ＳＥＥＤのマイダスメッサーはそんなふざけた威力はないぞ！？

放たれた技の威力に驚いてる俺を尻目に、握っていた双剣を床に突き刺し、迫り来る敵を睨みつけたソードカラミティは腰溜めに構え、次の瞬間———

「喰らえ！！スキュラァアアアッ！！」

ソードカラミティの胸部に埋まっている宝玉——貴石——から放たれた赤い光が前方にいたアイアンアッシマー達を飲み込んだのだった。

ソードカラミティの放った攻撃で生まれた爆煙を眺めながら、俺はこう考える。

――――――もしかしなくても、この三人の中で最弱なのは俺ではなかろうか？

２６．現われた敵と強すぎる仲間達（後書き）

しかし、何でジークジオンは本拠地を守る親衛隊ではなくジオン三魔団に三つの武具を渡したんでしょうね？
しかも短所を補う形で持ってるうえに連携も取らないもんだからアルガス騎士団に横取りされてるし。

４６．「さぁ！行けいアイアンアッシマー共！」
魔道士ゲーマルク
遺跡の奥に潜むジオン族の魔道士。
ＭＰ９００

27．ショボイお宝と魔道士の研究と。（前書き）

遺跡探索終了！

次回から旅を再開します。

27．ショボイお宝と魔道士の研究と。

どうも、騎士アストレイです。
怒りに燃えるゴブリン君と本気を出したソードカラミティの二人の活躍によってアイアンアッシマーの大群が全滅してから三十分後、俺とソードカラミティの二人は奥にあった魔道士ゲーマルクの私室と思われる部屋を物色しております。

「…ちっ、ここまで苦労した割にはシケてんなーおい」

まるで悪役が言うようなセリフを吐き、部屋を漁って出てきた物を袋に詰めるソードカラミティ。

「そう言うなって、タダ働きよりはいいだろ？」
「そーだけどよ」

ソードカラミティが愚痴ってるように、散々苦労した割には金目の物が殆んどありません。
ぶっちゃけショボイの一言です。

あ、ちなみにこの部屋で手に入れた金品の取り分はソードカラミティが7で俺とゴブリン君が3だったりします。
ゴブリン君は食える分の金があればいいと考えだし、俺は俺でザックから適当な武具や食材を出して金に換えればいい為こうなりました。

そもそも俺、この遺跡に入ってからさぼってばかりで役に立ってないしね！

……もし、次に同じことがあったら真面目に働こうと本気で考えてます。

「で、何時までほっとく気だよ？」

「何を？」

ソードカラミティは宝を詰めた袋を背負い、俺は何時ものようにザックを背負う。

「…何をって、アレだよ、アレ」

ソードカラミティが指さす方に目をやると、

そこでは一匹のゴブリンザクが一人の法衣を纏ったＭＳ族をボコボコにしているという、この世界の住人では信じられない光景が。

「オラッ！　この程度で済むと思ってるんじゃねーだろうなぁっ！！」

「ひ、ひぃいいい！？　た、助けてぇえええっ！！」

２７．ショボイお宝と魔道士の研究と。

本気を出したゴブリン君とソードカラミティが放った砲撃魔法『スキュラ』によってアイアンアッシマーの大群を全滅させられ、追い詰められたゲーマルクは懐より取り出した魔法道具（マジックアイテム）ビットを巧みに使い此方を翻弄してきたのだが……

「アイテムなぞ使ってんじゃねぇぇぇ！！！！」
「ぎゃぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！」

と、どこぞの狂戦士のような台詞を叫びながら突撃してくるゴブリン君によって善戦空しく敗北。
その後、ゴブリン君を交えたＯＨＡＮＡＳＩを終えて現在に至る訳である。

「た、頼む！！　見てないでこのゴブリンザクを止めてくれぇぇぇぇ！？」

最初に現われた時に放っていた殺気は何処へいったのやら、ゲーマルクが俺とソードカラミティに助けを求めているがそもそも助ける義理はない。
ゴブリン君も殺す気は無いとおｍ「死ねぇぇぇぇぇっ！！」……多分無いと思うので放置である。

ゲーマルクの悲鳴とゴブリン君の怒声を聞き流しつつ、俺は瓦礫を椅子代わりにしつつ手に入れたゲーマルクの研究日誌に目を通す。
「……流石は闇の皇帝の配下、随分と悪趣味なものを研究してることで…」

それが奴の研究日誌を読んで出てきた俺の感想だった。
「悪趣味ってお前……、まあこの場所を見ればまともな研究してるとは思わないけどよ」

そう言って、ソードカラミティはアイアンアッシマー達が入っていた水槽に目をやる。

さて、何故ジークジオンの本拠地である『ムーア界』に居る筈の魔道士ゲーマルクがこんな遺跡に潜んで研究等をしていたのか、その理由はこの日誌に記されていた。

ゲーマルクの研究日誌によると、ジークジオンが本拠地としているムーア界には、此方に存在する機兵のような大型の兵器を製造できるだけの資源が無いうえに製造技術も無く、魔物を生み出して兵力としているらしい。

しかし、此方側の世界の支配を望むジークジオンは現状の兵力だけでは戦力不足と判断し、配下の『呪術師ビグザム』に一つの命令を下す。

曰く、「向こうの世界に存在する兵器を超える魔物を製造せよ」と。

流石のビグザムもこの命令を下された時には主の正気を疑った。

人工的な手段で生み出されているとはいえ魔物は歴とした生物である。

簡単に生み出せる筈も無く、それを行えるだけの魔力を持っているであろう主は玉座にすわり、挙句の果てには昼寝を始める始末。

悩みに悩んだビグザムは己の配下であるゲーマルクを此方に送った、というのがゲーマルクがこの遺跡で研究をしていた経緯のようだ。

で、送られたゲーマルクがこの遺跡で始めた研究、それは魔物の改造である。

当初は向こうで生み出されている魔物の強化を試みていたようだ

が上手くいかず、途方にくれていた時にこの遺跡に巣くっていたアイアンアッシマーを発見、ＭＳ族を凌ぐ頑丈さに目を付けた奴は群ごと捕獲して改造、その結果できたのが俺達が戦ったアイアンアッシマー（改）である。

もっとも、再生力を上げた代償にお頭が弱くなったのでゲーマルク自身からしてみれば失敗作だが、それでも少しずつ学習して賢くはなるので遺跡に放して放置していたらしいが。

ここまでの研究も読んでいて胸糞悪くなるがここからが問題である。

魔物の改造の研究が上手くいかなかったゲーマルクは、己の研究を『改造』から『合体』へと切り替えようとしていたらしい。

数多くの魔物から優れた部品を集めてそれらを組み替えることにより、機兵を凌ぐ魔物を生み出すという研究で、研究日誌に書かれている完成予想図として描かれている魔物を見た瞬間、俺は運が良かったと本気で思った。

そこにはＭＳのジ・Ｏの頭部に巨大な魔物の顔のような胴体、脚部からは触手を生やしている不気味な魔物が描かれており、原作で『アルガス騎士団』と騎士アムロによって倒された『魔獣ジオダンテ』の姿とほぼ同じである。

「……そんなにやばいのか？　そのジオダンテっていう魔物は」

「やばい、途轍もなくやばい」

魔獣ジオダンテ、それは第一章に登場するムンゾ帝国の王の間に置かれている玉座が、コンスコン王とユイリィ姫を飲み込んで変化

したものである。
騎士バウの言葉によると戦う為に生み出された破壊の悪魔。
目からは破壊力抜群の破壊光線を発射し、胸部にある口は魔空界という異空間に繋がっているうえに高い再生力まで備えているという、以前遭遇したティラノザク並の化物である。

……俺が思うに、ジークジオンはマッドゴーレムを量産するより、この化物を量産した方が良かったのではないかと思ってたりする。

「…まぁ、その化物はまだ造られていないんだろ？　なら良かったじゃないか」

ソードカラミティは気楽にそう言うが、ゲーマルクはこの研究の事を既に報告してしまったらしいので、遠い未来では原作通りにジオダンテが誕生するだろうが現時点での俺にはどうすることも出来ないのでとりあえずは置いておく事にする。

そもそも『導きのハープ』が無い以上はムーア界に行けないしね！！

――――そういえば、気になることが一つ。

「なあ、疑問に思ったことがあるんだが…」
「ん？」
「お前はここの噂を誰に聞いたんだ？」
「あれ、言ってなかったか？」
「聞いてねーよ！　ゲーマルクも侵入者のことは知らないって言っ

てるし、……もしかしてガセネタ掴まされたんじゃないのか？」
「まあ、その話は遺跡（ここ）から出てからにしようぜ？　正直風呂にでも入ってスッキリしたい…」
「それもそうだな……おーい！　帰るぞー！！」
ソードカラミティの意見に賛成した俺は、未だ怒りが冷めずにゲーマルクをボコるゴブリン君に声をかける。
二時間後、ゲーマルクをボコって気が晴れたゴブリン君を連れた俺達はこの遺跡を後にするのだった。
なお、ゴブリン君によってボコボコにされたゲーマルクがどうなったかというと――――

「助けてぇぇえええええ！？」
「■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■！！」

杖や法衣等の装備を剥ぎ取り、［森の主］の縄張りに放置してきた。
運が良ければ逃げ切れるだろうし別に食われたとしても俺達に害がある訳では無い、どちらにせよ俺達に害は無い訳である。
その後聞いた風の噂によれば、縄張りからは無事に逃げられたら

しいが恐怖のあまりに記憶を失ったらしい。

――――まあ、何はともあれ。取り敢えずはめでたしということで。

27．ショボイお宝と魔道士の研究と。（後書き）

触手といいデカイ口といい、ジオダンテってやっぱりビオラ〇テがモデルなんですかね？

２８．楽しい旅と久しぶりの鬼ごっこと。（前書き）

だ、だれか、私に有給を！！

28．楽しい旅と久しぶりの鬼ごっこと。

どうも、騎士アストレイです。
最近寒くなってきましたが、皆様はお元気でしょうか？

「だ～！！　あの野郎何時まで追って来る気だよ！？」
「知るかっ！？　無駄口叩いてる暇があるなら足を動かせ！！」
この世界に転生（スダ・ドアカ・ワールド）してから五年、ゾンビ機兵や怪獣王（ティラノザク）に追い回されたり、ジークジオンの尖兵と戦ったりメタスちゃんに告白されたりと色々ありました。

「アストレイ！　現実逃避してる暇があったら何とかしろ！！」
「アニキ！　いい加減こっちに戻ってきてくれ！？」

そう、本当に色々あったのですが……今度こそ終ったかもしれません。

……何故かって？　それは――――

『フハハハハッ！！　逃げるんじゃねえよ！！踏み潰してやらぁっ！！』

――――後ろから機兵が追いかけて来てるんだよ！！しかも殺す気満々で！！

28．楽しい旅と久しぶりの鬼ごっこと。

前回、魔道士ゲーマルクとアイアンアッシマーが潜む遺跡を制覇し、ゲーマルクを［森の主］の縄張りに放り出した俺達一行。

その後、メタスちゃんの手掛かりを求めて次の街を目指して旅に出ようとしたのだが……

「へ？　俺達について来る？」

「その積もりなんだが……駄目か？」

出発前日の宿屋で食事を取っている時、その旅にソードカラミティが同行することを申し出てきたのだ。

「いや、駄目とかじゃないけど……」

「じゃあ、このまま付いて行かせて貰うぜ」

「……一応聞いとくけど、何が目的なんだ？」

数日間、行動を共にして何となく彼の人柄は把握したが、それでも味方を巻き込むような呪文をぶっ放す俺と同行しようとする理由が全く分からないのだ。

疑いの目を向ける俺に対し、彼は面白そうに俺とゴブリン君を眺め、そして――――

「目的？　そんなもん面白そうだからに決まってるだろ」

「……はい？」

――――俺の疑問に対して、目の前の剣士はあっさりと答えたのだった。

「え～と、どういうこと？」
「生憎だがな、俺にはお前が疑ってるような目的なんぞは無いのさ。
今回の事だって噂で聞いたお前等の話が本当かどうか確かめるついでだったしな」

まあ、噂通りのヘタレだったのは驚いたがな！と、軽快に笑うソードカラミティを見て、俺はあっさりと警戒を解く。

「……つまり、ただの面白いもの見たさってことか？」
「おうよ！」

その様子を見て、呆れたような目でソードカラミティを見るゴブリン君。

「あ、本格的にやばいと思ったらお前等見捨てて逃げるからな」
「本人達を前にしてそれを言うか！？」
「というか誰がヘタレだ！！」

と、ソードカラミティが同行することが決まり、俺が何時ものようにヘタレ発言に噛み付いて喧嘩になった為宿屋を追い出されたりとあったがまあ、些細な問題なのでおいて置こうと思う。

その後、本当に色んなことがあった。

「……」ｏｒｔ
「…あー、元気出せよ」
「きっと見つかりますって！……多分」

たどり着いた次の街でメタスちゃんの手掛かりが無く、柄にも無く落ち込んだり、

「「「「逃がすなぁあああああああっ！！」」」」

「何やってんだよお前！？」

「し、仕方ないだろ！？　あんな可愛い子を口説かないのは男の恥だ！！」

「その台詞を後ろの皆さんの前で言って来い！！」

「あ、アニキ！？　前からも来ましたよ！？」

ソードカラミティの馬鹿が街の権力者の娘に手を出し、怖い顔した皆さんから追いまわされたり、

「くっくっく、ようやく見つけたぞ！！」

「……誰？」

「ソードカラミティの知り合いか？」

「こんな変人知らねーぞ」

「知らなくても無理は無い！だが冥途の土産に教えておいてやろう！！」

「……無視しちゃ駄目かな？」

「「駄目じゃね？」」

「我はジークジオン様に仕えし騎士の一ｒ「猛襲剣！」グハッ！？」

ジークジオンが送ったと見られる刺客を撃退したり、

「フハハハハ！！　倍プッシュだ！！」

「す、凄い！！　これで十二連勝だ！！」

「お、お客さん、これ以上はどうか勘弁を！！」
「だが断る！！店のコイン全部持って来ーい！！」
「いやぁあああああ！？」

「……で、あの馬鹿どんなイカサマやってんだ？」
「さあ？」

タイムストップを駆使し、街中のカジノを軒並み潰して歩いたりと、それなりに楽しみながら旅を続けていた、そんなある日のこと。

「……」
「……」
「……」
『……』

次の街を目指し、人通りのない道を歩いていた俺達の前に、『それ』は何の前触れも無く現われた。

『それ』は、俺達の行く手を遮るようにして、道のど真ん中に立っていた。

「……なあ、俺の目がおかしくなったんだろうか？　何か目の前に馬鹿でかいのが仁王立ちしてる気がするんだが」
「……安心しろよ、ちゃんと俺達にも見えてるから」
「……何でこんな所に機兵がいるんだよ？」

そう、どういう訳かは知らないが俺達の目の前には機兵がいるのだ。

「これは……ドムか？」
「うん、紛れもないドムだな」
目の前に立つ機兵を見て、ソードカラミティが見たまんまの感想を口し、俺もその感想に同意する。

目の前の機兵は見た感じは戦士ドムと瓜二つである。が、どういう訳か肩や肘、膝などにドリルが付いている上に両腕が妙に大きく、武器と思われる戦斧を装備している等と、何処かで見た気がする装備をしていたりする。

「何か分かりませんか？こういうのはアニキの専門だろ？」
「お、何だ？　このデカブツはお前絡みか？」
「俺な訳ないだろ。ソードカラミティ君、怒らないから正直に言いなさい。今度はどこのお嬢さんに手を出したのかね？」
「成る程。ってことはこの機兵（デカブツ）はソードカラミティを殺る為に送られた刺客……」
「オイオイオイ！？　少し口説いただけで刺客が送られるような女に手を出した覚えは無いぞ！？」
「嘘つくな！！　お前の好みくらい把握ｓ『――――いい加減喋ってもいいか？』喋った！？」

日頃の仕返しと言わんばかりにソードカラミティを弄る俺達に対し、目の前の機兵から声が発せられる。

「お、やっぱり誰か乗ってたか」
『ふん、気づいていたか」
「いや、単眼（モノアイ）が光ってたし」

機兵って操手が搭乗してると目が光るんだよね。

『え、マジで？』
「マジで」
……しかし、何処かで聞いた声だな。
もしかして中の操手は俺の知ってる奴か？
『ま、まあ、気を取り直して……コホン！　騎士アストレイ！俺の事を覚えているか！？』
軽く咳払いをし、何故か俺を指さす機兵ドム（仮）。
「何だ、結局アストレイの客か」
「……アニキ、機兵まで持ち出すような相手に何したんですか？」
「いや、覚えが無いんだけど…『な、覚えてないだと！？』うん、全く覚えが無い」
俺の発言にショックを受けたのか、
目の前のドム（仮）は巨大な機兵の身でありながら器用にもｏｒｔの姿勢をとる。
「……おーい？」
ショックを受けたまま動かない機兵に、とりあえず声をかけてみるも全く反応が無い。
「……もしかしてショック死したか？」
「流石にそれは無いと思いますけど……アニキ、この人？に一体何したんすか？」
「いや、本当に覚えｇ『ふっふっふっふっふ』お、生きてたか？」

先程までピクリとも動かなかった機兵が、笑い声と共に立ち上がり、後ろに備え付けられていた戦斧を手に構える。

『そーかそーか、覚えてないと来たか…』
「あれ？　何、この展開は？」
「おい、何か嫌な予感がするんだが…」

戦斧を構える機兵から発せられる、ドス黒い何かに気圧されるように後ずさる俺達。

『俺達をあんな生き地獄に送り込んでおいて……覚えてないだと？』

操手の怒りが伝わったのか、同じようにその巨体を振るわせるドム（仮）。

いや、本当に覚えが無いんですけど…！？

そして――――

『勘弁ならねぇ！！　踏み潰してやらぁあああああっ！！』
「は、走れぇえええええええええっ！！」
「「ひぃいいいいいいいいいっ！？」」

殺意に燃え俺達を追いかけるドム（仮）と、その姿に怯えて全力で走る俺達。

俺達にとっては数年ぶりの、ソードカラミティにとっては初めての命をかけた鬼ごっこが、今始まる。

２８．楽しい旅と久しぶりの鬼ごっこと。（後書き）

４７．「くっくっく、ようやく見つけたぞ！！」
戦士バイアラン
ジークジオンが放った刺客。
ＨＰ２６０

２９．逃走と回復と対策と。（前書き）

書けたので投稿。
十月の投稿はこれで本当にラスト。

29．逃走と回復と対策と。

『フハハハ！　遅い、遅いぞ！！　そんなスピードでこのデストロイヤードムから逃げられると思ってんのか！！』
「うっせぇ！！　絶対に逃げ切ってやるからな！？」
「アニキ、無駄口叩くよりも走ってくれ！！」

馬鹿笑いを上げつつ、背後から迫ってくるドム（仮）ことデストロイヤードムと必死で来た道を逆走する俺達。

「アストレイ！　いつもの手合わせ魔法でどうにかしろ！！」
「無理だ！　対象がでか過ぎて［分解］しきる前にこっちがやられちまう！！」

ソードカラミティの叫びに対し、きっぱりはっきりと答える俺。

確かに錬金術の応用である［分解］なら後ろから迫ってくる機兵（デストロイヤードム）を破壊することも出来るだろう。
ただし、相手の足が止まっていて、尚且つ向こうが此方を攻撃してこないという、この状況ではありえない前提のうえでの話であるが。

「大体アイツは俺のこと狙ってるんだぞ！？　足止めたら俺が死ぬだろうが！！」
「寧ろ死ね！！」
「酷い！？　ここまで苦労を共にした仲間を見捨てる気！？」
「悪いな！　お前との仲もここまでだ！」
「二人とも案外余裕だな！？」

走りながらも普段通りの掛け合いをする俺とソードカラミティに対し、いつものようにゴブリン君のツッコミが入る。

『…漫才しながらとは余裕だな！』

普段通りの掛け合いをしながら逃げる俺達のことが気に食わなかったのか、デストロイヤードムの操手が怒りで声を震わせつつも機兵の走る速度を上げ始める。

「げげ！？　おいアストレイ！！奴さんスピード上げ始めたぞ！！」
「んなもん言わなくても分かってるよ！！」
「アニキ！昔食った実をくれ！！　巨大化できれば機兵の一つや二つk「あ、悪い、全部破棄した」おい！？」
『皆殺しだ！ミサイルストーム！！』
「「「嘘！？」」」

デストロイヤードムがその足を止めると同時に、全身に備え付けられたドリルが発射され、此方目掛けて降り注ぐ。

あのドリル飾りじゃなかったのか！？、というかよりにもよってミサイルかよ！？

「全員散れ！！」

此方に向かってくるミサイルの群を見たソードカラミティが叫ぶ。
だが――――

「散るな！　全員一箇所に集まれ！」
「アニキ！？」

「俺に考えがある！　だから早く！！」
「あー、もう！！　死んだら恨むぞ！！」

そして、ミサイルの群が降り注ぎ、次の瞬間起こった凄まじい爆発が俺達のいた場所を吹き飛ばした。

２９．逃走と回復と対策と。

どうも、騎士アストレイです。
機兵には追いまわされるわ、ミサイルの雨が降り注ぐわと、もう散々な目にあってます。

「アニキー、グミってまだあるか？あったら少しくれ」
「あいよー、ソードカラミティは？」
「貰うわ。あー、畜生！お気に入りのマントが台無しだ！！」

何とか機兵の追撃を振り切った俺達は、付近の山へと身を隠して休息を取っている……いや、カッコつけて振り切った等と言ってこそいるものの、実際はミサイルが着弾する寸前でクロノグラスを使って地面に逃れ、そのまま地中を掘り進んで難を逃れただけなのだが。

「…しかし、よく生き残れたものだな」
「全員ボロボロだがな！！　あの機兵の操手め、この借りは倍にして返してやる！！」

お気に入りのマントを駄目にされたせいか、ソードカラミティが怒りの声を上げる。

もっとも、ボロボロなのはソードカラミティだけでなく、ここにいる全員が傷だらけの上に土まみれと酷い有様なのだが。

具体的にこんな感じである←

ソードカラミティ……マントを失い鎧も破損、全身傷だらけだがグミで回復する程度。

ゴブリン君……ミサイルの爆発のせいで身に着けていたルーン装備が全壊、軽い火傷だけで他はほぼ無傷（相変わらず理不尽な頑丈さである）

俺……ザックと愛刀こそ無事だが鎧が破損、頭部の角が片方折れた。

「アニキ、何か変わりの鎧とか無いっすか？　ずっと鎧装備してましたから無いと落ちつかないんすが」

「ほいほい、ちょっと待ってろ」

ゴブリン君の頼みに快く応じ、俺はザックに手を突っ込んで代わりの鎧を探す。

う～ん、ゴブリン君が使っていたルーンメイルを初めとしたルーン装備は俺のザックの中にある防具でも指折りの性能を誇る、よってその代わりとなると限られてくるわけで……お、これなんて良いんじゃね？

「ほれ、前の装備と違ってバラバラだけど、そこんとこは我慢してくれ」

「お、あんがとっす」

ゴブリン君に渡した装備はルーンメイル程の属性防御は持ってこ

そいないものの、純粋な防御力では上回る『スターメイル』と『グロリアスヘルム』の二つである。

その後、新しい鎧を貰ったゴブリン君を見たソードカラミティが自分にも何かよこせと言ってきたので、鎧の修繕をしてやったり新しいマントとして『シーブズマント』をあげたりとしたのだが……今後もアイテムを強請られては堪らないので自重しようと思ったのは余談である。

・・・

「…しかし、どうしたもんかね？」

夕食を食べ終え、起こした焚き火の炎を眺めながら俺は呟く。

「どうしたもんかねって、このまま逃げればいいんじゃねっすか？」
「それが出来れば一番いいんだけどさ…」
「逃がしてくれる訳がないだろうが」
「ダヨネー」

吐き捨てるように言うソードカラミティとその言葉に同意するゴブリン君。

向こうも死体が残っていない以上は俺達が生きていることには気づいているだろうし、あの操手が誰かは分からないが機兵まで持ち出してきた以上は俺を殺すまで追って来るだろう。

何より――――

「ドリルにミサイル、その上あの機動性、どう考えたってナラカ村のだよなぁ」

「俺はよく知らないから分からないんだが……あの村の機兵はあんなのばっかりか？」

「「あんなのばっかりだよ（だな）」」

ソードカラミティの疑問に対し、声を揃えて答える俺とゴブリン君。

その返答に心なしかソードカラミティの顔が引き攣ったような気がするが、まあ別にいいだろう。

この世界に転生して五年、このラゴル地方に来てから三年間、色々とやってきたが機兵まで持ち出される覚えは無いし、何より重要なのは何故ナラカ村の機兵が俺達を襲ってきているのかだ。

「…もしかして、ガンキャノン？」

俺の脳裏に一人のＭＳ族の顔が浮かぶ。

戦士フレメンガンキャノン、フレメン村を守る若い戦士。

以前何かと絡んできた為、挑まれた模擬戦で焼いたことがあるが、もしかしてコイツがあの機兵の操手だろうか？

「いや、それは無いでしょう」
「そうか？　アイツもかなり俺の事を嫌ってたし」
「そもそもガンキャノンはアニキに近づきませんから」
「それもそうか」

ガンキャノンでない、とすると一体誰が？
頭を捻らせて考える俺に、何かを思い出したようにゴブリン君が声をかけてきた。

「もしかしてアイツ等じゃないっすかね？」
「アイツ等？」
「ほら、ソードカラミティと会う前にやりあった盗賊っすよ」
「・・・・・ああ！　アイツ等か！！」

ゴブリン君の言葉で、俺はようやくあの機兵の操手が誰なのかに思い至る。
そうだそうだ、ああいう声をしてたっけ！　やっと思い出した！！

「……ってことは、もしかして脱走してきたのか？　しかも機兵まで奪って」
「……ご苦労なことっすね」
「……なあ、話が見えないんだが」

その後、事情を知らないソードカラミティに、あの機兵（デストロイヤードムだったか？）の操手が俺達が返り討ちにし、ナラカ村の技術者達の生贄にしたことを話したのだが……

「……生贄？」
「正確にいうと機兵の操手な、あの村の機兵はどれもこれも性能に拘りすぎて操手のこと考えてないのが多いんだよ」

「お陰で技術者の連中は実験台に飢えてるから、時々暴走して体力のある若者を（殆んど無理やり）乗せるんだよな」
「……どんな村だよ」

理解できないと言わんばかりにソードカラミティは顔を歪める。
うん、俺も理解出来ないから安心してくれ。

「で、真面目な話、あんなのどうやって相手をするんだ？」
「……それを今考えてるんだよ」
「アニキの魔法は？」
「……詠唱さえ出来れば使えるけどさ、あんな火力相手に悠長に詠唱なんてできねーよ。ソードカラミティは？」
「お前と違って詠唱はいらないけど……機兵を倒せるような威力は無いぞ」
「……アニキがここで機兵を造るってのは？」
「考えたんだけどね…」
「何か問題でもあるのか？」
「造れないこともないんだけど……まともな機兵を一から造ろうなんて思ったら四日は必要だ」
「え？　いつもの錬金術で作れないんですか？」
「機兵の構造はかなり複雑でな、部品を作るならともかく機兵そのものを錬成しようとすると何所かに不具合が生じるんだよ」

動力部の構造から使っている材質の強度まで、全てを寸分の狂いも無くイメージできるか？
俺の問いに対し、ソードカラミティとゴブリン君は首を横に振る。

物語に登場する化物級の天才達なら可能かもしれないが、生憎と俺の頭の出来は凡人である。
いかにテイルズの技術や魔法が使えていようともそこは変わらな

いのだ。

あーでもないこーでもないと悩んでいた、そんな時だった。

麓の方から機兵特有の地響きが聞こえてきたのは。

２９．逃走と回復と対策と。（後書き）

作者にネーミングセンスは皆無、よってＳＤガンダムフォースから名前を拝借。

次回辺りは戦闘が書けたらいいなー。

４８．「重機兵が現われた！」
重機兵デストロイヤードム
ナラカ村の技術者達の熱意（悪い方の）結晶。
ＨＰ４２０６０

３０．妙案と拳骨と……開幕？（前書き）

時間が出来たので投稿。

30．妙案と拳骨と……開幕？

地響きが聞こえると同時に、俺達は聞こえた方へと振り返ると同時に武器を構えてその時に備える。

こちらの方へと近づいてくる地響きに対し、俺は最大の注意を払いつつ隣に立つ二人に声をかける。

「ソードカラミティ、ゴブリン君」
「……なんだ？」
「……なんすか？」

後ろに立つ二人はそれぞれ愛用の武器である斧と双剣を構え、近づいてくる何かを警戒しながら返事を返す。

「多分…いや、確実に奴だと思う」
「そりゃあ、地響き上げながらこんな場所まで来るのは奴くらいでしょうし…」
「んなこと言わなくても分かってる。で、何か思いついたのか？」

前方から視線を逸らさずに対策でも考え付いたのかと聞いてくるソードカラミティ。

当然のことだが、生身で機兵に挑まなければならないという最悪の状況を打破できるような妙案など、俺の平凡な頭で思いつくわけが無い。

よって今から口にする言葉は、三人の内の二人は助かる可能性のある方法である。

……もっとも、賢者の石なんてド外道な代物を作成したり仲間ごと敵を吹き飛ばす俺らしくない方法だが。

「……俺が囮になる。だから、二人は逃げろ」

３０．妙案と拳骨と……開幕？

俺がそれを言葉にした瞬間、俺達三人の時間は確かに止まった……ような気がする。

「……アニキ？　それ……本気で言ってるんですか？」

最初に口を開いたのは、この中で一番俺との付き合いが長いゴブリン君。

口から漏れたその言葉が震えていたのは、恐らくは俺の気のせいではないだろう。

「…この状況で冗談が言えるほど俺の頭のネジは緩んでねーよ」

「な！？　らしくない、全然らしくないっすよ！！」

俺の言葉に対し、ゴブリン君は怒りの声を上げてこちらへと近づいてくる。

「谷で化物に追い回された時も！［森の主］に追い回された時も！！あんたは何時だって諦めずに足掻いていたじゃないか！？　なのに何でそんならしくないこと口にするんですか！？」
「そりゃあ俺だってこんなこと、他人にやってもらうなら兎も角、自分でやるのは凄まじ～～く嫌なんだけどさ」

基本、俺は痛いことが嫌いなのだ。
だから戦闘では防御よりも回避に専念し、相手の攻撃が届かない後衛から援護や遠距離攻撃に徹するのだ。
こんな、自分が死ぬような案なんて持っての他なのだ。

……自分でも分かってる。
こんな情けないことを考えるくらいなら、最初から転生等するべきではないくらいは。

「だったら！　俺が囮になｒ「だけど！！」」

自分が囮になる、そう口にしようとしたゴブリン君の言葉を遮るように、俺は叫んだ。

「お前等が死ぬのはもっと嫌だ！！
他の誰かが死ぬのはいい！！　笑いながら見捨てるくらいは出来る！！
でも、ここまで一緒に旅をしてきたお前らを巻き添えにするのは嫌なんだよ！！」

前世も含め、今まで出したことのない大声を上げて、俺は最低なことを叫ぶ。

俺が死ぬのは自業自得だ。
そこが地獄だと承知で、見逃した盗賊達をナラカ村にマッド達の元へと送ったのだ。
村から逃げ出した連中が復讐に来るくらい簡単に予想が付いた筈なのに、自分に都合の良い事しか考えていなかったばかりにこんなことになってしまった。

「アニキ……」

癇癪を起こした子供のようにわめき散らす俺の様子に、何とも言えないような表情を浮かべるゴブリン君、そして彼は———

「だからさ、お前等だけでも生き「……こんの、アホか！！」クボァッ！？」

———何の容赦も無く俺の頭に拳骨を落としやがりました。ぶっちゃけ死ぬほど痛いです。

「…っ！！　何しやがる！！」
「見ての通り（かなり手加減した）拳骨だ。少しは頭が冷えたろ？」
「冷えるか！！　寧ろ痛みで熱持ったわ！！」
「…っち、で？何時まで似合わないことほざいてるつもりだ？」
「似合わないって……あのな、俺だって似合わないことくらいは百も承知だよ！！
だけど他に方法があるか？　あったら言ってくれよ！！」
「ある！！」
「そうさ！ある筈……って、あんの？」
「おう、あるぜ！　それも取って置きのがな！！」

「マジ！？どんな！？」
「お、どんな方法だ？」
マジでこの最悪の状況をどうにか出来るのか？
というか居たのかソードカラミティ、台詞が無いからとっくに逃げたと思ってたぞ。
「それは……」
「「それは？」」
ゴブリン君の言う、この最悪の状況を打破出来る方法とは……？
「気合と根性だ！！」
「「……」」

………………………………………

……無言で一撃叩き込んだけど、俺とソードカラミティに罪は無いと思う。

…………………………………………………

…………………………………………………………

結局、対した案も出ないまま三十分ほど過ぎ、そして――――

『…よぉ…会いたかったぜ！！』

どうも、騎士アストレイです。
ゴブリン君のアホをボコってたせいで、ここまで機兵（デストロイヤードム）が来てしまいました。
しかも追いついたせいでテンションが高いのか、小刻みに動いていて凄くキモイです。

「やり合う前に確認しておきたいことがあるんだが…」
『あ？　命乞いは聞かねーぞ』
「そんな無駄なこと誰がするか！　俺が聞きたいのはお前のことだよ」
『俺のことだぁ？　…まさか今更思い出したとか言うんじゃないだろうな？』

正しくその通りである。

「あー、お前って…俺とゴブリン君にボコられた盗賊のドムで合ってるよな？」
『今更思い出したのか！？　ああ、その通りだよ！！お前とそこのデカブツのせいで地獄を見させられた哀れなドムだよ！！』

俺とゴブリン君に視線を向け、怒りの声を上げるデストロイヤードム……否、盗賊ドム。

「地獄ってお前……どんな目にあったんだよ？」
『どんな目だぁ？　操手のことなんて全く考慮してないふざけた機兵には乗せられるわ、何時ぞやの機兵乗りと再会してボコられるわ、弟分達が改心して真面目に職を探し始めて置いてきぼり喰らうわ、飛行機兵の実験に付き合わされた挙句に世界が丸かったなんて知る

羽目にはなるわ……とにかく！！　もう散々な目にあったんだよ！！』
「「「…うわー……」」」
そ、それは何というか……ご愁傷様？
というか、メタスちゃん里帰りしてたのか、通りで探しても見つからないわけだ。
「次の質問なんだけど……お前、その機兵どうやって持ち出したんだ？」
俺の質問に対して色々と思い出したせいで饒舌になったのか、面白いように答えてくれる盗賊、もとい操手ドム。
『何、偶々この機兵の実験に付き合わされてな、搭乗したまま脱走してきたのさ』
「……随分と無茶したな、あのマッド共がただで逃がす訳がないのに」
あの村の技術者達、特に機兵関係者達は常に自分達の製作した機兵に搭乗する総手（実験体）に飢えている。
そんな中、折角手に入った操手が逃げ出そうとしたら追っ手を差し向けるくらいはやりそうなんだが……
『地獄を生き抜いた俺の実力を甘く見るんじゃねぇ！！　技術者と現場の力の差を思い知らせてやったわ！！』
「勝ったのか！？　あのヘンテコ機兵に！？」
『じゃなかったらここにいねぇよ、お陰でここまで来るだけの「ヘンテコ機兵？何だそりゃ？」おい！？』

この中で唯一ナラカ村に行ったことのないソードカラミティが、ドムの言葉を遮り疑問の声を上げる。

「ああ、ソードカラミティは知らなかったな。
ゴブリン君、説明頼m「俺が出来るわけないでしょうが」…あの村の技術者が作る機兵は妙な物が多いんだよ。
今目の前にいるデストロイヤードムみたいなまともな形をしたのもあるけど、基本は変な形をしたのが多い」
「例えば？」
「そうだな…ザクレロの形をした『ザクレロタンク』とか、地中探索用の『ドリルアッグ』とか…まぁ、とにかく変な形した機兵が多い」
「……何ていうか、ある意味噂通りの村だな」

どんな噂かは知らないが、碌なものじゃないんだろうなぁ……しかも間違ってないんだろうし。

『いい加減にしろッッ！！』

自分を無視した挙句に目の前で説明まではじめる俺達に対し、ついにドムが切れた。

『どこまでも、どこまでも馬鹿にしやがってぇ……！！』

機兵の手に握られた、機兵専用の戦斧を地面に叩きつける。
それによって生まれた振動が地面を揺らす。

「……やべ、怒らせたかな？」
「……自分無視した挙句に目の前で説明会なんてされりゃあ、そりゃあ怒るでしょ」

「……お、俺のせいじゃ…ないよな？」

急いで距離を取り武器を構える俺達だが相手は機兵、しかもミサイル等という物騒な物まで備えているのだ。

正直、勝ち目なんてほぼ無い。

『さぁ、今度は逃さねぇぜ！！』

戦斧を構えて戦闘態勢を取るデストロイヤードム。

「……逃げとけば良かったのに」

ザックからメガグランチャーを取り出し、目の前の機兵に向ける俺。

「まぁ、何だ。ここでお前さんを見捨てるのは、ちょっと後味が悪いんでね」

腰に差した双剣を抜き、油断無く構えるソードカラミティ。

「あんたを置いて逃げるなんて選択肢、俺の中には最初から存在しませんぜ！」

バハムートティアを構え、カッコいいことを叫ぶゴブリン君。

『行くぞぉ！！　此処が貴様等の……』

俺達の命を賭けた死闘が、今はじ……まらなかった。

『墓場だぐうあぁっ！？』

「「「…え？」」」

３０．妙案と拳骨と……開幕？（後書き）

死闘開幕ならず。
誰がドムを攻撃したかは次回。
一部修正。

４９．「さぁ、今度は逃さねぇぜ！！」
操手ドム
重機兵の操手。
ＨＰ５００

３１．着弾と再会と…俺空気？（前書き）

色々考えながら書いてたら長くなった。
…しかも中途半端に！！

31．着弾と再会と…俺空気？

操手ドムが操る機兵デストロイヤードム（以後Dドム）。
巨大な斧を構え、此方の方へと突っ込んでこようとしたその瞬間、何の前触れもなく起こった爆発がその身を大きく揺らす。

『な、なんだ…っちぃ！？』

突然起きた爆発によって体勢を崩したものの、何とか立て直したドムは舌打ちと共に機兵を下がらせる。
それを追うように、明るくなり始めた空から一発、二発と砲弾が放たれ、地面に着弾しては爆発を起こす。

轟音と共に、次々とDドムに打ち込まれる砲弾、頭上から響く轟音と、先程まで対峙していた機兵が逃げ回る姿。
目の前の光景に唖然としていた俺は、半ば現実逃避気味に砲弾が降ってくる空中へと顔を向ける。
見上げた先には巨大な、おそらくは機兵の物と思われる巨大な足の裏が見え……って足！？

「退避、急いで退避しろーーーーー！？」
「へ？」
「あ？」

急ぎ正気に返った俺は、同じように目の前の光景に呆然としている二人にこの場からの避難を呼びかける。
間の抜けた声を上げた二人だったが、俺の慌てる姿と上から落ちてきている影に気づき、急いでその場から離脱する。

そして――――

『どいてくださーーーい！！　踏んじゃっても責任とれませんよーーー！！』

――――この半年の間、ずっと聞きたかった声が響くと同時に、その機兵は俺達の前に“着弾”し、当然の事ながらそこにいた俺達は……

「「「ギャーーーーー！？」」」

悲鳴を上げながら吹っ飛ぶのであった。

31．着弾と再会と…俺空気？

「……ぺっぺっぺ！　あー、くそ！！　一体何が降ってきやがった！？」

「……アニキ、何か凄く聞き覚えのある声が聞こえた気がするんですけど」

「……多分、“本人”が来たんじゃないかな？」

着弾の際に起こった衝撃に巻き込まれたものの、何とか無傷で済んだ俺は、砂煙の向こうに“彼女”が乗る機兵を見つけ、思考が完全に停止した。

その機兵（恐らくはナラカ村の物）は先程まで対峙していたDドムと同じく、まともなMS族の姿をしており、青い機体色、両肩のスパイクアーマー、両腕に装備された剣付きの盾と黒光する立派な

バズーカ砲、そして凛々しい顔のザク型の頭部と、どこかで見たような……というより、戦う漢の機体グフそのものの姿。

「か、か、か……」
「あ、アニキ？」
「アストレイ？」

近くにいる二人が心配そうに声をかけてくるが、そんなものは無視である。
今大切なことは、胸の内より湧き出るこの気持ちを言葉にすることなのだから！！

「カッコいい！！！！」
「「……おい」」

左右から白い目で見られてるような気がするが、そんなものは痛くも痒くもない。

「アニキ、流石にこの場でカッコいいは無いでしょうが…」
「何を言うんだゴブリン君！？　君は目の前にいる“アレ”を見てカッコいいとは思わないのか！？」
「全然思いませんが」
「なら、ソードカラミティ！！　お前なら分かるだろう！？　昇る朝日に照らされて輝くグフの勇姿！！　カッコいいとは思わないか！？」
「この状況で思うわけねーだろ」
「な…なんだと！？」

同意を求める俺の声に、揃って冷たい態度を取る仲間に対し、俺は絶望の声を上げて大地に膝をつける。

その時――――

『うふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふ』

俺達の耳に、身震いするような、笑い声が聞こえた。

無論、出所は俺達の前にいるグフ（断定）。

笑い声をあげ、グフはゆっくりと俺達……というより、俺の方を向き、流れるような無駄の無い動きで、装備していたバズーカ砲の照準を此方へ向ける。

『お久しぶりですねぇアストレイさん、随分探したんですよぉぉぉ？』

「……ハ、ハイ、ホントウニオヒサシブリデス」

自業自得とはいえ、あまりの恐ろしさに固まってしまう俺を誰が責められようか？

「メ、メタスサン……デ、アッテ……マスヨネ？」

『ええ、誰かさんを探して彼方此方を探してまわった哀れなフレメンメタスですよ』

震えるような声で此方の質問に答えるメタスちゃんと、震えるあまりに片言になっている俺。

ちらりと視線で助けを請うも、苦難を共にした仲間達は俺を置いて安全圏へと避難している。

「ド、ドウヤッテココマデ？」
『アストレイさんは知らないでしょうけど、村で造ってる機兵はこの地方の中なら居場所が分かるんですよ。
で、脱走したあの人が貴方を狙うのは分かってましたから長距離飛行用の試作フライトユニットで飛んで来ました』
「ソ、ソウデスカ」

発信機にフライトユニット！？　あいつ等何処まで進んでやがる！？

『飛んでる時は凄く怖かったし、凄く痛かったです。
でも、貴方が心配だったから一生懸命に耐えてここまで来たんですよ？
なのに、貴方と来たら……！！』
「ヒ！？」

メタスちゃんの言葉に混じり気の無い怒りが込められ始めた……
その時だった。

『お前等、俺を無視してんじゃねーー！！』
『「「「！？」」」』

忘れ去られていたDドムが此方目掛けて突っ込んできたのは。

『いけない！！　皆さんは下がってください！！』

そう言って、メタスちゃんはDドム目掛けてバズーカを発射する。

「っち！？　おい二人とも下がるぞ！！」
「お、おう！！」

「かなり離れないと巻き込まれるぞ！！」

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

・・

「この！！」

フレメンタスは構えたバズーカを正面から迫るＤドム向けてぶっぱなした。

その際の衝撃で機体が少し後ろに下がり、周囲の木々が揺れて木の葉を撒き散らす。

『そう簡単に！！』

しかし、Ｄドムは放たれた砲弾をいとも簡単に回避し、回避された砲弾は背後の森に着弾して爆発、その周囲を吹き飛ばす。

「っくぅ、あんな重い機兵ですばしっこい…！」

自分が操作する機兵よりも遥かに重い筈の重機兵が見せる動きに、フレメンタスはここに来る前に見た目の前の重機兵のデータを思い出す。

重機兵デストロイヤードム。
ナラカの谷で採掘される鉄ではなく、アストレイが逃亡する前に錬成した金属『ガンダミウム合金』を大量に使用して製造された機兵。
本来なら『ホバーボール』のホバーを改良したものが装備される筈だったがその重量故に断念、代わりに大量のミサイルと大型の斧を装備した機兵として完成。

渡された資料にはそう書かれていた。
だから自分はフライトユニットを装備出来るほどに軽いこの機兵でやってきたのだ。

「相手はグラップラーグフ（以後Gグフ）よりも遥かに重い筈……なのに！！」

照準を合わせ、再びバズーカを発射する……だが。

『ハッハッハッ！！』

笑い声と共に余裕で、しかも変な動きでかわされる。

「あの動きの速さ、一体何g…キャアッ！？」

相手の動きの秘密、それを考えた一瞬が隙となって相手の接近を許してしまい、その一瞬で腕からバズーカを叩き落されてしまった。
無論、叩き落した武器を相手が見逃す筈が無く……。

『オラァッ！！』

振り下ろされた斧の一撃によって破壊されてしまった。

「ちょっ！？何するんですか！？　作るの大変なんですよそれ！！」

『んなこと知るか！！』

バズーカを破壊されたことに対し、フレメンメタスが文句を言うが、それにドムが取り合う訳も無く、フレメンタスの『闘機兵グラップラーグフ』に切りかかり、フレメンメタスはそれを何とか盾で防せぎ、その勢いを利用して距離を取る。

（不味い！　この人思っていた以上に強い！！）

Gグフのコックピットの中で、フレメンメタスは己の認識の甘さを痛感する。

相手は“あの”マッドサイエンティスト達が開発し、追っ手として放った機兵達を返り討ちにしてここまで来たのだ。

機兵に乗って旅をしていたとはいえ、数える程しか戦ったことのない自分とは操縦技術の差があって当然。おまけに、この機兵に慣れてない此方と違い、向こうはあの機兵で十を超える実戦を経験しているのだ。

（バズーカが壊されなければ此方にも勝機があったのに……！）

先程の攻撃でバズーカは破壊されてしまった。

こうなった以上手は一つしかない。

（……一か八か、接近戦で仕留めるしかない！！）

胸の内で覚悟を済ませ、フレメンメタスは盾に備え付けられた剣を構え、攻撃の準備に取り掛かった。

３１．着弾と再会と…俺空気？（後書き）

メタスちゃん登場。
搭乗機兵がグフで、しかもバズーカを装備しているのは私の趣味…
…でもやられ気味ーーー！？

５０．「待っててください！今助けにいきます！！」
操手フレメンメタス
闘機兵グラッププラーグフの操手
ＨＰ４９０

５１．「闘機兵はバズーカを構えた！」
闘機兵グラッププラーグフ
ナラカ村の技術者達の情熱（悪い方の）の結晶。
ＨＰ３６０００

５２．「試作型フライトユニットを手に入れた！」
試作型フライトユニット
ナラカ村の技術者の開発した機兵専用ユニット。
ＨＰ＋１０００

３２．堕ちてきた機兵は……聖機兵？

どうも、最近影が薄いと評判の騎士アストレイです。
覚悟を決めて戦おうと思ったら相手が爆撃されました。しかも、それをやったのが此方の尋ね人だったので驚きです。
で、機兵同士の戦いに巻き込まれないように急いで離れているのですが……並走している仲間の視線が物凄く痛いです。

「……なぁ、アストレイ」
「……なぁ、アニキ」
「……言いたい事は分かる。けど、もう少しだけ待ってくれ」

言葉にせずとも今二人が言いたいことは分かる、凄く分かる。
しかし、今やろうとしていることにはどうしてもある程度の距離は必要なのだ。

「……ここら辺でいいかな？」

二体の機兵からある程度離れた場所で足を止めた俺は、ザックの中から適当な鎧や武器を取り出し、その辺にばら撒く。

「で、ここまで離れて何をするんだ？」
「見りゃわかんだろ？機兵造るんだよ」

聞いてくるソードカラミティに対し、振り向きもせずに答える。
正直、今は振り向く時間さえも惜しいのだ。

「機兵を造るって……不具合が生じるとか言ってませんでしたか？」
「出る。確実に出る。１００％出る」

俺は漫画や小説の天災（誤字に非ず）共と違って凡人だ、材質から内部の構造まで寸分の狂いも無くイメージなんてできてたまるか！！

「……大丈夫なのか？」

「凄まじーーくやりたくはないんだけど……今回に限りやる」

その辺に落ちている棒を拾い、地面に練成陣を書き込んでいく。

……本音を言えば、このまま地下を掘り進んで逃げたいところである。しかし、メタスちゃんが戦っている以上それだけは許されない。

俺はヘタレかもしれないが、それでも意地の一つくらいはあるのだ。

まぁ、賢者の石使って修復しながら戦えば負けることは無いだろうし、最悪の場合はメタスちゃんとこいつ等逃がして万歳アタックでもして自爆しよう。

「そんじゃ、ちょっくら錬成するから離れててくれ」

「おう」

「へい」

練成陣の中から二人を出し、いざ錬成！……と、思ったその時だった。

「ちょっと待て！」

空を見上げ、ソードカラミティが叫んだ。

「何かこっちに来るぞ！！」
「なにぃいいいいいっ！？」

急いで上空を見上げれば、俺達の遥か頭上で何かが爆発、それによって生じた黒煙の中から巨大な何か――機兵が躍り出す。

「来るぞ……」

俺達が見守る中、機兵は俺達から二十メートル程離れた場所に着地した。

32．堕ちてきた機兵は……聖機兵？

「機兵…か？」
「しかも……ガンダム！？」

ゴブリン君の言葉通り、空から落ちてきた機兵はガンダムの姿をしていた……していたのだが、問題はその機兵の姿が俺が前世で何度も見たことがある機兵に酷く酷似していることにあった。

「…まさか、いやそんな筈は……」
「アニキ？」
「アストレイ？」

ふらつく足を何とか動かし、俺はその機兵に向かって走る。

動く様子が無いことからその機兵は無人であると思われるが、そ

んなことを気にしている余裕は今の俺には無い。

「(何で、何でこんな…！！)」

近づけば近づくほどに、その機兵は俺の記憶にある物とほぼ同じものだと確信する。

地味な配色、飾り気の無い無骨な姿、俺の記憶にある聖機兵そのもの。

「何でこの場面で、『ガンレックス』が降ってくるんだぁあああああっ！？」

……思わず頭を抱えて叫んだが、俺は絶対に悪くないと思う。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

「…落ち着いたか？」

「……一応」

ある程度叫んで落ち着いたので俺は腕を組み、改めて目の前のガンレックス(仮)をみる。

飾り気こそないものの、確かな力強さを感じさせる無骨なデザイ

ン、感情の色が見えない無機質な瞳、身体の各所に走る赤の装飾と、俺の記憶にあるガンレックスそのもの……？

待て待て待て！？赤の装飾！？　俺の記憶にあるガンレックスはどの形態でも赤い装飾なんて無かった筈だぞ！？

困惑する俺を傍目に、目の前の機兵のコクピットハッチが独りでに開かれる。

「……開いたな」

「アニキ、どうします？」

「……乗ってみるしかないだろ」

突然の展開に困惑していたせいでかなりの時間を使ってしまった。今から機兵を錬成するよりも、目の前に存在するガンレックス（仮）に搭乗した方が時間がかからないだろう。

俺は急いで機兵の巨体をよじ登り、コックピットの中へと身を滑り込ませる。

「コックピットの中は村の機兵と一緒……ってことは村の機兵か？」

『その通り』

俺の疑問に答えるように、コックピットの中に低い男性の声が響く。

「ッ！？　誰だ！！」

突然聞こえてきた声に驚き、俺は周囲を見渡す。

しかし、狭いコックピットの中には俺以外に人影は無く、隠れら

れるスペースも存在しない。
『ふむ、黒い鎧のガンダム……頭部のツノが折れてはいるが概ねデータ通りか』
「……あー、できれば此方の質問に答えて欲しいんだけど？」
『質問に答える前にシートに座ってハッチを閉じたまえ。全てはそれからだ』

俺はその声の指示に従い、シートに座ってハッチを完全に閉鎖する。

「……で？　お前は一体なんだ？」
『相手に名を問うときは自分からするべきだ。と、私は思うがね』
「……アストレイだ。こんなでも一応騎士やってる」
『照合完了。ふむ、やはり君がアストレイか』
「……いい加減俺の質問に答えてくれないか？　こっちは急いでるんだ」
『おおっと、そういえば今は緊急事態だったな。急いで説明するとしよう。
私はこの［試作機兵］に搭載されている名も無き補助頭脳、機兵の名は無いので後で付けてくれたまえ』
「さっき村の機兵かって呟いたとき肯定したな？」
『その通り、本機はナラカ村の最新の技術によって製作された機兵である！！』

……なんでだろう？　今すぐこの機兵を破壊したくて堪らなくなってきた。

「何でそんな物がここに墜ちてくるんだよ？」
『それに関しては私が説明するよりも直接聞いた方がいいだろう。

操縦桿の脇に有るボタンを押したまえ』
「……これか？」
『アストレイさん』
「うぉ！？　フレメンダガーか？」

俺がボタンを押すと同時に、コックピット内にフレメンダガーの声が響く。

『アストレイさん。貴方がこの録音を聞いているということは、この機兵との合流に成功したということだと思います。以後はその前提で話を進めます。
メタスちゃんがそちらへ到着したと同時に、連中が開発した遠距離移動装置……まぁ、でっかい大砲なんですが、それでそちらの方へこの機兵を送りました。無人で送ったのは発射の際の衝撃が凄すぎて操手が持たない為です』
「そうか…」

さっきの補助頭脳といい、その遠距離移動システムといい、あいつ等は何を造ってんだ！？

『此方から出来ることはこれくらいです。無責任かもしれませんが健闘を祈ります。
あ、言い忘れましたがメタスCさんが「娘を連れて帰って来い」だそうです』

そう言い残し、フレメンダガーの声は途切れた。

『把握できたかね？』
「一応は」
『では騎士らしく、危地にいる女性を救いにいくとするかね？』

「おう！……なぁ補助頭脳」
『何だね？』
「お前ってさ、名前無いんだよね？」
『生まれたばかりだからね』
「じゃあ、俺が付けても問題ないか？」
『……センスがあるのを頼むよ』
「ああ、今日からお前の名は…」

俺が付けた名前を聞いたその声はしばしの間沈黙し、『センスの欠片も無い名前だな』と答えた。

「嫌か？」
『嫌という訳では無いが…まぁ、名無しよりは良いだろう』
「そんじゃあ、行きますか！！」

向かうは戦場、相手は恨み満載の元盗賊、何時もの俺ならこのまま逃げ出す所だが……偶には騎士らしく頑張ろう！！

「いくぞ８（ハチ）！！」
『任せろ』

そうして、俺と相棒を乗せた未だ名前の無い機兵は戦場に向け、土煙を上げて走り出したのだった。

『……やはり後で改名を要求する』

「……お前ね、少しはカッコよく決めさせてくれよ」

３２．堕ちてきた機兵は……聖機兵？（後書き）

ようやくアストレイが機兵に乗りました。
ちなみに、アストレイが乗ってるこれが後の聖機兵になったりはしません。
ナラカ村の技術者達がアストレイの話に出てきた進化する機兵を作ろうと思って出来たのがこの試作機兵だったりします。
名前は……どうしようか？

３３．グダグダと茶番と開戦と。（前書き）

ツッコミ所は多々有れど、どうかスルーの方向で！

33．グダグダと茶番と開戦と。

Dドムのコックピットの中、操手ドムは己の勝利を確信していた。

厄介なバズーカは破壊したし、相手に残っているの接近戦用の剣だけ。

それに引き換え、此方はダメージこそ有るものの動けないほどではなく、ミサイルも大量に残っている……というか今発射した。

『そんな！？　まだ残ってたの！？』

こちらがミサイルを使い切っていると思っていたのか、フレメンメタスが驚愕の声を上げる。

「くっくっく、浪漫だか何だかしらねぇが飛び道具が付いてねぇ機兵なんてただの的だ！！

何時かの借りを返させてもらうぜ！！」

村に居た頃、色々な意味で地獄を見せてくれた技術者達は口を開く度に浪漫だの漢武器だの五月蝿かったが、度々機兵同士で戦わされた自分から言わせて貰えば馬鹿馬鹿しいの一言に尽きる。

機兵の装甲は余程酷い物を使わない限りは早々破られることは無い。が、それでも接近戦は避けるに越したことはないのだ。

故に、機兵同士の戦いでは可能な限り接近を避けて長柄の武器で距離を取りながら戦う、もしくは今自分がやったように遠距離から火力を叩き込むかである。

発射されたミサイルに対し、相手は盾を構えて防御の姿勢を見せ

るが、放たれたミサイルはあんな盾で防ぎ切れる程威力の低い物ではない。
運よく防ぎきれても中破、あるいは大破のどちらかであるが、どちらにしても向こうの機兵はお終いである。
操手ドムが勝利を確信して笑みを浮かべた――――――その時だった。
『人の（惚れた）女に、何してやがるぅうううう！！！』
ミサイルの斜線上に一機の機兵が割り込み、Ｇグフを庇うように壁となったのは。

３３．グダグダと茶番と開戦と。

どうも、騎士アストレイです。
ナラカ村から送られてきた名無しの機兵に乗って駆けつけてみれば、メタスちゃんが搭乗している漢（グフ）の浪漫がボロボロにされてました。
その上ミサイルまで発射されているという最悪の状況だったので、間に割って入って防いだ結果――――
「ピカピカの新型がズタボロの機兵になってしまいました。てへっ」
『てへっじゃねーよっ！？　何で搭乗して３０分とかからずに人の身体ボロボロにしてんだよ！？馬鹿なの？　ねぇ、馬鹿なの！？』
搭乗して僅か１５分で機体をボロボロにされたことに腹を立てたのか、８が盛大に文句を言ってくる。

……しかし、生まれたばかりの癖に妙に人間臭いなコイツ。

「あー、気持ちは分からないでもないけどさ、あの場合はあーするしか…」

『本機に搭載されてた内蔵火器ならば十分に撃ち落せたわ！！』

「え、マジで？」

『マジでだ！！　ここに到着する前に言った筈だぞ！？　ナラカ村の『最新』の機兵だとな！！

お陰で腕に搭載されていた火器は使用不能、装甲は４０％も持っていかれたぞ！！』

……うわー、装甲半分も持ってかれた上に武器も使用不能ってヤバくね？

『大体にしてだな…っ！？　来るぞ！！』

「っちぃ！？」

８の警告に従って慌てて機体を動かせば、未だに消えない砂塵の中から巨大な戦斧が飛び出し、今までいた場所に突き刺さる。

『……っ、アレを受けて未だ動けるのか』

煙の向こうからＤドムがゆっくりとその姿を現わし、地面に突き刺さっていた戦斧を引き抜き此方を見据える。

『…とっくに逃げたと思ってたんだが、機兵持参で戻ってくるとはやるじゃねーか』

「生憎と、代わりに戦ってくれてる女の子見捨てて逃げるほど腐りきった覚えは無いんでね」

これが男だったら容赦なく見捨てるけどな！！

『アストレイさん…』

「そういう訳だからメタスちゃん、今の内に離れてくれ」

正面の敵を警戒しつつ、後ろに居るグフに後退を促す。

情けない話だが、庇いながら戦えるほど機兵には慣れていないのだ。おまけに向こうには飛び道具がある以上流れ弾の危険性もある。

『っでも！援護くらいなら「片腕ない上に武器も剣しか無いでしょうが」…っく、分かりました』

俺の言葉に痛い所を突かれ、渋々といった様子で機兵を下げるメタスちゃん……って、何で立ち止まんの？

『何も出来ないならせめて…』

メタスちゃんが操る機兵は、ある程度離れそして……

『これ、使って下さーーーいっ！！』

持っていた剣を此方へ向かって……ブン投げた！？

「って危ねぇ！？」

『驚いてないで避けろ！！』

ボロボロとは言え巨大な機兵の腕力は凄まじく、投擲された剣は凄まじい速度で飛び、そして……

『ナイスパス！！』

見事Dドムの手に収まった！！……そうだよね！？　俺目掛けて飛んで来てる物を避ければ正面にいる敵の手に収まるよね！？

「……」

『……』

「……」

『……あー』

気まずい空気が流れる中、両手に戦斧と剣を握ったDドムは少しの間悩むような仕草をした後、剣を握った手を振りかぶり、『おおっと、手が滑った！！』と言ってこちらの方へ放り投げた。

投げられた剣は重力に従ってこちらの足元に突き刺さり、俺は力の抜けきった腕で操縦桿を握り、機兵に剣を握らせる。

『いかん！？　剣がすっぽ抜けて敵の方へ行ってしまった！？

まぁ、まだミサイルもあるし剣の1本くらい別にいいか！！』

「そ、そうだな！！　相手はこんなにボロボロなんだし、剣の1本くらい別にいいよな！？」

『そ、そうですよね！？　別に私のせいじゃないですよね！？』

『『「ハッハッハッハッハッハ！！」』』

『……何だこの茶番は』

乾いた笑い声を上げる俺達に、呆れた果てた声で呟く8。

……視界が歪んで見えるけど、決して悲しくなんてないからね！！

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

『さて、あの女も居なくなったことだし仕切り直すとするか！！』

あの後、ドムはメタスちゃんが完全に避難するまで攻撃はせずに待ち続け、俺は『今のうちに攻撃を！！』と叫ぶ8を宥め続け、十五分が過ぎた。

いや、気持ちは痛いほどに理解できるんだが……律儀に待ってくれてる相手を攻撃しては駄目でしょ。

「…なぁ、一応聞いておきたいんだけどさ、ここで止めとく訳には『止める訳ねーだろ』だよねー」

答えが分かりきった質問をばっさりと切り捨て、Dドムは握った戦斧を構え直す。

それにつられるようにして、こちらも剣を構える。

『思えばあの女のせいで率いてた盗賊団は散り散りになり、テメェとあのデカブツと出会っちまったばっかりに地獄に送られて…』

「いや、そもそも盗賊なんてやってたお前らが悪いから」
『全くだな』

勝手に回想をはじめたドムに対し、思わずツッコミを入れる俺達だが、自分に酔っているのか聞こえていない様子。
……今の内に壊れた部分直して攻撃するかね。

「8、この機兵の設計図ってモニターに出せるか？」
『可能だが…どうする気だ？』
「いいからやる！」

俺の要請に応え、モニターに設計図が映し出される。

「ほうほう、ここがこうなって……あちらがこうなると？」
『……遂に狂ったか？』
「誰が狂っただ！！　単純に構造を把握していただけだ！！」

8の狂った発言を否定し、ザックの中に手を突っ込んで賢者の石（黒）を取り出す。

「…悪いけど腕の火器は外すぞ」
『な！？　ちょっと待て！！折角の武装を取り外すとは正気か！？』

俺の言葉を聞き、8が面白いようにうろたえ出すが楽しんでいる暇は無い。
回想を終えたのかDドムが動き始めているし、何よりも試射もしてない火器なんぞ怖くて使えるか！！

賢者の石を発動して破損していた部分を修復し、腕に至っては丸ごと『錬成』し直す。

「さてさて、初めての機兵戦だが…、勝てるかな？」

錬成し直した腕を動かし、問題がない事を確認できたので地面に刺してあった剣を引き抜き、正面に立つ相手に向かって突き付ける。

此方の動きに気づいたのか、向こうも武器を構えなおす。

『…とまぁ、ようやく恨みを晴らす時が来た訳だ！！　さぁ来い！叩き潰してやる！！』

「はん！！　返り討ちにして村に送り返してやるよ！！」

双方共に機兵の巨体を躍動させ、

『「往くぞ！！」』

全力で相手に突撃していった……！

３４．死闘、苦戦、終了！！　（前書き）

これが精一杯！！　もう戦闘なんて書かない！！

３４．死闘、苦戦、終了！！

凄まじい轟音が、本来ならば静かな山中に響き渡る。

それを切っ掛けに、断続的に轟く轟音、爆音、金属音。

機兵の巨大な足によって地面が踏み砕かれる破壊音、長剣と戦斧がぶつかり合う金属音、そして時折放たれるミサイルが生み出す爆発音。

『死ね死ね死ね死ねぇえええええええっ！！』

アストレイが操る無銘の機兵が長剣を振り下ろし、蹴りを放つ。

『オラオラオラ！！　ちったぁ中りやがれ！！』

操手ドムが操る重機兵がミサイルを発射し、戦斧を振り回す。

巨大な機兵が走るだけで地面を揺らし、武器を振るえば大地を容易く砕く。

二体の機兵が周囲のことを省みずに行うこの戦い、互いに相手を狙って放たれた一撃が大地を砕き、重機兵が放つミサイルは軽く周囲の木々を吹き飛ばしていく。

しかし、重機兵Ｄドムを操る操手ドムは知らない。彼が戦っている無銘の機兵の操手である騎士アストレイは現在――――

『次は右に避けろ！　その次は左後ｈ…ミサイル接近！　切り払え！！』
「あー、もう！！　機兵戦初心者に無茶な注文しすぎだ！！」
『なら諦めろ！　僅か五秒で死神が迎えに来てくれるぞ！！』
「誰が諦めるか！！　絶対に勝ってやるからｎうっぷ！？　は、吐きそう！」
『吐くなよ！？　もし吐いたりしたら脱出装置を起動して外に放り出してやるからな！？』

……機兵の補助頭脳である８によって扱き使われ、無茶な機動をしているせいで吐きそうになっていることを。

３４．死闘、苦戦、終了！！

どうも、騎士アストレイです。
現在、第二の人生で初の機兵戦をやっているのですが……もうゴールしたい気分です。

『おい！？　何をぼぉっとしている！！　とっとと操縦桿を握って機体を動かせ！！』

戦闘がはじまってからからというもの、８のアドバイス…というよりも命令に従って機兵を動かしているのですが、絶叫マシンなんか目じゃない速度と揺れのせいで軽く吐きそうになってます。

「分かってるよ！！　でも吐きそうなんだから仕方ないだろ！？」
『貴様の体調なんぞ知るか！！もし仮にコックピットの中で吐いた

ら外に放り出してやるからな！！』

俺の泣き言なんて聞く耳持たない鬼（８）のせいで、俺は喉の奥から昇ってきている物をぶちまける事さえままなりません。

……いや、流石にこんな状況でゲロ吐いた挙句に直撃喰らって爆死なんて来世にまで残りそうなトラウマ残したくないけどさ。

『その隙、貰ったーーーー！！』

「っとぉ！？　油断してたら前から来たーー！？」

『驚いてる暇があるなら防御しろ！！』

こちらが吐き気と戦っている隙を突き、正面に立つＤドムはゴツイ戦斧を横薙ぎに振るってくる。

急いで腕を動かし、長剣を縦に構えることで何とか防ぐものの、防御で足が止まった所を狙いミサイルが放たれる。

慌てて距離を取り回避するも、地面に直撃したことによって起きた爆発によって機体が揺さぶられる。

「っ～！？　だー！？　さっきからバカバカ撃ちやがって！！一体どんだけのミサイル積んでやがる！？」

『記録されているデータによると……軽く二千発はあるな』

「二千発！？　機兵がデカイって言っても限度があるだろ！？」

『製作者曰く、『ミサイルから逃げ回る敵って笑えるよねっ！』とのことだ』

「最悪だ！？」

向こうは動きこそ鈍いものの、飛び道具（ミサイル）をバカスカと撃ちまくっては破壊力抜群の戦斧を振り回し、こちらは隙を突いては剣を

振り下ろすも相手の装甲が固すぎて切り裂くには程遠い、正に手詰まりである。

『フハハハ！　そんなもんじゃあ俺のDドムは傷一つ付けられないぞ！！』

こちらの攻撃が一切効かないことが余程嬉しいのか、Dドムからムカつく笑い声が響く。

「があー！！　あんの野郎、盗品に乗ってる分際で偉そうに…！！」

『落ち着け！ただでさえ腕で負けているのに冷静さまで失ってどうする！』

イライラしていた俺を落ち着かせるように、8から諌めの言葉が放たれる。

「…8、この状況を逆転できるようなアイディアは無いか？」

『そんな物があるなら最初に言っている！！　そもそもあの機兵に使われている『ガンダミウム合金』はお前が作ったものだろうが！！』

「はぁっ！？　あの機兵アレが使われてんの！？」

8から告げられた事実に俺は目を丸くする。

無論、驚いてる間にもDドムの攻撃は続いているが、それなりに距離を取っているので今のところは問題無く捌けている。

『そうだ。あの重機兵にはお前が村に残したガンダミウム合金、その全てが使用されているのだ。

ナラカの谷で採掘される鉱石よりも固く、おまけに軽いあの金属を村の技術者達が使用しないはずが無いだろうが』

「……ははーん、あの馬鹿げた固さはそのせいか」

納得納得、ならばこの状況をひっくり返すことも容易って不味い！？

『……いい加減に、くたばりやがれーーー！！』

近づいてこないこちらに業が煮えたのか、Dドムが此方に向かってミサイルを発射する。

しかも、放たれたミサイルの量は今までの比では無い！　こちら目掛けて振って来るその様は正しくミサイルの壁である。

『この量…、一気に勝負を賭ける気か！？　機兵をs「下がる必要は無い！！」アストレイ！？』

下がる必要が無い、俺の発言を聞いた8の声に驚愕の色が混じる。

「……下がる必要なんて何処にも無い。これは危機なんかじゃないんだ」

『あ、アストレイ？』

こちら目掛けて降って来るミサイルを見つめ、俺はザックから取り出した一振りの『剣』を握り締めてタイミングを見計らう。

「……そう、これはいつもの危機じゃない」

――――着弾まで後6秒

『フハハハ！　そのまま消し飛びやがれ！！』

――――着弾まで後５秒

『アストレイ！？　急いで下がらせろ！！　まだ何とか間に合う！！』

――――着弾まで後４秒

８の声が悲鳴に変わりはじめる。が、俺は慌てずに集中し始める。

――――着弾まで後３秒

残り時間は後僅かだが、今の自分のなら余裕で間に合う。

――――着弾まで後２秒

「これは……」

――――着弾まで後１秒

「逆転の……好機（チャンス）だ――――――――！！」

そしてアストレイの叫びがコックピットの中に響く中、ミサイルの雨が降り注ぎ、アストレイの無銘の機兵を飲み込んだ。

・・・

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

『……やった、か？』

虎の子であるミサイルの全弾発射によって生まれた爆心地を見て、操手ドムがポツリと呟く。

周辺の草木は纏めて吹き飛び、アストレイが乗っていた機兵は欠片一つ残ってはいない。

『…くっくっく』

突如として、Dドムからくぐもった声が漏れる。

機兵の肩が小刻みに揺れ、遂には握っていた戦斧を落とす。

『ア～ハッハッハ！！　ざまあみやがれ！！クックック、アーハッハッハッ！！』

音が消えた山中に、Dドムから発せられる操手ドムの笑い声が響く。

己の勝利を確信し、積もりに積もった恨みを晴らした男は、心の底から楽しげに笑う。

――――故に、気づかない。

『アーハッハッハッ！！』

――――己の真上に、巨大な何かが影を落としていることに。

『――――死ぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃ……』

――――その影の主が、段々と近づいて来ていることに。

『――――ねぇええええええええええええ！！！』

『ハッハッハ……って、何ぃいいいいい！？』

気づいた時には既に遅く、上空より降ってきた機兵は見事振りかぶった剣を振り下ろし――

『がっ――――！？』

――――見事、頑強極まる重機兵の身体を、断ち切った。

「……し、死ぬかと思ったぁああ！！　もう二度とこんなことしねぇぞ！？」

『……貴様とはその内、じっくりと話し合わなければならないらしいな？ ええ、おい？』

３４．死闘、苦戦、終了！！　（後書き）

つ、疲れた！！
最後にアストレイが何やったかは…多分、分かる人は確実に分かるかと。

５３．「その通り、本機はナラカ村の最新の技術によって製作された機兵である！！」
補助頭脳８（ハチ）
試作機兵の補助頭脳
ＨＰ７５０

３５．最終話「楽しい時間は遠い過去…」（前書き）

打ち切りＥＮＤですいません！！
後、機兵名はガンレックス・Ｒ（レッドフレーム）になりました！！

３５．最終話「楽しい時間は遠い過去…」

ナラカの谷に存在する小さな村に、静かな風がそよぐ。

今日という日の為に態々建てられた教会、その床や壁は染み一つ無く磨きぬかれ、今日という日の為に皆がどれだけ力を入れ、祝福しようとしたかを察せられる。

普段は縁の無い儀式だが、その場に居並ぶ面々の顔には『一部の例外』を除いて笑顔が溢れている。

俺は緊張のあまり身体を強張らせ、この神聖な儀式を無事終えることが出来るのかと胸の内で不安に駆られる。

ふと振り返ると、純白の衣装を纏い、ヴェールで顔を隠したＭＳ族の女性が付き人のエスコートで赤い絨毯の上をゆっくりと歩いてくる。

純白の衣装が生み出す儚げな雰囲気は、この神聖な空気の中でまるで白い花の様な繊細さを感じさせ、それを壊さぬようにと思ったのか、緊張していた心と身体から力が抜けていく感じがした。

周囲にいた者達もまた、彼女の姿を見て各々意見は違うかもしれないがざわめきはじめる。

俺はそれに、大きな誇らしさと少しの不快感を覚えた。

やがて付き人から離れた彼女は俺の隣に来て、ふっ、とその表情を微笑みに変える。

周囲のざわめきも収まり、ここに居る全員の視線が俺の前の僧侶

――の格好をしたゴブリン君に集中するが、彼は何の緊張も感じないかの様に言葉を紡ぐ。

――汝、病める時も、健やかなる時も、この者を愛し、その命が尽きるその時まで共に在る事を誓えますか？

その言葉に、俺は何の迷いも無く答える。

――誓います。

俺の言葉に対し、目の前の単眼（モノアイ）は優しい色を宿して続きの言葉を紡ぐ。

――では、誓いの証を。

互いの指輪を交換し、ヴェールを持ち上げる。

「……綺麗だ」

「……アストレイさん」

ほんの少し涙で潤んだ瞳、純白の美しい衣装、長い砂漠での生活で日に焼けた小麦色の肌。

それらを見た俺は、ただ綺麗だと呟き、彼女――――フレメンメタスを、ゆっくりと抱きしめた。

見ていた者達も、その光景にそれぞれ何かを感じたのか、一人の男性――――Ｓ（ソード）カラミティの拍手を合図に、一斉に拍手が鳴り響く。

誰かが鳴らした鐘の涼やかな音が響き渡り、どこかの馬鹿が持ち

出した機兵が、盛大に祝砲を打ち鳴らす。

リー〈ドゴーンッ！！〉ン、　ゴー〈ドゴーンッ！！〉

美しい鐘の音を打ち消す糞喧しい祝砲の音を聞きつつ、俺は胸の内でこう思う。

（……あー、夢……じゃないよな？）

最終話「楽しい時間は遠い過去…」

どうも、騎士アストレイです。

重機兵との死闘から一週間後、メタスちゃんと捕獲したドム（生きてた）を伴って村に帰還したら結婚する羽目になりました。

……何か大切な階段を十段くらい跳ばしている気がするのは俺だけでしょうか？

というか、何故にウェディング？

アレか？村に居た頃にメタスちゃんと結婚式の話をしたのが原因か！？

あ、ドレスやヴェール、指輪の類は全部俺の手作りだったりします。今回に限り、錬金術も無しの文字通りの手作りです。

完成させるのに不眠不休で十日も掛かりましたが、隣で微笑んでいるメタスちゃんの姿を見れば頑張った甲斐があったというものです。

――――そして、何よりも嬉しいのが……

「アストレイ君！　娘を頼むよー！！」
「メタスちゃんを泣かせたらぶっ殺してやるからなぁあああああっ！！」
「逃げた男を好きでいてくれるような娘だ！　大切にしてやれよ！！」
「「「「メタスちゃ～～ん、お幸せにーーーー！！！！」」」」
「……今から掻っ攫うってのも有ｒ「んな訳ねーだろ」ギャーー！？」

俺達の結婚を、これだけの人たちが祝福してくれていることだったりする！！

当初の予定ではナラカ村の住民だけで行う筈だったのだが、話を聞きつけたフレメン村の住民達も式に参加し、今ナラカの谷は人で溢れ返っていたりする。

警備？　技術者連中が嬉々としてやってるから寧ろいつもより安全ですよ。

「……なぁ、メタスちゃん」
「？　何ですか？」

目の前で祝福してくれている人たちを眺めながら、俺は隣にいるメタスちゃんに話しかける。

「……本当に、俺なんかで良かったのか？　一度は君から逃げ出したような、こんな、ヘタレで情けない男なんかで…」

俺がいうのもなんだが、彼女は村の男にかなりモテる。

俺なんかよりもずっと良い男もいたというのに、それでも彼女は俺を選んでくれた。

「…はい。貴方が良いんです」

俺の情けない問いに対し、彼女は何の迷いも無く断言する。

「確かにアストレイさんはヘタレで、途轍もなく情けないかもしれません」

でも、と言葉を切り、そして———

「私はそんな貴方が大好きなんです。……例え、同じ時間を生きていけなくても」

そう言って、メタスちゃんは俺の手を強く握った。

「……あー、その、なんだ…」

……顔が火照ってるのが自分でも分かる。

ガンダム顔のお陰で表情こそあまり変わらないが、人間の顔ならば嬉しさのあまりに緩みきっていることだろう。

「これからもよろしく……お願いします？」
「はいっ！　よろしくお願いします！！」

その後、結婚した俺はナラカ村に定住した。
フレメンダガーが引退し、どういうわけか『三代目ナラカ村村長』に就任した俺は村の発展と日々暴走する技術者達を鎮圧する慌ただしい日々を送り、気がつけば六十年が過ぎ、そして――

・・・・・・・・・・・・・・・

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

メタスCさんやフレメンダガーを始めとした、ナラカ村を作った頃の奴等はもう居ない。
Sカラミティも半年前に起こった戦いに参加し、聖機兵の操手を護り逝ってしまった。
老いてなお剣士として戦い抜いたその姿は、戦いに参戦した多くの人々の眼に焼きつき伝説となったらしい。

……そして二日前、彼女も逝った。

「…アニキ、奥さんの埋葬には参加しないんですか？」

「…いい、アイツの最後にはちゃんと立ち会えたし、何よりも泣くからいい」

何年経っても変わらないっすねと、蒼い鎧を纏った獣騎士ザクウォーリア――ゴブリン君が苦笑いする。

あの頃の仲間で残っているのは彼と愛機に乗っている8だけである。

「……変わらないのはお互い様だろ。魔物騎士（モンスターナイト）なんかになりやがって」

そう、何を考えたのか後ろに居る馬鹿は邪法に手を出し、魔物とMS族の力を併せ持った存在である魔物騎士となってしまった。

何故そんなことをしたのか聞いてみたところ、本人曰く「惚れた女の一生の頼みらしい」が、詳しくは教えてくれなかったので不明である。

「しかしアレですね。もうあの頃を覚えているのは俺らと8くらいか…、時間が流れるのは早いもんすねぇ」

俺の隣に腰掛け、しみじみとザクウォーリアは言う。

「…なぁ」

「なんすか？」

「…これから、どうすればいいと思う？」

この六十年間、ただ村の発展に協力し続けていたのだが、あの頃

の知り合いが減っていくに連れてやる気が起きなくなり、彼女が逝ってしまった今完全にやる気が失せてしまった。

原作が始まるまで後どのくらいあるかは分からないが、少なく見積もってもまだ数千年はかかるだろう。

その間俺は何をすればいいのだろうか？　胸の内に空虚を抱え、俺は疑問を隣にいる相棒に問いかけてみる。

「…そういえば、この地方に来たのも俺が誘ったのが切っ掛けでしたっけ？

そうっすねぇー……それじゃー……」

ザクウォーリアは俺の瞳を真っ直ぐに見つめ、

「また、旅に出るってのはどうでしょう？」

――――あの時と同じ言葉を口にした。

「……旅？」

「そうっすよ。この広い世界、まだ俺等の知らない土地、行かない土地が腐るほどある筈。

そういうのを見に行くのも悪くは無いと思いますぜ？」

そう言って立ち上がった彼は俺の方へ手を差し出し、少し悩んで後、俺はその手を掴んだ。

「……そうだな。移動にはレッドフレームを使えばいいし、いっちょ世界の果てにでも行ってみるか！！」

「おう！　何処までもお供しますぜ！！」

「まずは部屋に置いてあるザックを回収！　その後はフライトユニ

ットを拝借してＧｏだ！！」
「アイアイサー！！」

かくして、俺とザクウォーリアは肩を並べて歩き出す。
多分、いや確実に行く先では様々な出来事や出会いがあるのだろう。
その中で、また愛する誰かと出会うかもしれない。
そうなった時また逃げ出すかもしれないが……まぁ、その時はその時で考えよう。
……今はただ、彼女達の思い出を抱き、新しい旅に想いを馳せることにしよう。

――――そうして、二人と一機は旅立った。
後の世でダバードと改名されることになる土地を後にして――――

第三章［メタス求めて三千里］ ―完―

３５．最終話「楽しい時間は遠い過去…」（後書き）

どうも、毎度お馴染み作者の七誌です。
こんな形で第三章終わらせて本当にすいません！！
理由は色々あるんですがこの後のプロットを見直したところ、延々とメタスとアストレイの色ボケ話が続くという作者にとっての地獄が続くので強制終了。
次回からは原作の十数年前からはじまります。
アストレイとメタスの話は番外編等で書けたら良いなーと思ってます。

５４．「何処までもお供しますぜ！！」
獣騎士ザクウォーリア
邪法によって魔物騎士と化した。
ＨＰ４２００

５５．「…さて、何処に行くかね？」
騎士アストレイ
六十年の歳月によって少し成長した。
ＨＰ３９００

５６．「赤い機兵が空を往く！」
機兵ガンレックスＲ（レッドフレーム）
フライトユニットを装備している。
ＨＰ７００００

人物設定（２０～第三章最終話）

人物設定（９～第二章最終話）

名前：騎士アストレイ
年齢：６５　性別：男
身長：騎士ガンダムと同じくらい　　体重：鎧無しでもそれなりに重い

見た目：武者〇伝？の超将爆牙の見た目を赤を基本色に騎士風に直した感じで、ザックを背負っているのでマントは付けていない。

＜好きなもの＞
平和　機兵　共に旅をしている仲間　風呂　猫　妻（故フレメンメタス）

＜嫌いなもの＞
トラック（前世での死因）　馬鹿神（ストリームカイザー）、黄金神（スペリオルカイザー）、覇界神（バロックガン）（嫌いというより苦手）、一度交わした約束を破る奴、ジークジオン

＜備考＞
・３４話の後フレメンメタスに告白、一発ぶん殴られた後晴れて結ばれた。
・６０年間の間にジークジオンから刺客が送られ続けるが、襲撃にフレメンメタスが巻き込まれ、その報復と言わんばかりに魔界に出向いて無差別爆撃を敢行。以後刺客が送られてくることはなかった。
・現在は目的も無くブラブラしており、時折思い出したように愛機を改造している。

＜能力＞

?:錬金術

・６０年間の間にかなり上達、現在では完全な形で機兵を錬成出来る。

?:テイルズ各種の武術・特技・魔法

・武術はＳカラミティに扱かれた為かなり上達したが、魔法主体で戦うのと後記のザクウォーリアが前衛を務めているのであまり発揮されることはない。

?:なんでも入る鞄（ザック）

・ナラカ村で製造された機兵関連の資料とフレメンメタスの遺品（指輪・結婚式の時の衣装等）を追加。

名前：獣騎士ザクウォーリア（ゴブリン君）

年齢：８９　性別：男

身長：ＯＶＡのネオブラックドラゴンと同じくらい　体重：鎧無しでもそれなりに重い

見た目：ＳＤ版スラッシュウィザードにマントを取り付けた感じ。

＜好きなもの＞

肉　かつてのナラカ村　アストレイ　フレメンメタス（故人）

＜嫌いなもの＞

神、薬と名の付く全て、

書類仕事（ナラカ村に居た際にアストレイに押し付けられた）

＜備考＞
・邪法によって魔物騎士（モンスターナイト）となった後のゴブリン君の姿。
・アストレイの妻になったフレメンメタスの最後の頼みで魔物騎士化、元々の実力もあって超強化されてしまった。
・現在もアストレイと旅をしており、その姿と戦いぶりから各地のゴブリンザク達から「戦神」と呼ばれていたりする。

名前：操手フレメンメタス（故）
年齢：７５　性別：女
身長：騎士ガンダムと同じくらい　体重：（塗りつぶされて読めない）
見た目：祈祷士リ・メタスの色を白くして丸くした感じ

＜好きなもの＞
騎士アストレイ（夫）　両親（故）　自分の子供達　機兵製作

＜嫌いなもの＞
戦士フレメンガンキャノン

＜備考＞
・３４話の後アストレイに告白され、一発殴った後に結ばれて想いを遂げる。
・実はアストレイの全部の事情（前世から未来の情報まで）を知っており、無理を承知でゴブリン君（後のザクウォーリア）にアストレイの事を頼んだ。
・アストレイとの間に二人の子供（男と女の双子）を授かり、最後は安らかに逝った。
・この世界では転生があったりするので、もしかしたら…？

名前：双剣士ソードカラミティ（故）
年齢：６２　性別：男
身長：騎士ガンダムと同じくらい　　体重：それなりに重い
見た目：ＳＤ版ソードカラミティがマントを付けた感じ

＜好きなもの＞
自由　美人　面白いもの　酒

＜嫌いなもの＞
束縛　ナラカ村の機兵

＜備考＞
・アストレイ達と旅をした後、ナラカ村を拠点にして傭兵業を営み、数年後にある女性と結婚、子宝には恵まれなかったものの幸せに過ごす。
・後に起こった戦いに老いた状態で参戦、アストレイから譲られた『空戦機兵レイダー』で活躍し、最後は聖機兵の操手を護って戦死。

名前：８（ハチ）
性別：男
＜好きなもの＞
製作者　改造
＜嫌いなもの＞
アストレイ（操縦が荒い）　野鳥（機体に糞を落とすため）

＜備考＞
・ナラカ村の技術者達が開発した機兵の補助頭脳。
・実は機兵の操縦も可能だが、あくまで『補助』が役割の為滅多にしない。
・己の操手であるアストレイとの仲は良いのか悪いのかハッキリしないが、何だかんだで嫌いではないらしい。
・現在はアストレイと旅をしており、彼がいなければ機兵戦でのアストレイの戦闘力は凄まじく落ちる（戦闘の際には彼が指示を出す為）

＜おまけ＞

名前：ブラック
身長：馬位の大きさ　体重：馬位の重さ
見た目：馬位の大きさの黒い翼竜

＜備考＞
・第一章のベビードラゴンが成長した姿
・第三章の開始と共に昼寝の邪魔をしたパシリを追って離脱、アストレイ達とは合流せずに各地を放浪してラクロア地方に帰還、そのまま定住した。

名前：パシリ（ビグロフォン）（故？）
身長：大人の牛くらい　体重：かなり重い
見た目：ピグロフォン

＜備考＞
・第三章の開始と共に再び脱走、その際昼寝をしていたブラックを巻き込んでしまった為、追い掛け回される羽目に…。
・何とかブラックの追跡を振り切り、そのまま行方不明となった。
・最後に目撃された際に聖機兵の操手といたらしいが…？

名前：フレメンメタスＣ（故）
身長：騎士ガンダムと同じくらい　体重：それなりに重い
見た目：メタス改

＜備考＞
・整備士フレメンメタスの父。
・娘とアストレイが結婚した際一番祝福し、馬鹿な事を考えていたフレメンガンキャノンを制裁した。
・アストレイ達の間に子供が出来た際に病死した。

名前：フレメンジム
身長：騎士ガンダムと同じくらい　体重：それなりに重い
見た目：フレメンジム

＜備考＞
・ナラカ村の住人。
・かなりの数がいる。
・村の住人は見分けがつくらしいが、アストレイ達には見分けがつかない。
・アストレイ達が見分けれるようになった頃に世代交代、再び見分けがつかなくなった。

名前：フレメンダガー
身長：騎士ガンダムと同じくらい　体重：それなりに重い
見た目：全体の色を黄色にしてアンテナ部分に羽飾りをつけた感じ
＜備考＞
・フレメン村の住人。
・かなりの数がいる。
・アストレイ達が見分けれるようになった頃に世代交代、再び見分けがつかなくなった。

名前：リックドム盗賊団（故）
身長：騎士ガンダムと同じくらい　体重：それなりに重い
見た目：戦士ドム
＜備考＞
・ナラカ村の周辺を縄張りとしていた盗賊団。
・機兵にのったフレメンメタスによってほぼ壊滅し、アストレイ達によって完全に壊滅した。
・村に送られた残党の内三人は改心して農夫となり、一人が後の操手ドムとなった。

名前：操手ドム（故）
身長：騎士ガンダムと同じくらい　体重：それなりに重い
見た目：戦士ドム
＜備考＞
・元はリックドム盗賊団の首領。
・アストレイによって村に実験台として送られるも脱走、第三章のラスボス化した。
・そこら辺のＭＳ族の何倍も頑丈な為、過酷な機兵実験に強制参加させられたので村の技術者達が心底嫌い。
・アストレイ達によって村に連れ帰られ、今度こそ改心した。

名前：魔道士ゲーマルク
身長：騎士ガンダムと同じくらい　体重：それなりに重い
見た目：魔道士ゲーマルク
＜備考＞
・ジークジオン配下の魔道士
・とある遺跡にて魔物の強化の実験をしていた。
・この作品ではジオダンテの誕生に関わっているが研究成果を本拠地に送った直後にアストレイ達が襲来、ボコボコにされて［森の主］の縄張りに放置される。
・命からがら［森の主］から逃げ延びるも記憶を失い、現在では山奥でひっそりと暮らしているらしい。

番外編『彼等はこのように過ごしています』（前書き）

何となく書いてみた。

番外編『彼等はこのように過ごしています』

アストレイ達が世界を回りはじめて数年。
彼等はどのようにして日々をすごしているのか？
少々覗いてみることにしよう。

番外編『彼等はこのように過ごしています』

1．『求むは（魔）改造』

「……つまり、（魔）改造を要求すると？」
『その通りだ！　以前の戦いには貴様の嫁の体調が悪かったせいで参戦出来なかった。
しかし！　欲望渦巻くこの世界、あの戦いが最後とは到底思えない！！
何時の日にか必ずや世界を巻き込む戦争がある筈！！　その日の為に必要なものは力！　武力！！　強力な兵器！！　即ち、この私である！！！』

どうも、毎度お馴染み騎士アストレイです。
旅の連れが自分の身体の改造を要求しているのですが……
「改造っつってもなー、正直必要あるか？」

『んな！？　貴様は何をほざいているか！！』
「いや、何をほざいとるって言われてもな…」

俺は現在のガンレックスRの詳細データ、それらをゆっくりと思い返してみる。

機兵ガンレックスR、かつての古巣である旧ナラカ村のマッドサイエンティスト達が開発した初のガンダム型（タイプ）の機兵。
その性能は製造されてから六十年近く経っているにも関わらず上位に位置し、度重なる改造によって更に強化されている。

現在では俺による改造が加えられており、動力部にはソーディアン×5を組み込んである為かなりの無理が可能で、装甲には『リバヴィウス鉱』を大量に使用し対魔効果も抜群。

腕に仕込まれたレンズによって機兵による晶術の使用が可能で、やろうとは思わないが周囲の生物からエネルギードレインも可能。

更にコックピットに組み込まれた『エターナルソード』によってある程度の空間干渉も可能、その応用で空は飛べるわバリアは展開できるわ、もうやりたい放題の機体。

……あえて不満を上げるならば専用武器がまだ完成していないことと、俺の腕ではその性能の全てを発揮できないことくらいである。

「で？　こんな素敵過ぎる機兵の何処を改造しろというんだよ？」
『……重火器の搭載を望む』
「必要無いだろ」

８からの要求を、俺は一言で切り捨てる。
つーか、それは明らかにお前の趣味だろうが。
『重火器の何処が悪い！！』
「何処が悪いって……雑魚減らすくらいにしか使えないだろ」
こんな俺でも人外が跋扈するこの世界（スタ・ドアカ・ワールド）で六十年も生活しているのだ。
弾丸を“撃たれた”後で避けたり切り払ったりするような化物と遭遇したことは一度や二度ではない。
『あんな規格外がそう簡単に生まれるはずが無い！！　重火器は搭載するべきだ！！』
「ハッハッハッ！　甘すぎるぞ　８（ぼうや）！！　そういうのが簡単に生まれるのがこの世界だ！」
どこぞの王国の騎士団とか『雷』や『嵐』の一族とか、神様が運営してる化物騎士団とか！！
「というわけで、何か思いつくまで改造は無しってことで」
『……ｏｒｚ』

２．懐かしき何か

それはよく晴れたある日のこと。

「……何ですか、これ？」

ザクウォーリアは目の前にそびえ立つ違和感の塊を見上げる。
口からは意味のない重いばかりの溜息が漏れ、それが現状を嫌でも認識させる。

嫁さんを亡くした目の前の（見た目）少年を元気付ける為に旅立って十数年。
最初の二年こそ酷かったものの、ようやくかつての調子を取り戻し始めたのは知っている。
そして、最近もう一人（もう一機？）の仲間と影で何かやっていたのも知っている。

……だが、だからと言って。
目の前にあるこのデカブツ、これは一体何の冗談なのだろうか？

「……何の冗談すか、コレ？」
「ザクウォーリア、見ての通りだ。
君にはコレの操手をして貰う」

ザクウォーリアの問いかけに対し、半ば予想通りの返答をしたアストレイはその機兵を見上げる。
目の前に聳え立つのは、何処かで見たような……というか、かつて［機兵の谷］で倒した筈のゾンビ機兵の姿があった。

「……何でこの機兵がここにあるんですか？」
「いやぁ、思い出したら何故か造りたくなっちゃって。
あ、一応言っておくけど安全だからな？」

その言葉を聞いた瞬間、ザクウォーリアは疑問が解消されたと同時に軽い頭痛に襲われ、こう思う。

……普通、思い出したからって造るもんじゃないだろうがと。

一応安全ではあるらしいので、とりあえず乗ってみて（興味は有ったし）適当に動かしてみる。

どうやら爆発したりする心配は無いらしく、意のままに動いてくれる……のは良いのだが。

『……アニキ、一ついいっすか？』

「ん？　何か問題でもあったか？」

「操縦桿の横に付いてるボタンに、何か髑髏マークが付いてるんですけど」

そう、操縦桿の横に付いているボタンには黒い髑髏のマークが描かれているのだ。

しかもうっかり押しそうな危険な位置に。

「大丈夫！！　ただの自爆スイッチだから押さなきゃ問題無い！！」

笑顔で返され、再び頭痛に襲われるザクウォーリア。

だったらこんな位置に取り付けるなよ！！　と、胸の内で叫ぶ。

「……もう一ついいですか？」

「ん？　今度はなんだ？」

「背中に背負ってる大砲みたいのは……」

「ああ、ただのブースターだから気にすんな」

淀みない返答。

言葉どおり、背中にはかなりの大きさのブースターがゴテゴテとくっ付いている。
元々の装甲の厚さもあって、とても重そうだ。
「……エネルギーは大丈夫なんすか？」
アストレイが造る機兵、その殆どが魔力電池を動力として稼動している。
こんな物を取り付けたうえに、ブースターを作動させれば一発で電池切れになる気が……。
「……試作型の永久機関積んでるし、多分大丈夫だろう」
淀みない返答。
思い出した程度で造った機兵に付けるような代物では断じてない。
結論。
これはかつてのゾンビ機兵ではない。全く別のナニカだ。
「とりあえず、格闘戦が出来るように造ってあるからとび蹴りとか出来るぞ」
よし、早速試そう。勿論其処のバカに！！
ザクウォーリアは満足そうに頷く馬鹿（アストレイ）を見下ろした後、天高く飛び上がった。
そして、眼下の豆粒のような標的を睨みすえる。
彼の心を体現するかのように、ブースターだけでなく全身からエネルギーが放たれ機兵の全体を金色に染め上げていく。

眼下に見える標的が慌てている気がするが、そんなことはどうだっていい。

胸の内に溜まった黒いものを吐き出すように、ザクウォーリアは高らかに叫んだ。

「少・し・は・考えて造れぇぇぇぇぇぇぇぇっ！！」

番外編『彼等はこのように過ごしています』（後書き）

５７．「鬼械機兵が誕生した！」
鬼械機兵ガンレックスＲ（レッドフレーム）
アストレイによる改造が繰り返された末のガンレックスＲの姿。
ＨＰ９００００

５８．「復元機兵ネオファラオが現われた！」
復元機兵ネオファラオ
アストレイが復元し、永久機関を搭載した機兵。
ＨＰ５００００

３６．始まりは地獄、終わりはお仕置きと。（前書き）

キャラ崩壊注意！
主人公達が居座ってるせいで原作キャラの人格が激しく変わってます。

36．始まりは地獄、終わりはお仕置きと。

――――妻であるフレメンメタスを亡くし、原作開始までの永い年月をアストレイは相棒である獣騎士ザクウォーリアと8を連れ、この広いスダ・ドアカ・ワールドを旅して周った。

――――その間にも本っっ当に色々な出来事があった。

――――西の地でダラダラしている時に覇界神の復活を目論む勢力を偶然発見し、数十年にも及ぶ激しい殲滅戦を行ったり、

――――北の地で起こった戦争に介入して一人の騎士と友誼を交わし、その騎士が重傷を負った際にはその魂を愛剣に封じ、彼の志を継いだ若い騎士に託して国が築かれるのをその目で見届けたり、

――――南の地で療養していたら『我等の使命を邪魔する者よ、消えよ！！』と、アストレイを狙って襲撃を仕掛けてきた死神の大群から命からがら逃げ延びたり、

――――東を旅している時にある出来事が切っ掛けで『嵐』の一族に目を付けられて数年間追い回され、最終的には嵐の一族が操る真紅の機兵とアストレイの鬼械機兵が激突したりと、

――――お前何してるんだ！？と言いたくなる様な感じで彼等は旅を続け、気が付けば数十世紀という年月が流れていた……。

３６．始まりは地獄、終わりはお仕置きと。

天国にいるであろうメタスちゃん、お養父さん、旧ナラカ村の面々、お元気ですか？

俺は今にも死にそうです…。かれこれ三週間は碌に寝ていません。労働基準法？　何それ？　おいしいの？　というかこの世界にそんな素敵な法律は存在しない！！

俺の目の前に聳え立つ書類の山・山・山！！

各部隊からの申請書やら要望書、各地から届いた報告書が山となって俺の机を占拠しています。

当初はこれの数倍の量が存在していたが三週間寝ずに奮闘した結果ようやくこの量まで減らすことに成功し、あと少しで夢の中で皆と再会することが出来そうです。

ああ！　もう少しで久しぶりのベッドｎ「アニキ～、追加の分持ってきましたぜ！」……神は死んだ。

……もう、休ませて下さい。

………………………

…………………………………

…

…………………………………

……………

「ヒィ…ヒィ……っくぅ！」

既に限界を突破し、見えちゃいけない領域に踏み込みつつある身体を気力で動かし、俺はひたすらに筆を持つ手を動かして書類にサインをし、判子を押し続ける。

頭の何処かで「もう、休んでもいいんだよ？」という声が聞こえてくるが、甘美過ぎるその誘惑を無視して俺は作業を続ける。

「す、すごい…腕の動きが見えない」

隣の机で作業している文官ジムが呆然とした顔で何やら呟いたが、今の俺の耳には音など何一つ入ってこない。

というよりもそれどころではない。早く終わらせないと次の書類が迫ってくる…！！

「あの…アストレイさん？」

「ゼェ…ゼェ…」

五月蝿い！　黙れ！　気が散る！　サボってないで仕事しろ！！

「コーヒー淹れたんですけ「んな物より仕事しろーーーー！！！」ひぃいいいいい！？」

下らない事をしてサボっている文官を怒鳴りつけ、俺は机の脇に置いてある眠気覚まし［ユウナセイラーン］を飲み干して作業を続ける。

怒鳴りつけた文官も机に戻り、他の文官達も急ピッチで作業を続行する。

「はひぃ…はひぃ…」
「ほ、星が見え…駄目だ、仕事しないと…」
「まだだ！　まだ終わ…らないのか？」
「見える！　見えるけど…身体が……」
「ああ…時が見える」
「ガ〇ーーーー！！」

部屋にいる俺と全ての文官達の（命を削った）尽力により着々と書類の山が片付けられ、人間（ＭＳ族も）追い詰められた時こそその力を発揮するものだとこの場の全員が改めて実感する。

「頑張れ！　あともう少しだ！！」
『おお～～！』

後もう少しとなった書類の山を見て、俺は文官達を鼓舞する。

そんな所に……「すいませーん！　追加の書類でーす」と、大量の書類を持ったザクウォーリアがやってきた。

「また…なのか？」
「はい、またです」
「一応聞いておくけど…何の書類？」
「陛下が壊した中庭の修理代の請求書っす」
「……俺、聞いてないんだけど？」
「え？　陛下はアニキには話は通してあるって…」

ぁんの脳筋が！！　俺に何か恨みでもあるのか！？　僧侶ガンタンクRならまだしもあんたには何かした覚えはないんだけどっ！？

俺はゆらりと立ち上がり、出入り口に向かってゆらゆらと歩きだす。

「アニキ？」

「あ、アストレイさん？　どちらへ？」

作業を中断して無言で出て行こうとする俺を不審に思ったのか、ザクウォーリアと文官の一人が声をかけてくる。

俺は振り返らずに立ち止まり、一言「休憩する」とだけ伝えて再び歩き出す。

「ちょ、アニキ？　まだ仕事の途中「…ぁん？」ごゆっくりどうぞっ！！」

振り向いた俺の顔を見たザクウォーリアは、教本に載っているような見事な敬礼をして俺を見送った。

先程窓から見た太陽の位置から考えて今は昼、この時間帯ならば目標は調練場にいる筈。

「……くっくっく、王だかキングガンダムだか知らないが仕事を増やしやがって！！」

執務室の扉を力任せに閉め、俺はザックから取り出したガーベラ・ストレートを腰に差し調練場へと向かった。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・

・・

「ハァァァァ！」

「セイヤァアアア！」

あらん限りの呪詛を吐きながら調練場へとたどり着けば、そこには予想通りに目標（ターゲット）である陛下とその側近が鍛錬に励んでいた。

「フ！　また一段と腕を上げなされたな陛下！」

「ハァ！　いらん謙遜だぞ！お前の方こそ腕を上げたのではないか!?」

おうおう、随分と楽しそうにバトっちゃって。

周りにいる兵たちも二人の打ち合いに体を動かすのを忘れて見入っちゃってるし。

「…まぁ、それも当然か」

何せ、あそこにいるのは“今の時点”では最強の騎士達である。

その太刀筋はそこらにいる剣士や野良騎士とは比べ物にならないくらいに速く、生半可な盾や鎧等叩き切ってしまうほどに鋭い。

……いや、俺はちゃんと見えてますよ？　戦いたいとは死んでも思わないけど。

「っく！　どうやらまた私の負けのようですな」
「フフ、久しぶりに勝ち星をつけることができたな？」
っと、少し気を逸らした隙に決着がついたらしい。
俺は仕事を増やしてくれた陛下にお仕置きをするべく周りにいた兵たちを押しのけ二人に近づき、気づいて逃げようとした陛下の首根っこを押さえて捕獲する。
「アアアアストレイ！？　何故此処に居るのだ！？　ま、まだ仕事が終わるまで暫くかかる筈では！？」
「ほほぉ？その慌てぶり、どうして俺がここにいるのか理解しているご様子で」
「……陛下、今度は何を仕出かしたんですか？」
面白いように慌てる陛下――キングガンダムの様子から察したのか、呆れた様にため息をつく鎧騎士ガンダムＦ９０。
「いやいやいや！？　アストレイを怒らせるようなことはした覚えが無い！！信じてくれＦ９０！！」
「……アストレイ殿、今度は何があったのですか？」
「大したことではありません、ただ中庭を壊したことを俺には黙っていただけですよ」
「……陛下、どうやら何時もの小言では足りないらしいですな？」
「ヒィッ！？」
Ｆ９０の目を見て更に怯える陛下、どうやらいつもの“小言”ではなく、完全に“説教”をする時の目に変わったのを理解したご様子。

「さてさて、お話ついでに溜まっている仕事もこなして頂きましょうか？」
「…そんなに溜まっているのですか？」
「ええ、それもとんでもない量ｇ「離せ！？　書類地獄はいやだーーー！？」っち！往生際の悪い！！」
「陛下、これもまた王の義務の一つ。先王も勤めていたものですぞ」
「延々と書類の山と戦い続けるのはいやだー！？」

周囲にいた兵たちが怯えて道をあけ、俺とＦ９０は往生際の悪い陛下を引きずって城の中へと戻る。
そして数分後……

『アーーーーーーーーーー！？』

キングガンダムの悲鳴が城中に響き渡ったという。

ここはブリティス王国。聖杯が眠り、多くの騎士達が住まう地にして俺達が誕生を見届け、長い年月の末に再び流れ着いた地である。

３６．始まりは地獄、終わりはお仕置きと。（後書き）

過去のブリティス王国からスタート。
ちなみにまだ旧円卓の騎士団は結成されていません。
現在城にいるのはキングガンダム、鎧騎士、嵐騎士、僧侶ガンタンクＲ、銀騎士Ｚ、騎士アーサーガンダムの六人だけで、他の騎士は他国だったり別世界だったりでまだ在籍してません。

５９．「ふわ～…寝るか」
騎士アストレイ
ブリティス王国の客員騎士。
ＨＰ２０

６０．「よ、ようやく眠れる…」
文官ジム
ブリティス王国の文官
ＨＰ５０

６１．「アニキー、追加のお仕事っすよ」
獣騎士ザクウォーリア
ブリティス王国の客員騎士。
ＨＰ４２００

６２．「ま、まだあるのか？」
キングガンダム
ブリティス王国の王
ＨＰ３０００

６３．「陛下、追加の分です」
鎧騎士（アーマーナイト）ガンダムＦ９０
ブリティス王国の近衛騎士。
ＨＰ２４００

６４．「眠気覚ましユウナセイラーンを手に入れた！」
眠気覚ましユウナセイラーン
アストレイが開発した強力眠気覚まし。
ＨＰ－３５００

３７．今後のことを考えてみよう。（前書き）

アストレイも色々考えてはいます。

37．今後のことを考えてみよう。

どうも、騎士アストレイです。

相棒二人を連れた長い放浪の旅の末、旧円卓の騎士団を見る為にブリティス王国を訪れたのですが、うっかり時期を間違えた挙句に何処を間違えたのか陛下の暗殺を防いでしまった為、客員騎士としてブリティス王国に仕えることになり地獄をみています。

キングガンダム陛下に仕えて数年、何度部下のジム達と一緒に眠れない日々を過ごしたか分かりません。

あの人武人肌のせいか、仕事は出来るくせに必要最低限しかやらないんだもん。その上後方で待機するのが性に合わないのか、部下を引き連れて自ら出陣しようとするから余計に性質が悪い。

まぁ、中庭を壊したことを黙っていた件で鎧騎士殿の監視がきつくなったから暫くは書類仕事に専念せざるを得まい。その上……

「全く！　あれ程アストレイ殿達に仕事を押し付けてはいけませんと申したではありませんか！！」

「し、しかしだな、余がやるよりもずっと効率が……」

「しかしもかかしもありません！！　いいですか！　貴方はこの国の王なんですよ！　その貴方がやるべき仕事を放り出して良い訳がないでしょうが！！」

「だ、だが賊や魔物の討伐も王の責務……」

「そ・れ・は！　貴方の責務以前に我等と兵達の仕事です！！　武器を持つなと言う訳ではありませんがその前に御身に何かあったら国が揺らぐということをご理解頂きたい！！」

頼りになる嵐騎士ガンマガンダムが、長い遠征からようやく帰還したのだ！！

「フハハハハハ！！　ざまぁ見やがれ！！」
「アストレイ殿！？　笑うよりも先に手を動かして下さい！！」
「あ、ごめん」

37．今後のことを考えてみよう。

書類の山を陛下に押し付け（そもそも陛下の仕事だ）、久しぶりに自室に帰ってきた俺はそのままベッドの方へと向かい、倒れるように横になりこれからのことを考える。

ブリティス王国、脳筋だが民を想う国王とそれを支える騎士達が存在する平和な王国。
今は平和なこの国だが、あと数年の内に戦火に焼かれることを俺は知っている。

異界からの来訪者であるフューラーザタリオン。
ザタリオン帝国の総統にして遥か昔より宇宙征服を企み暗躍する、悪の機械生命体。
そしてこの世界に生きる多くの者達の運命を狂わせた覇界神（バロックガン）、ジークジオン、ザンスカール族と並ぶ厄介ごとの根源。
そもそも、コイツがこの世界にやって来なければ覇界神は目覚めず、円卓の騎士が国を離れたせいで国が焼かれることも無く、竜の

親子が剣を交えることも無かったはずなのだ。

数千年という長い放浪の間、俺は何とかして奴の来訪を阻止できないか考え、打てる手を打ちつくしてみたのだが……

「多分、もうこっちに来てる筈だよなぁ……」

遠征から帰還したガンマガンダムの話によれば、各地に存在している魔物が例年よりも遥かに凶暴となっているらしい。

この話と俺の予想が正しければ、確実にフューラーザタリオンは宿敵であるコマンドガンダムと共にこの世界にやって来ている。

それ即ち……

「……封印された覇界神の意識の活性化、数千年ぶりのジークジオンの侵攻、おまけに幻魔皇帝の誕生ってところかな？」

純粋な悪の機械生命体であるフューラーザタリオンが齎す影響、それは覇界神や凶悪な魔物を数多く内包するこの世界において最悪である。

何よりも最悪なのは覇界神の意識が活性化、これによって妨害が起きて黄金神の復活が遅れてしまうことが確定してしまったこと。これに尽きるのだ。

「く～！　これさえ無ければこっちから接触して『鎧』と『力』を渡して早期の復活が出来た筈なのに…！」

長い放浪の旅は伊達ではない。

旅の途中で発見した『ギアナポイント』から抽出した莫大なエネルギー、これと転生した時に回収した『鎧』とを合わせて返却すれば原作の比ではない早さでの黄金神復活が可能である……はずだった。

しかし現実は厳しく、俺の願いも空しく疫病神（フューラーザタリオン）が来てしまった以上、全ては机上の空論と言うやつである。

「テンプレなオリ主だったらここで「俺が全部倒してやるぜ！」とか言うんだろうなぁ……」

無論、俺はそんな馬鹿なことをする気は微塵も無い。

初期版ジークジオンにさえ勝てるかどうか危ういのに、魔物によって強化されている上に剣士としても最強に位置する幻魔皇帝や４００ｍを超える巨体の巨大総統なんぞに勝てる訳がない。

「そもそも、何でアサルトバスターはフューラーザタリオンなんて保護したんだ？

どう考えたって傷が癒えたら裏切る気満々じゃねーか！？　おまけに機械生命体だからご自慢のバイスタランチュラだって効くとは思えねーだろ！？　まさか勝てるとでも思ってたのか！？　『嵐虎剣』や『皇帝機兵』の隕石くらいじゃ倒すことは出来ても殺すことは出来ねーだろうが！？」

そう叫びながら、俺はベッドの上で転がりまわる。

あぁもう！　勝てるかどうか分かんない化物共のことなんて後だ後！！　今は今後どうするかを考えよう！！

転がりまわって少しは頭も冷えたことだし、幾つか案を挙げてみるか。

1．何もかも忘れ、相棒二人を連れてこの星から脱出する。

利点：俺達の身は安全、アルテイヤーを解析した際にその手の技術も入手したので宇宙船も作れる。

欠点：馬鹿神（ストリームカイザー）から確実に何かしらの罰則が来る上に、義に厚いザクウォーリアや闘争に飢えている8が了承することは有り得ないこと。

「……脱出は無理、と」

2．原作主人公達を影からバックアップ！　俺は縁の下の力持ちさ！

利点：主人公達が頑張るので俺達は表に出ずに済む。

欠点：気づかれたら最後、黒幕共からわんさかと刺客が送られてくること。

「……刺客が送られてくるのは勘弁してほしいな」

3．よくある内政チートでブリティス王国を超強化！　勢いに乗って世界をこの手にする！

利点：国という強大な力が味方になり、上手く行けば暗黒卿や覇界神を復活させずに済むかもしれない。

欠点：正義に燃える陛下がまず了承しない上、俺は内政チートが出来るほど頭が良くないこと。

「下手したら円卓の騎士達と戦う羽目に…！？　そ、それだけはいやだな、うん」

４．大昔にノリで作って打ち上げたベルクラントを使用、幻魔皇帝が居ると思われる地域を纏めて消し飛ばす。

利点：スイッチ一つで可能な上、成功すれば原作が開始するまでは安全。
欠点：とっくの昔に耐久年数が過ぎてる為、稼動するか分からない上にどちらに転んでも覇界神に目を付けられることが確定する。

「……使ったのは何時だっけ？　確か襲ってきた死神共を消し飛ばした時だったか？」

とりあえず、案は四つ程出たわけだが……

「１と３は論外、４は保留で２で行くべきかなぁ……？」

結局、眠気が来るまでの間考え続けるも纏まる筈がなく、俺はあっさりと眠りについた。

――――――翌日陛下が執務室から脱走した為、代わりに仕事をする羽目になるとは知らずに……。

３７．今後のことを考えてみよう。（後書き）

何でアサルトバスターはフューラーザタリオンを保護したんでしょうか？
いや、そもそもあんなデカブツ何処に隠してたんでしょうか？

６５．「陛下が逃げたぞー！」
嵐騎士ガンマガンダム
遠征から帰ってきたキングガンダムの側近。
ＨＰ２４００

予告『アストレイの聖杯探索記』（前書き）

全く書けないのでこんなんを投稿してみました。
アストレイのスキルが多いのは本編終了後ということで！

予告『アストレイの聖杯探索記』

その日、薄暗い間桐の家の地下室で、一人の男――――間桐雁夜がその全てを掛けていた。

「閉じよ（みたせ）。閉じよ（みたせ）。閉じよ（みたせ）。閉じよ（みたせ）。閉じよ（みたせ）。繰り返すつどに五度。ただ、満たされる刻を破却する」

愛した人の大切な娘を助けるために、

「――――告げる」

地獄に墜とされて苦しんでいる少女を救う為に、

「――――告げる。汝の身は我が下に、我が命運は汝の剣に。聖杯の寄るべに従い、この意、この理に従うならば応えよ」

実の娘を地獄に突き落とした男を問い詰めるために！！

「――――誓いを此処に。我は常世総ての善と成る者、我は常世総ての悪を敷く者。

されど汝はその眼を混沌に曇らせ侍べるべし。汝、狂乱の檻に囚われし者。我はその鎖を手繰るもの――」

今ここに、狂気に染まった湖の騎士（ランスロット）を召喚する！！

「汝三大の言霊を纏う七天、抑止の輪より来たれ！」

……筈だった。

暴風と閃光とともに大量の煙が巻き起こり、雁夜の視界を覆う。

「っ！？　いったい何が……！？」

徐々に晴れていく視界を魔法陣の中央に向けると、そこには一人の……いや、一体の人型のロボットが立っていた。

人型と認識したのは手と足があったからだ。

１６０ｃｍの大きさで赤と黒を基調とし、薄汚れた鞄を背負っている。

ただ、雁夜が気になるのはその頭身であった。人の頭身は約７頭身前後である。

しかし、目の前のロボットは約３頭身しかない。

「……えっと、あんたが俺を召喚した魔術師？」

魔法陣より現れたロボットは血の涙を流し荒く呼吸を行う膝をついた雁夜に問いかける。

今此処に、遠い異世界を旅した騎士が現界した。

「俺は今回の聖杯戦争にてイレギュラークラス、騎士（ナイト）のクラスで現界したサーヴァント。名をアストレイと言う」

「……ナ、ナイト？」

バーサーカーを召喚する筈が、どう見ても人間ではない英霊を召喚してしまった雁夜。

「あ、一応言っとくけど俺物凄く弱いから！　戦闘なんて期待するなよ」
「はぁ！？」

正史には本来呼ばれる筈のなかった騎士は、召喚から1分と掛からずに己の主を（悪い意味で）驚かせた。

その英霊は騎士を名乗りながら騎士らしくなかった。

「一体お前は何なんだ？　……いや、そもそも人間か？」
「あー、こんな姿してるけど一応元人間だから」
「……に、人間？」
「俺のことは置いといて！　とりあえずこの家の要塞化からはじめるとするか！！」
「おい！？」

その騎士に恐ろしさなどなかった。

「……ロボット？」
「……胸糞悪いことやってるなー。俺の精神衛生の為にもお嫁に行ける身体にしておこうか？」

その騎士はセコかった。

「人形風情が！！　我の宝物を盗む気か！！」
「こんなにあるんだからケチケチすんな！」

その騎士は強かった。
「私のエクスカリバーを耐えた！？」
「危ねー！　極光壁張ってなかったら消し飛んでたぞ！？」

その騎士は意外にも律儀だった。
「うーん、誘ってくれるのは嬉しいんだけど」
「対応は応相談だが？」
「いや、かつてと今の主を裏切る気は無いから」

その騎士は卑怯だった。
「ケイネス様！？　貴様、それでも騎士か！？」
「フハハハハ！！　攻撃したら最後、お前の主は恐竜のエサだ！」
「外道が！」
「おやおや～？　そんな態度をとってもいいのかな～？」

その騎士は敵に容赦がなかった。
「神の狗め！！　私の邪魔をする気か！！！」
「いやいや、御宅の邪魔をする気は毛頭無いし？　寧ろあんたの味方だし？」
「……味方ですと？」
「そうそう！　俺があんたを聖女様（がいるあの世）のところに連

れて行ってやるよ」

その騎士の宝具は理不尽だった。

「……うわー、台所の悪魔みたい」

『我らが前に死ね』

「よろしい！　ならば援軍だ！『我が永遠（ザクウォーリア）の盟友！！』」

『うぉっしゃぁあああ』

その騎士はまさに悪だった。

「僕は世界を変える！　たとえ、”この世全ての悪”を担う事になろうとも！！」

「己の全てを賭けて戦う『勇者』でも世界を護る事は出来ても変えることは出来ない！

ましてや、俺やお前みたいな外道に世界を変えることなんて出来るわけがないだろうが！！」

その騎士は……

「じゃあな、マスター」

「……ナイト」

「あんたがこれから何をするかはわからない。

でもさ、深く考えなかったせいで永い時間を生きる羽目になった俺みたいにだけはなるなよ？」

「……ああ」

異世界からやってきた騎士の聖杯戦争、始まります。

Ｆａｔｅ／ｚｅｒｏ　ＡＳＴＲＡＹ

始まらない！

【クラス】ナイト
【マスター】間桐雁夜
【真名】アストレイ
【性別】男
【身長・体重】１５０ｃｍ、９０ｋｇ
【属性】中立・悪

【筋力】Ｃ　【魔力】Ａ
【耐久】Ｃ　【幸運】Ｃ
【敏捷】Ｂ＋【宝具】Ｅ～Ａ＋＋

【保有スキル】

逃亡B
敵から逃げ延びる能力。
ランクBなら大抵の相手から逃げられる。
ただし、このスキルが高ければ高いほど英雄としての霊格は低下していく。

神性D（A）
高い神性を持つが彼自身が神を嫌っているのと神の眷族ということを知らないためにランクダウンしている。

破壊工作C
戦闘の準備段階で相手の戦力を削ぎ落とす才能。ナイトの場合は錬金術を使用することで達人並みの技術となる。
ただし、このスキルが高ければ高いほど、英雄としての霊格が低下する。

魔術A
異世界の魔術から更に別の世界の魔術まで会得。

召喚術B＋
小動物から恐竜まで召喚して使役することが可能。

気配遮断A＋
自身の気配を消す能力。
創造神の探索から逃れるほどの技術を会得。

高速詠唱B
魔術の詠唱を高速化するスキル。一人前の魔術師でも一分は必要とする大魔術の詠唱を半分の三十秒で成せる。

錬金術Ａ
永い時間をかけ一流の技術を習得。

投擲Ｂ
武器を弾丸として放つ能力。

【宝具】
何でも入る鞄（ザック）
ランクＥ～Ａ＋＋

アストレイが所持している何でも入る鞄。
容量はほぼ無限で、ザックに入る物ならばたとえ呪われていても問題なく収容することが可能。
原則として生き物を入れることは不可能。
中にはテイルズシリーズに登場するただの石から時空を操る剣という規格外の物まで入っている。
ただし、中の物を取り出すには鞄に手を入れる必要があるので、某英雄王のように射出することは不可能。

我が永遠の盟友（　ザクウォーリア　）
ランクＢ
永い時間を共にした獣騎士ザクウォーリアをアストレイのサーヴァントとして召喚する。

我が永遠の愛機（ガンレックスＲ）
ランクＡ＋
アストレイの愛機である鬼械機兵を召喚する。
ただし、マスターである間桐雁夜から供給される魔力では数分間しか戦闘できない上に世界から修正を掛けられたせいで初期の状態に

まで弱体化されている。

予告『アストレイの聖杯探索記』（後書き）

ＥＸ「よろしい！　ならば援軍だ！『我が永遠の盟友（　ザクウォーリア）！！』」
騎士アストレイ
本編終了後のアストレイ。
ＨＰ１７０００

ＥＸ「うぉっしゃぁあああ！！」
獣騎士ザクウォーリア
本編終了後の獣騎士ザクウォーリア。
ＨＰ３４０００

38．ガンダムファイト、レディゴー！　前編（前書き）

分割して投稿！

38．ガンダムファイト、レディゴー！　前編

どうも、騎士アストレイです。
ガンマガンダムのお陰で陛下が仕事をするようになったので余裕のある生活を送っていたのですが……なんか、アーサーガンダムがしつこく勝負を挑んできます。

……というか、今も後ろから追ってきてます！！

「勝負しろ！！　アストレイ！！」
「断る！！　というか仕事しろ！！」
「それを断る！！　それに自分の仕事は終わらせてある！！」
「そもそも陛下の親衛隊が俺みたいな客員騎士に戦いを挑むな！！
俺はお前等みたいな規格外の騎士と違ってそれほど強くはないんだよ！！」

そう言って俺は走る速度を上げる。が、速度を上げれば上げただけ背後の騎士もその速度を上げる。

「あー！！　しつこい！」
「フハハハハ！　そんな虚言で俺を誤魔化せると思うなよ！
この俺が自信を持って断言する！　騎士アストレイ、お前は強い！！」
「凄まじく勘違いだ！！」

厄介な奴に目をつけられた己の不幸を嘆きつつ、俺は最近の出来事を思い返す。
元々の始まりはなんだったのだろうか？　そうあれは確か……

38．ガンダムファイト、レディゴー！　前編

そう、あれは確かザクウォーリアと一緒に食堂を目指して歩いていたとき、ザクウォーリアが「この城で一番強い騎士は誰だと思います？」と聞いてきたから、

「一番はアーサーガンダム、二番目が鎧騎士殿、三番目が陛下ってところじゃないか？」

俺は俺が考えている“今の段階”での上位三人の名を出してみた。

「……陛下は納得なんですが、正直アーサーさんよりもZ（ズィー）の坊主の方が強いような気がするんすが…」

「いや、まともに戦えば実力と経験が上のアーサーガンダムが勝つ」

若作りの顔と衰え知らずの実力のせいで忘れがちだが、あの男は僧正ガンタンクRと同年代なのだ。

頭も切れ腕も立つが、まだ経験不足の銀騎士殿では太刀打ち出来ないだろう。

「……時々思うんですが、アニキってまともに戦えばこの城で一番強いんじゃないっすか？」

「待て、その考えは凄まじくおかしいぞ」

俺が弱いのはお前が一番よく知ってるだろうに。
「いやいや、尽きない武器にその辺の野良騎士以上の剣技、その上強力な魔法まで使える。
……これの何処が弱いっていうんすか？」
「……お前ね、この城の騎士と正面から戦う俺の姿なんて想像できるか？」
「……できませんね」
そう言って苦笑するザクウォーリアを連れ、俺は食堂へと向かった。
……この時、俺達の会話をアーサーガンダムが聞いていたことに気づいてさえいれば後の展開を回避できたのではないだろうかと、悔やみに悔やんだのは言うまでもない。

・・・・・・・・・・・・・・
・・・・・・・・・・・・・・・・・
・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

――――とまぁ、そんな感じで追いかけっこを繰り広げていれば、執務室から開放された陛下の目にとまるのも自明の理というものなわけで、

「……余が地獄を見ている間に随分と楽しそうなことをしているな？」

げっそりと痩せこけた顔をした陛下はそう口にした後、俺にとっては最悪の、アーサーガンダムにとっては最高の催しを開催してくれやがりました。その名も……

“第一回騎士アストレイＶＳ騎士アーサーガンダム　真に強いのはどちらだ！！”

……第一回？　ということはその内二回三回もあるってこと？

ついでにこのお祭り騒ぎは何だ？　文官、兵士、騎士問わず見物に来てるんですが？

しかも陛下、あんたこの国を支える身でしょ？　何で解説にいんの？　馬鹿なの？　真正の馬鹿なの？

というか仕事しろ仕事！！　ガンマガンダムもＦ９０も「…やれやれ、仕方ないな」って顔して茶を啜るな！！

ていうかザクウォーリア！　テメェ賭け事をするな！　しかもアーサーガンダムの方が優勢じゃねぇか！！

あ！？　銀騎士殿？　死んだらその金で葬式しますよって冗談にもならないこと言うんじゃねぇえええええ！！

……あぁ、永い時間を生きてきたが今日で終わりかー。

もういっそのこと開き直ろう。ついでに自己暗示も掛けておこう。

俺は最強、俺は最強。俺は最強、俺は最強。俺は最強、俺は最強。ついでに俺の嫁は世界一っと。

……ふぅ、テンションも上がってきたことだし、ザックの中で埃被ってる“コレ”を装備してっと。

自己暗示と思いつきで造った“コレ”等で何処まで食いつけるかは分からないが、殺されたくはないので死ぬ気で殺るしかあるまい。

（……これ終わって生きてたらガンマガンダムにでも頼んで休暇貰おう）

そんなささやかな願いを胸の内に抱きつつ、俺はアーサーガンダムが待つ舞台に向かうのだった。

38．ガンダムファイト、レディゴー！　前編（後書き）

アーサーガンダムって何処かのゲームに登場したらしいんですが…
…セリフってあるんですかね？

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5920v/

ガンダムになった俺の異世界放浪記。

2011年11月21日11時26分発行